

不苦候條此旨管内國幣社へ可相違事

〔五〕一般社寺ノ神殿佛堂ニ裝飾シタル分ニ限リ菊御紋存置ヲ許ス 明治十二年五月二十二日 太政官達第貳拾三號使府縣

一般社寺ニ於テ菊御紋相用候儀不相成旨明治二年八月布告ノ趣モ候處右布告前神殿佛堂ニ裝飾シタル分ニ限リ其儘存シ置苦シカラス候此旨相違候事

〔六〕菊御紋章ヲ畫キタル賣品取締方 明治十三年四月五日 宮内省達乙第二號府縣

菊御紋章ヲ賣物等ニ畫キ候儀并紛敷品相用候儀モ不相成旨明治元年三月廿八日明治四年六月十七日太政官布告ノ趣モ有之候處近來往々賣品ニ御紋章ヲ畫キ候向有之哉ニ付取締方一層注意可致候此段相違候事

●伺指令

勸業博覽會賞狀等へ御紋章ヲ附スル儀ニ付伺指令 明治十七年三月十九日 岩手縣伺

本年四月廿一日ヨリ六月九日マテ五十日間當縣勸業場内ニ於テ勸業博覽會開設候儀ハ會テ主務者へ御届仕置候就テハ該會出品優劣ヲ審査シ其優等ナルモノへ夫々區分ヲ定メ賞狀賞牌及褒狀ヲ授與致度ニ付右賣品へ御紋章(菊御紋章)ヲ附シ候儀御届被降度別紙雜形五葉相副此段相伺候也

(別紙雜形略ス)

宮内省指令 明治十七年三月二十六日

書面伺之趣雜開届候事

●郡設共進會賞狀賣品へ桐章描畫ノ儀ニ付伺指令 明治十七年四月十二日 群馬縣伺

本年九月一日ヨリ向二十日間管下佐位郡伊勢崎町ニ於テ開設ノ佐位郡波聯合商共進會出品優等者へ附與候賞狀賣品共桐章描畫致度旨該會發起者ヨリ出願候ニ付願意御許可相成度此段相伺候也

宮内省指令 明治十七年四月十六日

書面伺ノ趣ハ禁令ノ限ニ非サル儀ト可心得事

●郡役所屋上へ菊御章掲出ノ伺指令 明治十七年五月十七日 静岡縣伺

郡役所支關屋上へ菊御章相附シ不苦候哉

宮内省指令 明治十七年五月二十三日

伺之趣雜開届候事

●桐章社寺ニ於テ用フル件ニ付伺指令 明治十六年七月四日 内務省伺

菊章ノ儀ニ就テハ度々御達ノ次第有之候處桐章ノ儀ハ是迄何等御達等無之右ハ一般社寺ニ於テ相用不苦儀ニ候哉往々伺出之向等有之取扱方差支候條此段相伺候也

太政官指令 明治十六年八月一日

伺之趣桐章ノ儀ハ相用不苦儀ト可相心得事

○第六類

○第一章 監獄 看守押丁

●監獄ニ係ル沿革要領

明治五年十一月第三百七十八號達ヲ以テ監獄則并圖式ヲ頒布シ各地方ニ於テハ先ツ禁囚所及懲役法ノミ規則ノ通  
 施行セシム○六年二月第七十一號布告ヲ以テ從來ノ徒場ヲ懲役場ト換稱ス○同年三月司法省第三十九號達ヲ以テ監  
 獄則頒布管杖實決廢止ノ處懲役セシメ地方ハ管杖實決ニ處スルヲ許ス○同年四月第百廿九號布告ヲ以テ監獄  
 則圖式ハ禁囚所及懲役法ノミ先ツ施行スヘキ旨達置タル處常分從前ノ通取計ハシム○八年一月第八號達ヲ以テ囚  
 人給與規則ヲ定ム○同年三月司法省第四號達ヲ以テ婦女ニ棒鉗ヲ用ユルヲ禁シ監獄則圖式ノ條ニ依リ處セシム○  
 同年十二月第二百十七號達ニ依リ監獄ノ事務ヲ內務省ノ管理ニ付ス○十年十二月第九十九號達ヲ以テ犯罪決放ノ者  
 本籍迄遞送ヲ廢ス○十四年三月第十三號達ヲ以テ八年第八號達囚人給與規則ヲ廢シ在監人給與規則ヲ定ム○同年七  
 月第六十四號達ヲ以テ在監人傭工錢規則ヲ定ム○同年九月第八十一號達ヲ以テ五年十一月第三百七十八號達監獄則  
 及本年第十三號達在監人給與規則第六十四號達在監人傭工錢規則ヲ合セ更ニ監獄則ヲ定ム

第九十五

監獄則

明治十四年九月十九日  
 太政官達第八十一號官省院(使)廳府縣

明治五年達監獄則及本年三月第十三號達在監人給與規則同七月第六十四號達在監人傭工錢規則  
 ナ合セテ別冊ノ通監獄則相定候條此旨相達候事  
 但明治十五年一月一日以後施行ノ刑法治罪法ニ關涉スル條件ハ同日ヨリ施行スヘシ  
 (別冊)  
 監獄則

第一編

第一章 汎則

第一條 監獄ヲ別テ左ノ六種ト爲ス

一 留置場 裁判所及ヒ警察署ニ屬スルモノニシテ未決者ヲ一時留置スルノ所トス但時宜ニ由リ拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スルコトヲ得

二 監倉 未決者ヲ拘禁スルノ所トス

三 懲治場 懲治人ヲ懲治スルノ所トス

四 拘留場 拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スルノ所トス

五 懲役場 懲役ノ刑及ヒ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘禁スルノ所トス

六 集治監 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル者ヲ集治スルノ所トス

北海道ニ在ル本監ハ徒刑流刑ニ處セラレタル者ヲ集治ス

第二條 監獄ハ内務卿ノ管轄ニ屬ス但陸海軍ノ管轄ニ屬スルモノハ此限ニ在ラス

第三條 集治監ハ内務卿之ヲ直轄ス留置場監倉懲治場拘留場懲役場ハ警視總監又ハ府知事

東京府ヲ除ク縣令之ヲ管理ス

第四條 此獄則ハ特ニ陸海軍ノ獄則ヲ以テ處スヘキモノニ適用スルコトヲ得ス

第五條 内務卿ハ毎年其所屬官吏ヲシテ各監獄ヲ巡閱セシムヘシ

警視總監府知事縣令ハ毎年三四次所轄ノ監獄ヲ巡閱スヘシ

裁判官檢察官ハ時々其裁判所ニ屬スル監倉ヲ巡閱スヘシ  
府縣會議員ハ臨時其府縣監獄ヲ巡閱スルヲ得

第六條 在監人ト稱スルハ未決已決ノ者及ヒ第十九條第三十條ニ記載シタル者ヲ云フ

第七條 在監人ヨリ司獄官吏ノ處置ニ對シ若シ苦情ヲ訴ヘントスルトキハ第五條第一項第

二項ニ記載シタル官吏巡閱ノ際封書又ハ口述ヲ以テ申告スルコトヲ得

第二章 監署ノ規定

第八條 司獄官吏在監人ヲ管束スルハ一ニ和平ヲ乘リ罰例ニ照シテ犯則者ヲ決責スルノ外

恣ニ責罰スルヲ得ス

第九條 典獄監守長ハ日夜不時ニ監房ノ内外ヲ視察シ或ハ物件ヲ查閱シ其他囚徒ノ傲惰ヲ

生シ脱越等ノ事ナカラシムルヲ要ス

第十條 新ニ入監スル者アルトキハ典獄先ツ拘引狀拘留狀收監狀又ハ處刑宣告書等ノ文書

ヲ查閱シテ之ヲ領シ其領收ノ證ヲ引致シ來タル者ニ交付ス其文書ナシシテ引致セラレタ

ル者ヲ入監スルヲ得ス

未決者ノ中共犯人アルトキハ其監房ヲ別異シ談話通聲ヲ禁シ法庭ニ引致ノ時モ同往セシ

ムルヲ得ス

已決囚ハ第十六條ニ記載シタル差別ニ從ヒ其監房ヲ別異ス

第十一條 入監ノ婦女乳兒三歲未滿ヲ携帶セント請フ者アルトキハ之ヲ許ス

第十二條 新ニ入監スル者アルトキハ名籍ノ様本ニ照シ其要項ヲ詳録シ一小房内ニ於テ通

身ヲ搜檢シ利器其他ノ物件ヲ夾帶スルヲ拒クヘシ懲治人ノ監舎ニ入ルトキモ亦同シ

第十三條 總テ監房ニ入ル、物品ハ典獄一々之ヲ精驗シ其危險ノ虞アルモノハ一切之ヲ禁

スヘシ

第十四條 總テ入監人ノ携有スル財貨物件ハ悉ク點檢シテ其名數ヲ簿冊ニ記載シ典獄一々

證印シテ之ヲ領置シ釋放ノ時還付スヘシ但點檢ノ際隱匿セシ貨物ハ沒收ス

第十五條 在監人書籍ヲ看ント請フトキハ新聞紙及ヒ時事ノ論說ヲ記載スルモノヲ除キ修

身又ハ營業ニ必要ナルモノ、ミヲ許スヘシ

第十六條 已決囚ハ各刑名ニ從テ其監房ヲ別異シ又其中ニ就テ左ニ記載シタル者ヲ別異ス

一 十六歳未満ノ者ト滿十六歳以上ノ者

二 滿十六歳以上二十歳未満ニシテ再犯以上ノ者ト同上ノ年齢ニシテ初犯ノ者

三 初犯ノ者ト再犯以上ノ者

第十七條 要犯疑獄ニ係ル者ヲ拘禁スル未決監ニ於テハ其氏名ヲ呼ハス番號ヲ以テ之ニ換

フヘシ但著表ノ外襟ニ白布ヲ縫著シ其番號ヲ墨書シ監房ヲ出入スル毎ニ皂布ヲ以テ覆面

シ當眼ノ所ニ小孔ヲ穿テ共犯者ヲシテ共ニ拘禁ノ身タルヲ窺探スルヲ得サラシム

第十八條 放恣不良ノ者ヲ懲治場ニ入レ矯正歸善セシメント其尊屬親ヨリ願出ルトキハ第

二十條第一項ノ例ニ照シテ處分スヘシ

矯正歸善ノ爲メ懲治場ニ入ルヘキ者ノ年齢ハ滿八歳以上滿二十歳以下ヲ限トス

第十九條 懲治人ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ

一 刑法第七十九條第八十條第八十二條ニ從ヒ懲治場ニ留置スル幼年ノ者及ヒ瘡痍者

二 尊屬親ノ情願ニ由テ懲治場ニ入タル者

第二十條 前條第二款ニ記載シタル懲治人ハ戶長ノ證票ヲ具スルニ非レハ入場ヲ許サス但

在場ノ時間ハ六箇月ヲ一期トシ二年ニ過ルヲ得ス

入場ヲ請ヒシ尊屬親ヨリ懲治人ノ行狀ヲ試ル爲メ宅舎ニ帶往セント請フトキハ其情狀ニ

由リ之ヲ許スヘシ

第二十一條 懲治人ハ左ノ年齢ニ從ヒ其居房ヲ別異ス

一 十六歳未満ノ者ト滿十六歳以上ノ者

二 滿十六歳以上二十歳未満ニシテ再ヒ懲治場ニ入シ者ト同上ノ年齢ニシテ初テ入場ス

ル者

第二十二條 在監人ヲ他監ニ移ストキハ其名籍又ハ處刑ノ宣告書其他必用ノ文書及ヒ領置

ノ貨物ヲ具シテ送致スヘシ其發遣ノ途中ニ在テノ行狀ハ押送官吏之ヲ記述シテ典獄ニ知

會スヘシ

在監人ヲ裁判所又ハ他監ニ押送スルトキハ戒具ヲ用ヒ男ト女ヲ別ツヘシ但懲治人ハ戒具

ナ用ヒス

第二十三條 典獄ハ看守長及ヒ看守ヲシテ常ニ在監人ノ行狀ヲ録サシメ賞罰ヲ行フノ考據トナスヘシ

第二十四條 賞表ヲ與ヘタルトキハ賞譽簿ニ其氏名及ヒ賞詞ヲ記載シ視奪シタルトキハ之ヲ删除スヘシ但其賞罰ヲ行ヒタル旨ヲ囚徒ニ示スハ第二十六條ノ例ニ依ルヘシ

第二十五條 特赦アリタルトキハ速ニ其旨ヲ内務卿ニ申報スヘシ

第二十六條 特赦ヲ受タル者アルトキハ免役日若シハ日曜日ノ午後ニ在テ他ノ囚徒ヲ集メ其旨ヲ聽カシメ仍ホ之ヲ揭示スヘシ

第二十七條 假出獄ヲ許サレタル者ニハ證票ヲ與ヘ最近ノ警察署ヘ護送スヘシ  
監署ニ領置セシ金錢ハ出獄者ニ携帶セシメス其金員ヲ録シテ居住スヘキ地ノ警察署ニ送致スヘシ

其居住スヘキ地ノ隔遠スル者ニハ途中支用トシテ前項ノ金員若干ヲ交付スヘシ  
十七年第三十號公達ヲ以テ全條改正

第二十八條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者其刑期間ハ典獄ニ於テ營業ノ方法ヲ指示シ其來署ヲ要スルトキハ召喚スルコトヲ得

第二十九條 在監人中能ク獄則ヲ守ル者ヲ撰テ傳告者誘工者トナス傳告者ハ官吏ノ命令ヲ在監人ニ傳ヘシメ誘工者ハ工場ニ在テ服役者ヲ勸誘セシム但傳告者誘工者ハ滿六ヶ月以

十七年内務司法兩省乙第三十二號達(第一百七十八ノ十六項)參看

上其用務ヲ繼續セシムルヲ得ス

傳告者及ヒ誘工者ハ私ニ在監人ヲ使役シ若シハ凌辱スルノ所爲アルヲ許サス

第二十條 刑期滿限ノ後頼ルヘキ所ナキ者ハ其情狀ニ由リ監獄中ノ別房ニ留メ生業ヲ營マシムルヲ得

第二十一條 刑期滿限ノ者ヲ解放スルハ滿期ノ翌日午前第十時ヲ過ヘカラス

第二十二條 死刑ノ執行ハ午前第十時ヲ過ルヲ得ス其執行中ハ看守ヲシテ嚴ニ刑場ノ門戸ヲ護ラシムヘシ

其遺骸ハ死相ヲ驗シタル後仍ホ二分時ヲ過サレハ埋葬若クハ下付スルコトヲ得ス

第二十三條 刑死者又ハ死亡者アルトキハ其年月日時ヲ記シ典獄ヨリ本籍ノ〔戸長〕及ヒ近地ノ親屬若クハ故舊ニ通知スヘシ其監署ニ領置シタル貨物ハ親屬ニ下付ス若シ親屬ナキトキハ遺骸ヲ領取シタル故舊ニ之ヲ下付ス但死者ノ身ニ纏ヒタル衣服ハ此限ニ在ラス

親屬遠地ニ在テ物品ヲ送付スルニ入費ヲ要スルモノハ其物品ヲ販賣シテ代價ヲ遞付スルコトヲ得但送費ハ親屬ノ自辨トス

若シ其物件又ハ代價ヲ受クヘキ者ナキトキハ之ヲ沒收ス

第二十四條 在監人逃走スル者アル時領置ノ貨物ハ前條ノ例ニ依テ處分スヘシ但沒收ハ逃走ノ日ヨリ滿一箇年ヲ經ルノ後ニ非レハ之ヲ處分スルコトヲ得ス

領置ノ工錢ハ第五十七條ニ照ラシテ處分スヘシ

第三十五條 監獄ノ近境ヨリ發火シテ罹災ノ虞アルトキハ司獄官吏其形勢ヲ量リ在監人ヲ他所ニ押送シ其災ヲ避シムヘシ  
水火風震其他激甚ナル變災ニ際シ在監人ヲ押送スルノ迫ナキトキハ要犯疑獄ニ係ル者ヲ除クノ外一時解放スルヲ得

第三章 監獄ノ構造

第三十六條 留置場監倉懲治場拘留場懲役場ハ每府縣ニ置キ集治監ハ適當ノ地ニ之ヲ置クモノトス  
留置場監倉懲治場拘留場懲役場一區畫内ニ在ルモノハ牆壁ヲ以テ之ヲ區畫スヘシ

第三十七條 未決監已決監及ヒ懲治場ハ男監女監ノ別ヲ嚴劃スヘシ  
甲ノ監房ニ在ル者ト乙ノ監房ニ在ル者ト彼是交談シ又ハ物件ヲ交遞スルノ便ヲ得サラシムヘシ各監房ノ鑰匙ハ其製式ヲ同クシ甲乙適用スルヲ要ス

第三十八條 密室ハ監倉ニ設ケ他人ト交通スルコトヲ得サラシムヘシ  
關室ハ已決監ニ設ケ暗ニ空氣ヲ通セシメ毫モ光線ヲ通セシメサルヲ要ス

密室關室ハ一室一人ヲ限トス  
第三十九條 接見室ハ監倉ノ首部ニ設ケ其壁面ニ方三尺ノ口ヲ開キ之ニ縱横ノ格子ヲ俵メ

格子ヨリ三尺許ヲ距リ柵欄ヲ設ケ在監人ハ格子内ニ立シメ外人ハ格子外ノ柵欄ニ倚ラシムヘシ但懲治人ノ接見室ハ此例ヲ用ヒス

第四十條 燈火ハ監房外ニ置キ障礙スルノ虞ナカラシムヘシ

第四十一條 死刑場ハ監獄ノ一隅ニ設ケ牆壁ヲ以テ外見ヲ防クヘシ

第二編 第一章 役法 附時限

第四十二條 定役ニ服スル者ノ作業ハ刑名ニ因テ之ヲ斟酌シ每囚一日ノ科程ヲ定メテ服役セシム滿十二歳以上十六歳未滿ノ者滿六十歳以上ノ者及ヒ病後ノ疲勞若クハ身體ノ虛弱ニ因リ勞作ニ勝ヘサル者ハ體力ニ應シ作業ノ科程ヲ寬恕ス

若シ已ムヲ得ス外役ニ服セシムルトキハ鐵鎖ヲ用テ二囚毎ニ聯絆シ笠ヲ用テ其面ヲ掩ハシム但外役ノ囚徒ハ一組十人以上十五人以下ト定メ看守一人押丁二人以上ヲシテ之ヲ監セシム

外役ノ囚徒道路往來スル時ハ務メテ他人通行ノ妨ト爲ラサラシムルヲ要ス

第四十三條 毎日囚徒ヲシテ役ニ就カシムルニ際シ悉ク之ヲ監房外ニ整列セシメ看守長及ヒ監守點檢ヲナスヘシ歸監セシムル時モ亦同シ

第四十四條 左ニ記載シタル日ハ服役ヲ免ス父母ノ喪ニ遭フ者モ亦一日免役ス

一月一日 元始祭 孝明天皇祭 紀元節 春季皇靈祭

一月二日

元始祭 孝明天皇祭 紀元節 春季皇靈祭

第六類 第一章 監獄 看守押丁 百三十九

神武天皇祭

秋季皇靈祭

神嘗祭

天長節

新嘗祭

十二月三十一日

第四十五條 囚徒ノ專習スヘキ工業ハ授業手若クハ工業殊等ノ囚チシテ之ヲ導カシム其刑期一年以下ノ者ニハ習熟シ易キ工業ヲ授ルヲ要ス

第四十六條 定役ニ服セサル囚徒ト雖モ典獄之ヲ勸誘シテ其將來ノ生業ヲ計リ攝生又ハ親屬扶助ノ爲メ勞作セント請フニ至ラシムルヲ要ス其工業ノ種別ヲ定ムルハ典獄ノ指示ニ依ル

未決監ニ在ル者坐作ノ業ヲ爲サント請フトキモ亦同シ

第四十七條 懲治人ニハ教誨ニ充ル爲メ服役時間表ニ準シ七時ニ過キサル時間 休憩時間ヲ除 農業

若クハ工藝ヲ教ヘ力作セシムヘシ

○時限

第四十八條 未決者及ヒ定役ニ服セサル囚徒ハ已決囚ハ毎朝日出ノ頃ニ起床シ各其監房ヲ掃除シ畢リ喫飯セシム又毎日一時間以内監房外ニ於テ運動ヲ許ス

第四十九條 定役ニ服スル者ハ毎朝日出ノ頃ニ起床シ各其監房ヲ掃除シ畢テ喫飯セシム其起床ヨリ約于一時間ヲ經テ役ニ就カシメ午前十時前後ニ至テ湯若クハ水ヲ與ヘ正午十二時ニ至リ休役ス飯後暫時休憩シ再ヒ就役日没前罷役セシム其時間ハ別表ニ之ヲ定ム但時

宜ニ由リ其時間ヲ伸縮スルヲ得

起床還房及ヒ就役罷役其他ノ動止ヲ令スルハ鈴若クハ柝ヲ以テシ全監一齊ニ動止セシム

第五十條 科程ヲ終リタル者ハ時限ニ拘ハラズ罷役セシム

午飯ニ就カシムルノ際科程ノ大半ヲ爲シ得タルヤ否ヲ檢視スヘシ若シ儉懶ニシテ怠役スル者ハ飯後ノ休息ヲ許サス

第二章 工錢

第五十一條 定役ニ服スル囚徒現役一百日ヲ經レハ始テ各自ノ工錢ヲ料定シ之ヲ十分シテ重罪囚ニハ其一分輕罪囚ニハ其二分ヲ與ヘ餘分ハ之ヲ監署ニ收ム 十四年第九十號公達ヲ以テ(五分及(其ノ一分)ノ下ニ(輕罪囚ニハ其二分)ノ八字ヲ加フ)

定役ニ服セサル囚徒及ヒ未決者并ニ第十九條第一款ニ記載シタル懲治人ニシテ作業スル者ノ工錢ハ十分シテ其三分ヲ監署ニ收メ其七分ヲ與フ定役ニ服スル囚徒ニシテ當日ノ科程ヲ畢テ仍ホ作業スル者科程外ノ工錢ハ之ニ準ス 同上(未決者)ノ下(並ニ)以下十八字ヲ加フ

第五十二條 尊屬親ノ情願ニ由テ懲治場ニ入タル者其尊屬親ヨリ衣食費ヲ自辨スル者ノ工錢ハ其全分ヲ與ヘ衣食費ヲ自辨スルヲ能ハサル者及ヒ刑期滿限ノ後頼ルヘキ所ナシシテ監署傍ノ別房ニ留置シタル者ハ其工錢ノ内ヨリ衣食費ヲ扣除シ餘分ハ之ヲ與フ

第五十三條 在監人ニ與フヘキ工錢ハ監署ニ領置シ毎月ノ首ニ於テ其前月ノ總計金額ヲ本人ニ知ラシムヘシ

第五十四條 各種ノ工錢ハ其地普通ノ傭工錢ヲ準トシ各自ノ技能ニ應シ一日若干錢ト定ムヘシ

第五十五條 監署ニ領置ノ工錢ハ本人ノ請ニ由リ親屬ニ贈與スルヲ許シ又ハ書籍其他必要ノ物品及ヒ第六十九條ニ從ヒ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルヲ得

第五十六條 在監人死亡シ監署ニ領置ノ工錢アルトキハ親屬ニ下付ス親屬ナキトキハ遺骸ヲ領取シタル故舊ニ下付ス若シ下付ヲ受ヘキモノナキトキハ之ヲ沒收ス

第五十七條 在監人若シ逃走シタルトキハ已決囚ノ工錢ハ之ヲ沒收ス未決者及ヒ懲治人ノ工錢ハ其親屬ニ下付ス親屬ナケレハ之ヲ沒收ス

第三章 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ヲ受タル囚徒押送

第五十八條 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ヲ受タル者アルトキハ其宣告書ノ謄書ヲ具シテ内務卿ニ申報シ其指揮ニ從ヒ警察遞傳ヲ以テ集治監ニ押送スヘシ

北海道集治監ニ於テ管束スヘキ徒流刑ノ囚徒ハ本監官吏ノ臨時派出シタル地マテ押送スヘキモノトス

第五十九條 北海道ニ在ル集治監ハ毎歲三四次官吏ヲ派出シ前條第二款ノ例ニ從ヒ押送シタル徒流刑ノ囚徒ヲ受取ヘシ

第六十條 徒刑流刑ノ囚徒ヲ押送スル時ハ戒具ヲ用ヒ男囚ト女囚トヲ別ツヘシ遞船中ニ在テハ戒具ヲ用ヒサルモ妨ケナシ

第四章 假出獄免幽閉ノ者ニ貸與スル屋舎

第六十一條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者其地ニ居住スヘキ家ナキトキハ屋舎ヲ貸與スヘシ

屋舎ヲ構造スルハ將來市街村落ヲ創置スルノ便ヲ計畫スルヲ要ス

第六十二條 假出獄免幽閉ヲ受ケタル徒刑流刑ノ者其配偶者又ハ其他ノ親屬ヲ招キ同居セント請フトキハ典獄將來營生ノ方法ヲ取亂シ之ヲ許否スヘシ

前項ノ請ヲ許ストキハ其配偶者又ハ其他ノ親屬現住スル地ノ戸長ニ通告スヘシ其徒刑流刑ノ者嫁娶ヲ爲サントスルトキハ監署ニ申告セシメ典獄之ヲ許否スヘシ

第三編

第一章 給與

第六十三條 已決囚ノ獄衣類ハ總テ之ヲ貸與ス

第六十四條 未決者ノ衣類ハ總テ自辨トシ臥具ハ之ヲ貸與ス若シ臥具ヲ自辨セント請フ者ハ之ヲ許ス貧困ニシテ衣類ヲ自辨スルヲ能ハサル者ニハ之ヲ貸與ス

第六十五條 已決囚ノ獄衣ハ赭色トシ懲治人ノ衣服ハ淺葱色トス

第六十六條 獄衣ハ總テ筒袖トシ長短二種ニ別ツ男ノ通常服ハ長衣就役服ハ短衣トシ女服ハ總テ長衣トス

獄衣ノ外襟ニハ白布ヲ縫着シ之ニ番號ヲ墨書スヘシ

第六類 第一章 監獄 看守押丁



第六十七條 在監人ニ貸與スル衣類雜具

通常服

- 一 單衣
- 一 裕
- 一 綿入衣
- 一 襦袢
- 就役服
- 一 單短衣
- 一 袷短衣
- 一 綿入短衣
- 一 襦袢
- 一 股引
- 雜具
- 一 蒲團
- 一 蚊帳
- 一 莞筵
- 一 枕

- 一 帶長三
- 一 褲長三
- 一 手巾
- 一 篋
- 一 笠

以上ノ貸與品ハ地方ノ便宜ニ依リ之ヲ斟酌取捨シ澁濯補綴シテ其用ニ充ルヲ得

第六十八條 在監人一人一日ノ食糧

- 一 下白米十分ノ四
  - 一 挽割麥十分ノ六
  - 一 同
  - 一 同
  - 一 同
  - 一 同
  - 一 菜
- 七合 強キ力業ニ服スル者
- 五合 輕キ力業ニ服スル者
- 四合 工役ニ服セサル者及ヒ滿十歲以上ノ未決者
- 三合 十歲未滿ノ幼者
- 金一錢五厘以下

地方ノ便宜ニ依リ粟稗ノ類ヲ以テ麥ニ代用スルコトヲ得

第六十九條 工業ニ勉勵シテ食費ヲ償フヘキ工錢ヲ得ル者及ヒ其幾倍ヲ得ル者等ニハ其請ニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得但一日金三錢ヲ過ルコトヲ得

定役ニ服セサル者ニハ其請ニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得

但一日金五錢ヲ過ルコトヲ得ス

第七十條 在監人日用ノ雜費 淋瀝補綴又ハ炊用ノ薪炭 一人一日金一錢二厘以下トス

第七十一條 監房常置ノ器具

一貯水器并ニ飲器

木製

一唾壺

同

一便器

水製大小二種但監房ニ廁圍ノ接續スルモノニハ此器ヲ用ヒス

一小箒

草ノ種類ヲ以テ製作セシ軟カナルモノ

一洗手盆

木製

第七十二條 浴湯ノ定度ハ毎年六月ヨリ九月マテハ五日毎ニ一次十月ヨリ五月マテハ十日毎ニ一次トス

第七十三條

已決囚及ヒ懲治人ノ髮ハ常ニ之ヲ短雜シ鬚鬚アル者ハ常ニ剃除セシム但未決者ハ此限ニ在ラズ

婦女ノ梳髮ハ膏ヲ用ヒテ裝飾スルヲ許サズ

第七十四條 衣類雜具其他ノ物品ハ種質ニ由リ時々熱湯ヲ用ヒテ之ヲ滌ヒ臭氣ヲ去リ蟲害ヲ防クヲ要ス但病者ノ物品ト混一シテ之ヲ晒洗スヘカラス

第二章 疾病 附死亡

第七十五條

在監人疾病ニ罹レハ病狀ノ輕重ヲ料リ其監房若クハ病室ニ於テ醫療セシム

懲治場ニ在ル者ハ情狀ニ由リ其親屬ニ交付スルコトヲ得

第七十六條 病者ノ攝養ニ効アル飲食物又ハ温ヲ取ル湯婆等ヲ用ルコトヲ要スルトキハ醫師ヲシテ其旨ヲ證明セシメ典獄之ヲ考檢シテ許否スヘシ

第七十七條 傳染病侵襲ノ兆アルトキハ其消毒豫防ヲ縝密ニスヘシ若シ在監人中傳染病者アルトキハ直ニ病性及ヒ感染ノ形狀ヲ詳悉シ醫師ノ診察書ヲ副へ各其所屬長官ニ報告スヘシ

○死亡

第七十八條 在監人死亡スレハ典獄看守長醫師并瘞テ之ヲ驗屍スヘシ

未決者又ハ已決囚ニシテ別故アリ再ヒ訊問ニ係ル者死亡シタルトキハ之ヲ其裁判所ニ申報スヘシ

第七十九條 死者ノ親屬若クハ故舊第三十三條ニ記載シタル時限ヨリ二十四時以内ニ在テ遺骸ノ下付ヲ請フトキハ之ヲ許シ其者ヲシテ簿冊ニ署名押印又ハ花押セシムヘシ

遺骸ヲ請フ親屬故舊ナキトキハ棺ニ入テ假葬シ其上ニ氏名標ヲ建ツヘシ其標ハ約子面三寸長三尺五寸トス

第三章 書信

第八十條 已決囚其親屬故舊ニ信書ヲ贈ルハ六箇月間ニ一次トシ一通ニ過ルコトヲ得ス但其他官司ノ訊問等ニ由テ書信ヲ要スルトキ又ハ親屬故舊ニ回答セント請ヒ司獄官吏ニ於

第六類 第一章 監獄 看守押丁

百四十七

テ法律ニ觸ルコトナク且必用ト認メタルモ此限ニ在ラス

第八十一條 未決者ニ係ル信書ハ定限ナシ但豫審判事又ハ檢事ノ檢閲ヲ經ルニ非レハ贈答セシムルヲ得ス

第八十二條 懲治人及ヒ幼年ノ已決囚其親屬故舊ニ贈ル信書ハ一個月一次トシ一通ニ過ルコトヲ得ス

第八十三條 在監人ノ發スル信書ハ典獄之ヲ檢閲スヘシ若シ書中忌諱ニ涉ル等ノ文意アルトキハ通信ヲ許サス

第八十四條 外人ヨリ在監人ニ贈リ來タル信書ハ典獄之ヲ檢閲シ適正ノ事項ヲ述ヘ又ハ遷善ノ諭示ヲ主トシタルモノニ限り之ヲ本人ニ付與シ若シ在監人ノ改悛ヲ妨ルモノト認ルトキハ之ヲ付與セス

第八十五條 信書ヲ檢閲スルハ先ツ直行ヲ順讀シ次ニ逆讀斜讀又ハ橫讀シ嫌疑ノ文意アリヤ否ヲ詳查スヘシ

第八十六條 在監人ヨリ發スル信書ハ必ス書信紙ヲ用ヒシメ典獄之ヲ緘シ封皮ニ其受領スヘキ者ノ住所氏名ヲ書シ某監獄署ト記シ之ヲ遞送ス但郵便稅ハ自辨セシム親屬故舊若シハ辨護人ノ信書ハ監獄署ニ宛之ヲ差出サシムヘシ

第四章 接見

第八十七條 在監人ニ接見セント請フ者アルトキハ典獄先ツ之ニ面接シテ其氏族籍營業

等ヲ訊ヒ其緣由ヲ詳悉シ已ムヲ得サルノ事情アリテ形跡ノ疑フヘキトキハ之ヲ許シ看守長看守并蒞テ面會セシム但密室ニ在ル者ハ接見ヲ許サス

面會ノ時間ハ三十分時ヲ過ルヲ得ス若シ面會ヲ請ヒシ旨趣ニ違フ談話ヲナシタルトキハ直ニ之ヲ停止ス

第八十八條 死刑ノ執行及ヒ徒刑流刑禁獄ノ刑ヲ受タル囚徒ヲ集治監ニ押送ノ以前親屬故舊其囚徒ニ面會セント請フトキハ前條第一項ノ例ニ依テ之ヲ許ス但面會ノ時間ハ五十分時ヲ過ルヲ得ス

第五章 差入品

第八十九條 未決者及ヒ懲治人ニ其親屬故舊ヨリ書籍用紙衣服臥具又ハ飲食物炊煮ヲ要セサルモノニシテヲ贈ラント請フトキハ之ヲ許ス但酒又ハ煙草其他攝生ニ害アルモノハ此限ニ在ラス

第九十條 已決囚ニハ書籍用紙ノ外一切差入品ヲ許サス

第九十一條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者親屬故舊ヨリ金錢衣服家具等ノ寄贈ヲ受ケタルトキハ其旨ヲ典獄ニ申告セシムヘシ

第四編

第一章 教誨

第九十二條 已決囚及ヒ懲治人教誨ノ爲メ教誨師ヲシテ悔過遷善ノ道ヲ講セシム

第六類 第一章 監獄 看守所

第九十三條 教誨ハ免役日又ハ日曜日ノ午後ニ於テ其講席ヲ開クモノトス

第九十四條 懲治人ニハ毎日三四時間讀書習字算術度量圖書等ノ科目中ニ就キ之ヲ教フヘキモノトス

學科ハ懲治場ノ教場ニ於テ之ヲ研究セシメ其學業ノ進歩ヲ表スル爲メ就學ノ年月卒業ノ科目學業ノ優劣及ヒ行狀ノ良否氏名年齢等ヲ簿冊ニ記載シ巡閱官吏ノ檢閲ニ供シ又ハ其尊屬親ニ示スコトアルヘシ

第九十五條 各監房内ニ左ノ諸款ヲ揭示シ傍訓釋義シテ解シ易カラシムヘシ若シ文字ヲ識ラサル者アレハ入監ノ時ヨリ二十四時間内ニ於テ之ヲ讀ミ聽カスヘシ

揭示

- 一 在監人ハ常ニ教令ヲ謹守スヘシ
- 一 平日互ニ和順ヲ主トシ教誨聽聞ノ席ニ就クトキハ慎テ容止ヲ正フスヘシ 未決監ニハ此款ヲ除ク
- 一 毎朝父母若クハ其墳墓所在ノ方位ニ向テ拜禮スヘシ
- 一 毎朝常用ノ諸器具ヲ清潔ニシ之ヲ排列シテ點檢ヲ受ケ及ヒ席壁間等ヲ掃除スヘシ
- 一 窓壁若クハ物件ヲ汚損シ不淨器ノ外ヘ唾キ貯水ヲ濫用スルヲ禁ス
- 一 監外ニ出タル時其途上ニ於テ全往ノ者ト交談シ及ヒ手ヲ交ヘ或ハ路人ニ聲語スルヲ禁ス
- 一 夜間ハ最モ鎮靜ヲ主トシ說話或ハ發聲又ハ濫リニ起步スルヲ禁ス但晝間ト雖モ放歌喧

噪又ハ高聲ニ誦讀スルヲ禁ス

一 許可ヲ得サル物品ヲ監房ニ置キ或ハ勝負ヲ競ヒ若クハ賭博類似ノ惡戯ヲナシ或ハ同房ノ者ニ汚辱ヲ蒙ラシメ猥褻ニ涉ルカ如キ所爲アルヲ禁ス

一 服役中其作業ニ關セサル他事ヲ交談シ及ヒ休憩ノ時間部外ノ工場ニ至ルヲ禁ス 未決監ニハ此款ヲ除ク

一 許可ヲ得スシテ衣食其他ノ物件ヲ受與貸借スルヲ禁ス

一 監房ニ於テ異常ノ事アレハ晝夜ニ拘ラス直ニ看守所ニ通聲スヘシ

一 日没後ハ發病スルモ其症急劇ナルニ非レハ翌朝ニ至テ醫療ヲ乞フヘキモノトス若シ劇症ナルトキハ直ニ看守所ニ通聲スヘシ

一 獨居ノ者卒カニ病ヲ發シタルトキハ監房ヨリ看守所ニ架スル所ノ響器繩ヲ引キ以テ之ヲ報スヘシ

一 病者アルトキハ同房ノ者共ニ介保ニ力ヲ致スヘキハ勿論其看病人ヲラシムル者ハ切實ニ之ヲ看病スヘシ

一 水火風震等ノ際解放ニ遭フ者ハ其解放ノ時ヨリ二十四時内ニ監獄署又ハ警察署ニ其旨ヲ申出ツヘシ

右ノ諸款ニ違フ者及ヒ違フ者アルヲ知テ告ケサル者又ハ官吏ヨリ犯者ヲ問フニ當リ之ヲ舉サル者ハ其情狀ヲ量リ處分スヘキモノナリ

年月日

某監獄署

第二章 賞譽

第九十六條 已決囚獄則ヲ謹守シ且改悛ノ行爲著キ者ト典獄ニ於テ確認スルトキハ之ヲ賞譽スヘシ

第九十七條 賞譽セシ者ニハ賞譽セシ毎ニ之ヲ表スル爲メ獄衣ノ左袖ノ裏面ニ方二寸曲ノ淺色ノ布ヲ縫着スヘシ

第九十八條 賞表ハ假出獄免幽閉又ハ特赦ヲ具狀スルノ考據ト爲スヲ得

第九十九條 賞表ヲ得タル者コハ二箇月ニ一次親屬故舊ニ接見及ヒ通信スルヲ許ス

第一百條 已決囚若シ在監人ノ逃走ヲ密告又ハ捕得シ或ハ監獄ニ係ル水火災ヲ防禦シ人命ヲ救援シタル者アレハ金二十五錢以下ヲ賞與シ其賞金ハ監署ニ領置シ本人ノ請ニ由リ必用品又ハ食物ヲ購求スヘシ但シ第九十七條ノ賞表ヲ與フルノ限ニ在ラス

第一百一條 未決監ニ在ル者前條ノ勞動アルトキハ之ヲ錄シテ檢察官及ヒ裁判官ノ參考ニ供スヘシ

第一百二條 懲治人第百條ヲ適シタル勞動アルトキハ金二十五錢以下ヲ以テ適宜物品ヲ購ヒ之ヲ與フヘシ

第三章 懲罰

第一百三條 已決囚獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス

刑法附則(第  
二百七十八ノ  
一項)第三章  
參看

一 絶信 親屬故舊ト書信接見ヲ絶ス

二 屏禁 晝夜他ノ監房又ハ工場ト隔絶シタル監房ニ獨居セシメ服役時限表ニ照シテ座作ノ役ヲ科ス

三 減食 常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯二品ノ外菜ヲ與ヘス

四 閤室 閤室ニ入レ常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯二品ノ外菜ヲ與ヘス仍ホ臥具ヲ禁ス

第一百四條 絶信屏禁ハ有限若クハ無限ト爲シ減食閤室ハ七晝夜ヲ限トス

減食閤室七晝夜ニ滿ルモ改悛ノ狀ナキトキハ一旦之ヲ免シ更ニ之ヲ科スルコトヲ得

第一百五條 懲治人及ヒ十六歳未滿ノ已決囚獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス

一 獨愼 晝夜一室ニ獨居セシム

二 減食 常食ノ半以内ヲ減ス但菜ヲ減スルノ限ニ在ラス

第一百六條 獨愼ハ七晝夜以内減食ハ三日以内トス

第一百七條 未決者及ヒ拘留ノ刑ヲ受ケシ者教令ニ順ハス或ハ同監ノ者ヲ煽惑シ又ハ其他ノ規則ヲ犯ストキハ所犯ノ輕重ヲ量リ第百三條第百五條ニ準擬シ減食スルコトヲ得

第一百八條 賞表ヲ有スル者處罰ヲ受タルトキハ賞表一個又ハ數個ヲ褫奪ス

第一百九條 無期徒刑ノ囚徒逃走シ若クハ獄舎獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シ其他重罪輕

第六類 第一章 監獄 看守押丁

罪ヲ犯シタルトキハ三月以上五年以下兩脚又ハ一脚ニ鉄ヲ施シ仍ホ鐵丸ヲ屬シタル鐵索  
 ナ其鉄ニ貫キ腰間ニ練帶セシメ練帶ノ所ニ下鍵ス但監房ニ在ルモ晝間ハ之ヲ施スモノト  
 ス  
 若シ再ヒ重罪ヲ犯シタルトキハ五年以上十年以下前項ノ例ニ照シテ處罰ス  
 鐵丸ノ量ハ二百目以上一貫目以下トシ被罰者ノ體力ニ應シテ之ヲ施ス丸ハ索尾ニ屬シ地  
 上ヲ轉ハスモノトス其外役ニ服スルトキハ鐵丸ヲ除キ二人聯絆ノ法ニ從フ  
 第十條 減食或ハ闔室ノ罰ニ處スヘキ者アルトキハ醫師ヲシテ診視セシメ身體ニ妨ナキ  
 ナ證シテ後之ヲ行フヘシ  
 第十一條 屏禁減食闔室又ハ獨愼ノ罰ニ處シタル後ハ典獄若クハ看守長時々其動靜ヲ窺  
 察シ狀況ニ由リ醫師及ヒ教誨師ヲシテ之ヲ問ハシムルコトアルヘシ  
 第十二條 罰則ニ處セラレタル者改悛ノ狀著ルトキハ之ヲ免スルコトヲ得  
 第十三條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者監署ノ命令ニ違背シタルトキハ七日以下  
 之ヲ拘留スルコトヲ得

〔括弧内ハ朱字〕

主檢

書記〔氏名印〕

〔典獄(檢印)〕 懲治人名籍

音聲	容貌	身材	入場ノ事情	入場ノ年月日	親屬	及ヒ尊屬ノ營業	懲治人	山本 生 管地籍名	年氏族 齡名籍地管
〔面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑、瘰癧、瘰癧、癩瘡、天皰、創瘡ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス〕	〔長何尺何寸何分肥瘠強弱〕			〔明治何年月日午前第何時入場〕	〔父母兄弟及ヒ配偶者等ノ有無〕	〔生願者タル尊屬親ノ營業〕	〔懲治人ノ營業〕	〔何國郡町産〕	〔國郡町番地住何某男弟女妹〕
								〔族籍〕	〔何某〕
									〔某年何月何日生〕 〔某年何月何日生〕

教育及 ヒ宗門	入場中 ノ賞罰	書信贈答 ノ月日	懲治場ニ留置ノ 宣告ヲナセシ裁 判所	糞ニ處斷ヲ 經シ者ナル 時ハ其事由	事變	放還
〔入場ノ時文字ヲ知ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス〕 〔入場後進學ノ景況〕 〔何宗或ハ宗門不詳〕	〔明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ〕	〔何年何月日何國郡町村住親屬若クハ朋友ニ書信來〕	〔明治何年何月何日某裁判所ニ於テ 若干年月日留置ノ宣告〕	〔犯由ノ大畧及ヒ某裁判所〕	〔明治何年月日病死或ハ變死 或ハ逃走或ハ他監ニ移ス〕	〔明治何年月日某家ニ放還〕

〔典獄(檢印)〕

本出生地管	氏族管	年氏名	營業及 ヒ親屬	乳兒 提携	入監ノ年月 日時及罪伴	身材	容貌	音聲
〔某管下國郡町村番地住又ハ何某子弟妻女〕 〔何國郡村産〕	〔某年某月某日生〕	〔何某〕	〔營業ヲ詳記ス可シ〕 〔父母兄弟及ヒ配偶者子孫ノ有無〕 〔男或ハ女〕	〔收監ノ時何歲何ヶ月〕	〔明治何年月日午前第何時入監〕 〔何罪ヲ犯ス〕	〔長何尺何寸何分肥瘠弱強〕	〔面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿 態其他痘斑、瘰癧、瘰癧、癩風、天皰、創瘻 ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス〕	
未決者名籍	主檢	書記(氏名印)						

終 結	事 變	責 付	保 釋	當 該 官 ノ 氏 名	書 信 ノ 贈 答 ヲ 許 ス 月 日	入 監 中 ノ 行 狀	教 育 及 ヒ 宗 門
〔明治何年月日病死或ハ變死或ハ脱監〕 〔明治何年月日放免若クハ刑ノ宣告執 行又ハ他監押送〕	〔明治何年月日保釋若クハ責付〕	〔裁判長ノ氏名死刑ハ裁判長ノ外其行刑ヲ臨監セシ官吏ノ 氏名〕	〔明治何年月日何國郡村住親屬若クハ朋友ニ書信來〕	〔何宗或ハ宗門不詳〕	〔文字ヲ識ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス〕		

〔典獄(檢印)〕 已決囚名籍 主檢 書記(氏名印)

本 出 生 地 管 轄	年 氏 族 名 籍	營 業 及 ヒ 親 屬	乳 兒 提 携	刑 名 及 ヒ 宣 告 ノ 月 日 裁 判 所 ノ 名 稱	收 監 ノ 年 月 日	犯 由 ノ 大 畧 及 ヒ 犯 數
〔某管下國郡村番地住又ハ何某子弟妻女〕 〔何國郡村産〕 〔族籍〕 〔何某〕 〔某年何月何日生〕	〔營業ヲ詳記ス可シ〕 〔父母兄弟及ヒ配偶者子孫ノ有無〕 〔男若クハ女〕 〔收監ノ時何歳何ヶ月〕 〔父母ニ先チテ出監シ或ハ死去シタルトキハ之ヲ詳記ス〕	〔何刑若干年月日〕	〔明治何年月日何裁判所ニ於テ宣告〕	〔明治何年月日午前第何時入監〕 〔後第何時入監〕	〔財物ヲ竊取シ或ハ人ヲ毆傷スル等犯罪ノ大畧ヲ記ス 若シ再三犯ナレハ往年何罪ヲ犯シ其裁判所ニ於テ何 刑ニ處セラル〕	

第六類 第一章 監獄 看守押丁



身 材	容 貌	音 聲	教 育 及 宗 門	入 監 中 ノ 賞 罰	書 信 贈 答 ノ 年 月 日	假 出 獄 免 幽 閉	事 變
[長何尺何寸何分肥瘠強弱]	[而體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑、瘰癧、癩子、癩瘡、黑痣、癩風、天鵝、創瘡ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス]		[文字ヲ識ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス][何宗或ハ宗門不詳]	[明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ]	[明治何年月日何國郡村町住親屬若クハ朋友ニ書信來]	[明治何年月何日假出獄或ハ免幽閉]	[明治何年月日病死或ハ變死或ハ脫監][或ハ何罪ヲ犯シ復タ未決監ニ入ル]

終 結

[明治何年月日滿期放免又ハ特赦]

假出獄之證票

某管下國郡村町番地住又ハ何某子弟妻女

族 籍

何 某

某年某月某日生  
明治何年何月何年何月

身 材

名籍ノ様本ニ倣  
ヒ詳記スヘシ

容 貌

上ニ全シ

罪質犯數

刑名刑期

及ヒ附加刑

何年月日某裁判所ニ於テ宣告ヲ受  
ク何年月日ヨリ執行何年月日滿期

一此者ハ假出獄ノ裁可アリタルヲ以テ本日出獄ヲ許シ何地ヲ通過シ居住スヘキ何地ヘ約テ何日迄ニ到着シテ即時其地ノ警察官ニ届出テ此證書ヲ納メタル上住宅ヲ定ムヘキ旨申渡シタル事

一此者ハ本刑期限間特別監視ニ付セラレタル事

一此者假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯スコトアルキハ直ニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算入セラレサル事

一此者發病其他ノ事變ニ因テ途中ニ滞留スルトキハ滞留地ノ警察官ヨリ其證書ヲ受ケ居住地ニ到着ノ上此證書ト共ニ居住地ノ警察官ニ差出スヘキ旨申渡シタル事

右之通心得サセ假出獄ノ證票ヲ與フル者也

朱印

某監獄署

長官何某

印

明治何年 月 日 署 印

○假出獄ヲ受タル者所有金アルトキハ此證票ノ裏面若クハ欄内ニ左ノ二款ヲ附記スヘシ

一此者ノ所有金ハ當監署ヨリ其居住スヘキ地ノ警察官ニ送り遣シタル事

一警察官ヘ送り遣シタル金圓ハ其居住地ニ到着ノ後何日ニテモ受取得ヘシト雖モ同官ニ於テ正當ノ入用ナリト認定ノ上ニ非レハ一次ニ之ヲ渡サ、ルヘキ事

〔〕ヲ施ス者及ヒ印ハ朱

〔料紙半紙〕

在○署獄監〔某下管何〕

一在監人ヨリ其親屬故舊ニ送ル書信ハ此紙ニ書寫スヘシ

一書信ノ文句規則ニ背キタルコトアルトキハ其送致ヲ止メ仍ホ相當ノ罰ニ處スルコトアルヘシ

月	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
前七時〇二分	六時三十八分	六時〇六分	五時三十二分	五時〇一分	四時四十九分	四時五十分	五時十六分	五時四十八分	六時二十二分	六時五十二分	六時五十二分
前八時〇二分	七時三十八分	七時〇六分	六時三十二分	六時〇一分	五時四十五分	五時五十一分	六時十六分	六時四十八分	七時二十二分	七時五十二分	七時五十二分
午前第十時	第十時	第十時	第九時四十分	第九時三十分	第九時	第九時	第九時	第九時	第十時	第十時	第十時
正午十二時	十二時	十二時	十二時	十二時	十二時	十二時	十二時	十二時	十二時	十二時	十二時
午後三時三十分	三時五十分	三時	四時三十分	五時	五時二十分	五時十分	四時五十分	四時二十分	三時四十分	三時二十分	三時二十分
一時二十八分	一時三十二分	一時五十四分	一時五十八分	一時五十八分	一時五十四分	一時五十九分	一時五十四分	一時五十一分	一時四十九分	一時四十八分	一時四十八分
午後四時五十八分	五時二十二分	五時五十四分	六時二十八分	六時五十八分	七時十四分	七時	六時四十四分	六時十一分	五時三十七分	五時〇八分	五時〇八分
六時二十八分	六時五十七分	七時三十五分	八時三十八分	八時五十九分	九時〇五分	八時四十九分	八時〇四分	八時十二分	七時〇三分	六時十三分	六時十三分

第六類 第一章 監獄 看守押丁

月時  
名限  
起床  
就役  
小憩  
午飯  
罷役  
晚飯  
還房  
服役時間合計

囚徒服役時限表

日 月 年 治 明 ○ 紙 信 書 人 監

十二月	七時〇八分	八時〇八分	第十時ヨリ十一時	十二時ヨリ五分	同上	上二時三十二分	四時五十二分	六時十二分	十二分						
約子日出ノ時	刻ヲ以テ起ス	然ルニ早キ	日々分秒ニ差	刻アリ加ルニ	東國ノ由テ	何レモ分秒ノ	於テハキチ保	差異ナキ故ニ	月毎ニ大約之	チ平均シテ刻	チ其起ス各時	ノ司獄官此表	ノ區分ヲ裁酌	シテ宜クテ遇	スヘシ
						右ノ時間ニシテ約子日没ノ時刻 工器ヲ併理シ及チ以テ入監ノ時 ヒ警浴等ヲ爲サ刻トナス シム									

(一) 沖繩縣人民ノ徒流刑ニ處セラレタルモノ發配所 明治十六年十一月五日  
 太政官達第四號官省院總府縣  
 沖繩縣人民ニ限リ徒流刑ニ處セラレタルモノハ同縣下八重山島ニ發配スルヲ得ヘシ此旨相達候事

十四年第六十七號布告(第一項)ヲ以テ  
 刑法附則ヲ定

刑法附則(第一項)第三十八ノ  
 參看

但囚人取扱方ハ慣習ニ因リ沖繩縣令之ヲ管理スヘシ

(一) 監獄中ノ別房ニ留置シタル者監内諸則ヲ犯ストキ處分方 明治十六年十二月二十日  
 太政官達第六拾二號官省院總府縣  
 監獄則第三拾條ニ依リ監獄中ノ別房ニ留置シタル者及ヒ刑法附則第三十二條ニ依リ別房ニ留置シタル者若シ監内ノ諸則ヲ犯ストキハ監獄則第七條ニ準據處分スヘシ此旨相達候事

(二) 囚徒入監後金錢物品等ヲ所持スル者處分方 明治十四年八月十六日  
 內務省達乙第三拾九號警視廳府縣(東京府ヲ除ク)集治監  
 未已決囚入監ノ際衣服ヲ搜檢シ隱蔽物ヲ防クハ勿論ニ候得共若シ入監後金錢物品等隱ニ所持スル者有之時ハ獄則ニ依リ相當處分ノ上其金品ノヲ除ク 悉ク沒收スル義ト心得ヘシ此旨相達候事

(三) 重罪ノ囚徒工錢給與方 明治十四年十二月二十三日  
 內務省達乙第六拾四號警視廳府縣(東京府ヲ除ク)へ達  
 監獄則第五十一條ニ重罪輕罪ノ囚徒ニ與フル工錢ノ區別有之候處現行律ニ依リ處刑セラレタル者ハ懲役七年以上ノ者ニ工錢ノ十分一ヲ給シ五年以下ノ者二十分ノ二ヲ給スヘシ此旨相達候事

(四) 處刑宣告後犯人ヲ司獄官へ護送ノ際檢察官ヨリ宣告書ノ謄本送達方 明治十五年三月六日  
 司法省達丙第八號大審  
 院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)へ達  
 處刑宣告ノ後犯人ヲ司獄官へ護送セシムル際ニ於テハ監獄則ニ從ヒ檢察官ヨリ右宣告書ノ謄本ヲ司獄官へ送達スル義ト心得ヘシ此旨相達候事

(五) 假出獄宣告狀書式 明治十五年四月四日  
 內務省達番外集治監典獄府縣典獄  
 已決ノ囚ニ假ニ出獄ヲ許ストキハ別紙書式ニ倣ヒ宣告狀附典ス可シ此旨相達候事

第六類 第一章 監獄 看守押丁

某菅下國町村番地某子弟妻女

族 籍

何 某

某年 月 日 生  
明治何年何月何日

其方儀明治何年月日某裁判所ニ於テ何刑若干期ノ言渡ヲ受ケ來ル明治何年月日ニ至ラハ滿期之處其受刑以來能ク獄則テ謹守シ改悛ノ狀相顯ハレ本刑々期モ已ニ四分ノ三ヲ經過ス由テ其筋ノ允許ヲ受ケ假出獄差許候事

某集治監  
監獄署

典獄何某印

明治何年月日

〔七〕假留監設置ニ付徒刑流刑及禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒送致方及聯合地方區分ヲ定ム

明治十七年七月八日

内務省達乙第三拾號警視廳府縣(東京府沖繩縣北海道三縣ヲ除ク)

今般各假留監設置セラレ候ニ付徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒送致方及ヒ聯合地方ノ區分左ノ通相定候條此旨相達候事

徒刑流刑禁獄送致方

一 徒刑流刑禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒裁判確定セシ時ハ之ヲ管束セシ地方ヨリ警察選擇ヲ以テ直ニ其聯合假留監ヘ押送スヘシ

但本監ノ都合ニ依リ典獄ヨリ其聯合地方(囚徒押送ノ延期ヲ通知スルコアルヘシ)

聯合地方區分

一 兵庫假留監

京都府 大坂府 兵庫縣 滋賀縣 石川縣 富山縣 福井縣

島根縣 島取縣 岡山縣 廣島縣 和歌山縣 德島縣 高知縣  
奈良縣 香川縣 (二十年二月廿五日內務省訓令第十一號ヲ以テ山口愛媛ノ二縣ヲ除キ三池聯合地方ニ改メ廿二年一月廿六日內務省訓令第三號ヲ以テ奈良縣香川縣ヲ加フ)

一 東京假留監  
警視廳 神奈川縣 埼玉縣 群馬縣 千葉縣 枋木縣  
三重縣 愛知縣 靜岡縣 山梨縣 岐阜縣 長野縣  
(二十一年九月十七日內務省訓令第十八號ヲ以テ(千葉縣)ノ下(茨城縣)ヲ宮城假留監聯合地方ニ改ム)

一 宮城假留監  
新潟縣 福島縣 宮城縣 岩手縣 青森縣 秋田縣 山形縣  
茨城縣 (同上茨城縣) 加フ

一 三池假留監  
長崎縣 福岡縣 大分縣 佐賀縣 熊本縣 宮崎縣 鹿兒島縣  
山口縣 愛媛縣 (二十年內務省訓令第十一號) 加フ  
チ以テ山口愛媛二縣ヲ加フ)

〔八〕舊刑法ニ於テ懲役終身ノ囚徒刑限内罪ヲ犯シ地方監獄ニ拘禁中ノ者假留監ヘ押送方

明治十七年八月十五日

内務省達乙第三拾五號警視廳府縣(東京府沖繩縣北海道ノ三縣ヲ除ク)

舊刑法ニテ處斷セラレタル懲役終身ノ囚徒刑限内更ニ罪ヲ犯シ地方監獄ニ拘禁中ノ者其裁判確定ノ上ハ本年當省乙第三拾號達ニ準シ直ニ假留監ヘ押送スヘシ此旨相達候事

但新舊比照例ニ依リ新ニ懲役終身ノ刑ニ處セラレタル者モ本文ニ準スヘシ

〔九〕罰金ヲ輕禁錮十日以下ニ換ヘタル時警察署附屬ノ留置場ニ於テ執行方

明治十七年七月十日

内務司法兩省達乙第三拾四號  
警視廳府縣(東京府ヲ除ク)

刑法第廿七條  
參看

罰金ヲ輕禁錮ニ換ヘタル場合ニ於テ其日數十日以下ナル時ハ拘留ノ例ニ依リ警察署附屬ノ留置場ニ於テ執行スルヲ得ル儀ト心得可シ此旨相違候事

〔十〕懲役終身ノ刑又ハ徒刑ニ處セラレタル女囚留置方及其費用支辨方  
明治十八年九月十日內務省達番外警視廳府縣(東京府沖繩縣北海道三縣ヲ除ク)  
懲役終身ノ刑又ハ徒刑ニ處セラレタル女囚ハ當分地方監獄ニ留置シ其囚徒ニ係ル一切ノ費用ハ從前ノ通國庫費ヨリ支辨候條此旨相違候事

〔十一〕假出獄停止手續  
明治十八年九月十日  
司法內務兩省達丙第七號警視廳府縣(東京府ヲ除ク)集治監  
假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者アルハ左ノ手續ニ依リ處分スヘシ此旨相違候事

假出獄停止手續  
第一條 假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者アルトキハ其裁判確定ノ後現ニ之ヲ管束スル所ノ典獄ニ於テ直チニ假出獄ノ停止ヲ申渡シ當初下付シタル假出獄ノ證書ヲ取上ケヘシ  
第二條 典獄ニ於テ假出獄ヲ停止シタルトキハ其事狀ヲ具シ內務司法兩卿ニ開申スヘシ  
第三條 甲地方ニ於テ假出獄ヲ許シタル者乙地方ニ於テ停止シタルトキハ乙地方典獄ヨリ其事狀ヲ甲地方典獄ニ通知シ假出獄ノ證書ヲ送致スヘシ  
第四條 前條ノ場合ニ於テ乙地方監獄ニ拘禁スルトキハ其監ノ新入者トナシ本刑後刑共乙地方ニ於テ執行スヘシ  
假出獄停止申渡書式  
刑名 府縣族籍 何 某  
刑期 年 某  
其方儀受刑以來獄則ヲ遵守シ改悛ノ狀著明ナルニ由リ何年 月 日假出獄ヲ許シ其證書ヲ與ヘタル處復々重(輕)罪ヲ犯シ拘禁ニ就クヲ以テ其出獄ヲ停止シ證書取上候事

年月日 某集治監 監獄署 典獄 何 某印

甲地方ニ於テ假出獄ヲ許シタル者乙地方ニ於テ停止ノ申渡ヲ爲ストキノ書式 府縣族籍 何 某

刑名 刑期 年 某

其方儀何年 月 日某集治監 監獄署ニ於テ假出獄ヲ許シ其證書ヲ與ヘタル處復々重(輕)罪ヲ犯シ拘禁ニ就クヲ以テ其出獄ヲ停止シ證書取上候事 某集治監 監獄署 典獄 何 某印

〔十一〕懲役終身又ハ徒刑女囚地方監獄ニ留置及其費用支辨方  
明治十八年九月十日  
內務省達番外警視廳府縣(東京府沖繩縣北海道三縣ヲ除ク)  
懲役終身ノ刑又ハ徒刑ニ處セラレタル女囚ハ當分地方監獄ニ留置シ其囚徒ニ係ル一切ノ費用ハ從前ノ通國庫費ヨリ支辨候條此旨相違候事

〔十二〕處刑者并囚徒死亡ノ者届出方  
明治十九年二月二十日  
內務省達甲第四號廳府縣(東京府ヲ除ク)  
徒刑流刑禁獄ノ刑ニ處セラレタル者アルトキハ監獄則第五十八條ニ依リ申報シ及該囚徒拘禁中死亡セルモノアルトキハ其都度届出來リシ處自今以後總テ其儀ニ及ハス但變死ニ係ル者ハ從前ノ通届出ヘシ

〔十四〕集治監假留監ノ囚徒變死ニ係ル者届出方  
明治十九年二月二十日  
內務省達乙第一號集治監假留監  
其監拘禁ノ囚徒死亡スルモノアルトキハ其都度届出來リシ處自今以後其儀ニ及ハス但變死ニ係ル者ハ從前ノ通届出ヘシ

〔十五〕舊刑法處刑ノ囚徒假留監へ押送方

明治十九年六月二十八日  
內務省訓令第十一號警視廳府縣(東京府沖繩縣ヲ除ク)

舊刑法ニテ國事犯禁獄懲役五年以上及ヒ常事犯禁獄終身ニ處セラレタル囚徒地方監獄ニ拘禁ノ者ハ十七年當省乙第三十號達ニ準シ直ニ假留監へ押送スヘシ

〔十六〕懲治場ニ留置セシ者假出獄規則ヲ定ム

明治十九年十一月十日  
內務省令第二十四號

刑法第七十九條第八十條第八十二條ニ依リ懲治場ニ留置セラレタル者ニシテ獄則ヲ遵守シ改悛ノ狀アルハ警視廳監北海道廳長官府縣知事ハ左ノ規則ニ據リ假ニ出場ヲ許スコトヲ得

假出場規則

- 第一條 假出場ヲ許スヘキ者アルハ典獄ヨリ其長官ニ狀ヲ具シテ認可ヲ受ケ可シ
- 第二條 假出場ヲ許シタルハ典獄ヨリ其監票ヲ本人ニ下付ス可シ
- 第三條 假出場監票ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ
  - 一 本人ノ屬籍氏名年齢住所懲治期限及ヒ宣告并ニ滿期ノ年月日
  - 一 殘期何年何月何日假出場ヲ許ス 何年何月何日起
  - 一 本日出場ヲ許スニ由リ住居ノ地ニ歸着ノ上ハ即チ所轄警察署ニ其旨ヲ届出ツ可シ
  - 一 毎月一回謹慎ヲ表スル爲メ所轄警察署ニ到リ假出場監票ヲ出シ警察官吏ノ認印ヲ受ケ可シ但已ムテ得サル事故アレハ其事由ヲ届出可シ
  - 一 一日程ヲ過ケル地ニ旅行スルハ其行先並往復滞在日數等ヲ詳記シ所轄警察署ニ届出可シ但シ其滞在一月以上ニ涉ルハ一箇月毎ニ其滞在地ノ警察署ニ到リ前項ノ手續ヲナス可シ
  - 一 事故アリテ其住居ヲ轉スルハ所轄警察署ニ届出ツ可シ
  - 一 第三項以下ノ事ハ本人自ラ爲ス能ハサル場合ニ於テハ親屬故舊代リテ之ヲ爲スコトヲ得
- 右ノ各項ニ違背シタルトキハ直チニ出場ヲ停止シ出場中ノ日數ヲ懲治期限内ニ算入スルコトヲ得ス

- 第四條 假出場ヲ許シタル時ハ典獄ヨリ假出場監票及懲治申渡書ノ附本ヲ具シ本人住居ノ地ノ警察署ニ通知スヘシ
- 第五條 警察署ニ於テ轉居ノ届ヲ得タル時ハ之ヲ其轉居地ノ警察署ニ通知シ第四條ニ記載シタル書類ヲ送送スヘシ
- 第六條 假出場ヲ許ス可キ者住所ナク及ヒ引取人ナキ時ハ猶ホ懲治場ニ留置シテ他ノ懲治者ト殿ニ別異ス可シ但住居遺地ニアリテ歸着スルノ資力ナキ者モ亦同シ
- 第七條 假出場ヲ停止スヘキ時ハ本人住居ノ地ノ典獄ニ於テ其旨ヲ言渡シ直チニ假出場監票ヲ取上ケ其殘期ヲ執行ス可シ但甲地方ニ於テ下付セシ監票ヲ乙地方ニ於テ取上ケタル時ハ其事狀ヲ甲地方典獄ニ通知シ監票ヲ送致ス可シ
- 第八條 假出場ヲ許サレタル其懲治期滿限ノ日ニ到レハ假出場監票ヲ所轄警察署ニ還納シ該警察署ヨリ監票ヲ出シタル典獄ニ之ヲ送送スヘシ

〔十七〕陸海軍々法會議ノ處刑者地方獄送付ノ件處分方

明治二十年三月十八日  
內務省訓令第十六號警視廳府縣(東京府ヲ除ク)

陸海軍軍法會議ノ處刑者費用區分方客歲一月第一號ヲ以テ相達候ニ付テハ來ル二十年度以降右處刑者アル毎ニ總テ該軍監獄ヨリ直チニ地方獄へ送付ノ答ニ付軍法會議所在ノ地方獄ニ於テハ其都度之ヲ收監シ普通裁判所處斷ノ者ト同様取扱ヒ其地方稅支辨ニ屬スヘキ者ハ其刑ヲ執行シ國庫費支辨ニ屬スヘキモノハ直チニ假留監ニ押送スヘシ但從前陸軍法衛ヨリ發配ノモノ有之候ハ、本文同様取計フヘシ

〔十八〕在監人工錢給與手續

明治二十一年十月十六日  
內務省訓令第二十二號警視廳府縣(沖繩縣ヲ除ク)

監獄則ニヨリ在監人ニ給與スル工錢ハ自今府縣會ノ議決ヲ經監獄費內譯ニ給與錢ノ目ヲ設ケテ之ヲ支拂ヒ其工錢ハ監獄費雜入ニ編入スルコトヲ得

● 伺指令

- 犯罪人ノ携帶スル三歳以上幼兒處分之伺指令  
明治十五年十月二十七日  
兵庫縣伺
- 第一條 拘引狀拘留狀收監狀逮捕狀ヲ執行シ若クハ重罪輕罪ノ現行犯ヲ逮捕スル時ニ於テ被告人又ハ犯罪人三歳

以上ノ幼兒ヲ携帶シタルハ該兒ハ其被告人又ハ犯罪人所在地ノ戸長ヘ交付スルヲ順序トスル哉

第二條 果シテ前條ノ如クナレハ戸長ニ於テハ被告人及犯罪人所在地即チ其原籍ナレハ該兒ハ直ニ其親戚故舊ヘ引渡至當ト考量ス然ルニ若シ親戚故舊アラサル歟假令有之モ赤貧ニシテ養育之費ニ堪ヘサルハ辛未六月廿日公布及六年四月廿四日第百三十八號公布ニ據リ預リ人ヲ需ムルモ該養育米ハ糶ニ糊口ノ一端ニ止リ被服其他ノ諸費ニ充ツル能ハサルヲ以テ預リ人無之ハ養育米ノ餘ハ實費支給ヲ以テ其人ヲ需メサルヘカラス然ルモ該費ハ官費ニ屬スヘキモノナル哉將々地方稅教育費ニ歸スルモノナル哉  
但養育年齡ハ本文公布ノ通滿十三年ヲ限界トシ可然哉

第三條 前條被告人及犯罪人所在地其原籍ニアラサルハ直ニ原籍戸長ヘ送致シ而シテ該送致ニ係ル諸費ハ其原籍地ノ官費又ハ地方稅ニ歸スルモノナル哉  
但無籍ナルハ第二條ニ據テ處理ス

內務省指令 明治十六年七月二十一日

第一條 家元又ハ親族アルモノハ之ニ引渡スヘク其家元親族ナキモノハ何之通

第二條 恤救規則ニ適當スルモノハ右規則ニ依リ救助シ若シ増費ヲ要スル歟又ハ該規則ニ適當セサルモノハ末文何之通  
但昔年齡ハ本文規則之通

第三條 家元又ハ親族ヲシテ引取人ヲ差出サシメ之ニ引渡スヘク若シ引取人難差出事情アル歟又ハ無籍ナルハ第二條指令之通取計フヘシ

●犯罪人ノ携帶セル幼兒養育方ノ伺指令 明治十六年四月四日 青森縣何

無籍ノ犯罪人三歳以上ノ小兒ヲ携帶セルハ其子養育方ノ儀客歲九月十三日電報ヲ以テ相伺候處同月廿二日恤救規則ニ據リ支辨スヘキ旨御指令ノ趣モ有之候處有籍ノ者ト雖モ原籍遠地ニアルハ無籍者ト同シク其犯人ノ令狀ヲ

受ケタル地ノ戸長ニ於テ其兒ノ養育方ヲ引受ケサルヲ得サル儀ト存候果シテ然ラハ右費用ハ犯罪者ノ親族ニテ辨償シ親族貧困ニテ難償ハ原籍町村協議費ニテ支辨シ其町村ニテ償兼候節ハ其地方稅教育費ヨリ支辨スル儀ト心得可然哉

內務省指令 明治十六年七月二十一日

●在監中分娩ノ兒子ニシテ三歳以上ニ至ルモノ引渡方ノ伺指令 明治十六年五月四日 愛知縣何

監獄則第十一條ニ入監ノ婦女乳兒(三歳未満)携帶セント請フ者アルハ之ヲ許ストアリ其三歳以上ニ至ル者ハ許サレ御趣意ニ有之茲ニ有籍又ハ無籍ニテ妊娠ノ者在監中分娩ス然ルニ該兒三歳以上ニ至ルモ無籍ハ勿論有籍ノ者ト雖モ引渡スヘク親戚モ無之トキハ有籍ノモノハ原籍戸長ヘ引渡シ無籍ノ者ハ監獄所在ノ町村ヘ就籍致サセ而ル後戸長ヘ引渡シ恤救規則第四項ニ照準シ救助取計候テ可然哉

一前條果シテ然ルハ其町村戸長ニ於テ該兒ノ他ヘ附托シ養育スルハ其教育費額ニテハ物價高貴ノ際衣服等取賄フ事能ハス情勢不得止モノハ其不足費額ハ地方稅教育費ヨリ支辨シ可然哉

內務省指令 明治十六年七月二十一日

●無籍在監人ニシテ生活ノ途ナキ者處分方ノ伺指令 明治十六年二月二十六日 滋賀縣何

生活ノ途ナキ無籍人取扱方ノ儀ニ付客年五月中庶甲第七二號ヲ以テ云々相伺候處書而何之趣刑期滿限ニアラスシテ在監候者ハ退監セシメ其自活ノ途ナキ分并ニ今后右等ノ分ハ今般第五十號布告ヲ以テ十年第九十五號邊被廢候ニ付恤救規則ニ依リ救助可取計旨御指令有之然ルニ明治七年二月第百六十二號公達恤救規則ニ依リ救助可取計モノハ極貧ノモノ獨身ニシテ廢疾或ハ重病又ハ十三年以下ノモノニ限レ儀ニ有之其餘ハ規則毎項但書ニ相當スルニアラサレハ救助難致儀ニ候然ラハ生活ノ途ナキ無籍人ニシテ該規則ニ相當セサルモノ有之節ハ其處分方如何取計可



申候乎

監獄則第十一條ニ入監ノ婦女乳兒三歳未満ノモノヲ携帶セント請フモノアルキハ之レヲ許ストアリ然ルニ其三歳以上ノモノヲ携帶候モ有之節ハ直ニ親族ヘ下付シ生活ノ道ナキニ於テハ恤救規則ニ依リ救助可取計ハ勿論ニ候得共若シ其者無籍ニシテ親族等無之時ハ其兒童ヲ引受サスヘキモノ無之如此場合ニ於テハ如何處分致可然候乎前項兒童救助之儀恤救規則ニ依レハ獨身又ハ獨身ニアラサルモ家人七十歳以上十五歳以下ニテ窮道ノモノニ限ル儀ニ有之然ルニ前文兒童ノ儀ハ獨身ニ無之候得共其父母等入監中ハ獨身同様ノ姿ニ付其父母等入監中相當救助取計出監ノ上ハ直ニ給與ヲ廢止スヘキ儀ニ候乎

無籍在監人ハ在監中定額手續ヲ爲サシムルニ及ハス刑期滿限ノ后ト雖モ自活ノ道ナキモノハ監獄ニ留置クヘキ儀ニ有之然ルニ其携帶兒子三歳以上ニ候節ハ携帶ヲ許可スヘカラサル儀ニ候右ノ場合ニ於テハ其兒子ノミ籍ヲ定メシムヘキ儀ニ候乎果シテ然ルキハ其定額ノ手續如何取計可然候乎

内務省指令 明治十六年七月二十一日

第一項 恤救規則ニ適セサルモノハ別ニ救助ノ成規ナシ

第二項 拘引ヲ受ケシ地ノ戶長ニ引渡スヘシ

第三項 伺之通

第四項 該兒ヲ引受ケシ地ノ戶籍ニ記入シ置クヘシ

●入監婦女携帶三歳以上ノ兒子ニシテ生活ノ道ナキ者處分方ノ指伺令 明治十六年五月二十一日

滋賀縣伺

入監ノ婦女三歳以上ノ兒ヲ携帶致候儀ハ不相成儀ニ付右等ノ者有之節ハ嘗テ御指令ノ旨ニ依リ退監セシメタル上生活ノ道ナキモノハ恤救規則ニ照シ救助可致答ニ候ヘ共右ニ付實際上多少差支ノ儀モ有之依テ本年二月庶甲第四拾三號ヲ以テ云云伺置候次第ニ候然ルニ果シテ恤救規則ニ依リ救助取計候節ハ救助米高規則ニ制限有之則十三歳

以下ノモノハ壹ケ年米七斗ノ割ニテ此代金目下當縣下滋賀郡ノ相場ヲ以テ算スルニ四圓三拾四錢餘(下米壹石六圓貳拾貳錢位)且當日ノ米高壹合九夕餘此代密錢貳圓計ニ相成申候右様ノ次第ニ候ヘハ實際前文ノ金額ノミニテハ多分ノ不足ヲ來候右様ノ場合ニ於テハ如何取計可然哉

内務省指令 明治十六年七月二十一日

伺ノ趣不足ノ費用ハ地方稅教育費ヲ以テ支辨スヘキ事

但明治十四年十月十日付伺ヘ同十五年四月廿二日及指令置候處該兒引取人ナキモノ及原籍不分明ナル者ハ監獄則第三十條ニ準シテ處分スヘシ

●拘禁囚徒取扱方ノ伺指令 明治十六年八月三十日 空知集治監伺

漢キニ懲役終身ノ刑ニ處セラレ服役中逃走ノ未更ニ無期徒刑ニ處セラレ候モノ本刑ヲ懲役終身ト爲シ囚籍面ニハ無期徒刑ト記載セシテ可然哉果シテ然ラハ監獄則第九條ニ依リ處分セサルヤ差掛リ取扱上疑義ヲ生シ候ニ付此段相伺候也

内務省指令 明治十六年八月三十日

書面伺之趣監獄則第九條ニ據リ處分シ囚籍面記載方ハ懲役終身及ヒ無期徒刑ヲ併記スヘキ儀ト可心得事

●在監人隱匿物處分方ノ伺指令 明治十八年二月二十五日 三重縣伺

監獄則第十四條ニ總テ入監人ノ携有スル財貨物件ハ悉ク點檢シテ云々(中)但點檢ノ際隱匿セシ貨物ハ沒收スト有之候處茲ニ在監人ニシテ實印又ハ權利義務ニ關スル證書類ヲ隱匿スルモノアリ其實印ノ如キハ一己私有ノ物品ニ外ナラサルヲ以テ同條ニ照シ沒收シ可然見込ニ候得共權利義務ニ係ル證書類ハ單ニ物品トハ難見做乎ニ相考候斯ノ如キモノハ監獄則第九十五條第八項ニ準擬シ本人ヲ相當懲罰スルニ止メ該證書類ハ所持品中ニ領置シ放免ノ節還付シ可然乎

内務省指令 明治十八年三月二十一日

第六類 第一章 監獄 看守押丁

書而伺ノ趣證書類ハ勿論實印モ沒收セサル儀ト可心得事

●入監人携有金處分ノ伺指令 明治十八年十月一日 群馬縣伺

已決囚ノ監獄署へ入監ノ簡携有スル財貨物件ハ點檢ノ上領置シ釋放ノ時其儘還付致來候然ルニ該金ノ内天保錢又ハ閉店銀行紙幣ノ如キハ引換期限ヲ要スル者モ可有之果シテ然ラハ釋放ノ迅速ニ由リ出獄スルノ際還付スルモ早已ニ不通用ニ相成候テハ折角保管ノ旨趣モ無之何分不都合ノ儀ト被存候條物品又ハ金銀貨(古金銀)ヲ除クノ外ハ最前預リタル紙幣ノ種類ヲ論セス現今通用ノ紙幣又ハ銅貨等ヲ以テ還附スベキ様取計差支無之儀ト被存候得共爲念相伺候

内務省指令 明治十八年十月九日

伺ノ趣ハ其旨本人へ申聞タル上期限前ニ引換置キ還付スヘキ儀ト可心得事

●輕罪ニ係ル控訴者已決後服役方ノ伺指令 明治十八年十月三十日 富山縣伺

輕罪ニ係ル控訴者已決後ハ現ニ拘禁スル地方ノ監獄ヨリ最初裁判官渡アリタル地方ノ監獄へ引戻シ服役セシムルモ差支無之候哉

内務省指令 明治十八年十一月九日

伺ノ趣該控訴裁判所所在ノ監獄ニ拘禁ノ上服役セシムル儀ト可心得事

●在監人食糧ノ伺指令 明治十八年十月二十八日 福岡縣伺

定役ニ服スル在監人食糧ノ儀ハ監獄則第六十八條ノ制限ニ隨ヒ給與スヘキハ勿論ニ候處各種ノ工藝上ニ就キ之ヲ實檢スルニ暨ヘハ鍛冶工綿打工ノ如キハ強キ力業トシ從來七合食ヲ與ヘ來リシカ之カ米麥搗若シクハ開墾耕転等ノ作業ニ比スルニ稍輕キモノト認メラル然ラハ之ヲ座作業ナル藁工時計工ノ類ト同視シ輕役五合ノ食ヲ給セン歟又不權衡ナルヲ覺エ斯ノ如ク強役中ニモ力業ノ稍輕キモノハ其強役食七合ノ幾分ヲ減シ給與致シ不苦候哉

内務省指令 明治十八年十一月十一日

伺ノ通

●假免懲罰者換罰執行方ノ伺指令 明治十八年十一月二十一日 靜岡縣伺

假ニ懲罰ヲ免シ出獄セシメタルモノ主刑滿期迄ニ過料金納完スル能ハサル場合ニ於テハ更ニ入獄セシメ其換罰ヲ執行シ可然哉

内務省指令

伺ノ通

●已決囚留置ノ伺指令 明治十九年六月 宮城縣伺

第一條 他縣監獄ニ在ル已決囚徒ヲ事實參考人トシテ控訴院へ喚出シ管理中當縣監倉へ留置スヘキ旨評定官ヨリ照會ヲ受ケ候場合ハ監獄則第十條ノ明文外ナルモ他ニ繫留スヘキ箇所モ無之ヲ以テ右ノ照會ニ應シ可然哉

第二條 前條ノ如ク照會ニ應シ可然儀ナレハ繫留中ニ係ル費用金額ハ他ノ裁判所ノ裁判ニ服セス控訴セシモノノ例ニ準シ一日金貳拾錢ツ、裁判費用ヨリ請求致可然哉

第三條 若シ裁判費用中ヨリ請求スルニ當リ負擔者ニシテ無資力ナルキハ該囚繫留スヘキ縣ノ監獄費ヨリ償却ヲ求メ可然哉

内務省指令 明治十九年七月十日

第一條 照會ニ應シ已決監ニ拘置スヘシ

第二條 拘置中ノ費用ハ輕罪ニ付控訴ヲ爲シタル被告人ノ例ニ準シ送付シタル縣ヨリ受取ヘシ

第三條 第二條指令ニテ了解スヘシ

●在監人携帶乳兒取扱方伺指令 明治十九年十二月二十八日 鳥取縣伺

當縣鳥取監獄在監人中野ソノナル者即今無籍ノ乳兒携帶罷在候處在監中該兒年齡三歲以上ニ及ヒ獄内ニ難差置ニ付其母原籍地戸長役場へ引取方相違候處右ソノ儀ハ明治三年中原籍ヲ失踪シタルモノニシテ目下同人甥某ナルモ

ノ該家相續シ居ルモ同人ハ赤貧洗フカ如キ者ニシテ引取養育スヘキ資力ナク且他ニ親戚等絶テ無之旨該戸長役場ヨリ申出タリ然ルニ明治十七年中御旨ヨリ岡山縣ヘノ御指令ニ據レハ携帶幼兒入監中滿三歳以上ニ及ビタルハ自今無籍ハ勿論有籍者ニシテ親戚等有之モ無資力ニシテ難引取ハ其母逮捕ヲ受ケシ地ノ戸長ヘ引渡シ恤救規則ニ據リ救助シ若シ該則ニ適當セサルモノハ有籍ハ本籍無籍ハ其地方ノ地方稅教育費ヨリ支辨シ云々トアリ果シテ然ルハ其母ノ原籍ハ監獄切近ノ地ニ在ルモ親戚中引取ヘキ資力ナキハ逮捕地遠隔ナルモ仍ホ其母逮捕地戸長役場ヘ引渡スヘク義ニ候哉

内務省指令 明治二十年一月十八日  
書面伺之趣原籍地ノ戸長ヘ引渡スヘキ儀ト心得ヘシ  
但岡山縣指令本文ニ牴觸スル廉ハ取消ト心得ヘシ

**第九十六 看守長看守ニ帶劍ヲ許ス**

明治十四年三月十八日  
太政官達第十八號警視廳府縣(東京府ヲ

除)

監獄看守長看守ニ爲取締帶劍可爲致此旨相達候事

但劍制ハ適宜タルヘシ

(一) 看守被服及帶劍給貸並保存期限 明治十四年四月十五日

内務省達乙第二十一號警視廳府縣(東京府ヲ除ク)

本年第十七號第十八號ヲ以テ看守被服及ヒ帶劍之儀御達相成候ニ付テハ被服ハ適宜保存期限ヲ定メ給與シ帶劍ハ貸與候儀ト可相心得此旨相達候事

(二) 監獄署押丁給與品ヲ定ム

明治十四年三月三十日  
内務省達乙第十七號警視廳府縣(東京府ヲ除ク)集治監

第十七號達ハ看守長看守ノ服制提灯ノ徴章ナリ

監獄署押丁給與品左ノ通相定候條此旨相達候事

- 一 笠 笠頭 時雨 共川
- 一 筒袖法被 色紺地 質木綿
- 一 股引 同上
- 一 雨衣 桐油 色黒
- 一 縛繩
- 一 手帖
- 一 呼子笛

(三) 監署雜則并書記看守長以下分掌例及備人分課例ヲ定ム

明治十四年三月三十日  
内務省達乙第十五號警視廳府縣(東京府

監署雜則並ニ書記看守長以下分掌例及ヒ備人分課例別紙之通相定候條此旨相達候事  
(別紙)

雜則

第一條 官吏備人ヲ問ハス漫リニ在監人ト談言シ又ハ其聽得可キ所ニ於テ檢束上ニ係ルコトヲ辯論シ若クハ雜話等ヲ爲スヲ禁ス

第二條 授業手及ヒ押丁ヲ備フニハ必ス保證人ノ押用ヲ具シタル證書ヲ納レシム可シ但證書ニハ監署ノ規則ヲ遵奉シ特ニ在監人ノ囑托ヲ受ケ他人ニ通信シ或ハ物件ノ贈答ニ媒介セサルコトヲ詳記セシムヘシ

第三條 官廳若クハ人民ヨリ服役ノ囚徒テ工事ニ備役セント求ムルコトアルトキハ便否得失ヲ考ヘ條約ヲナシテ其求ニ應スヘシ

第四條 在監人死亡シ假葬シタル遺骸ヲ改葬セント監署ニ請フ者アルトキハ之ヲ許可シ其旨ヲ警察官ニ通告スヘシ

第六類 第一章 監獄 看守押丁

書記看守長以下分掌例

書記

一 在監人ノ名籍ヲ調理シ囚徒ノ携有物ヲ檢收シ工業ニ關スル庶用ヲ辨シ簿計其他ノ醫務ヲ分掌ス

看守長

一 看守授業手押丁ノ勤惰ヲ監督シ囚徒ノ出入増減病故及其犯則ノ有無ヲ稽査シ監房内外ノ洒掃ヲ査閲シ飲食ノ配與器具ノ點檢等ニ臨監ス

二 服役ノ囚ニ課スル工業ノ科程ヲ典獄ニ稟議シ其作業ヲ督勵ス

看守

一 晝夜交替シテ受持場ヲ巡警シ及ヒ監門ヲ守リ監外ニ押獲ノ囚徒ヲ戒護シ病囚ノ醫治ニ立會ヒ日々監中ノ器具ヲ點檢ス

二 服役ノ囚徒作業ニ關セサル他事ヲ交談シ或ハ路人ニ雜語シ或ハ漫リニ部外ノ工場ニ入り或ハ押丁等ヲシテ囚徒ト相狃ルノ狀ナカラシムルヲ要ス若シ犯ス者アルトキハ看守長ニ具狀スヘシ

三 文字ヲ書スル能ハサル囚徒ノ爲メニ願訴ノ書面ヲ代書ス

備人分課例

一 改過講習ノ道ヲ認識シテ囚徒ヲ教誨ス

醫師

一 囚徒ノ疾病ヲ診察治療シ其癘篤疾若クハ重病急症ニ至レハ診斷書ニ處方箋ヲ添ヘ典獄ニ致スヘシ

二 病囚ノ氏名病性徵候治否及ヒ處方ハ調治簿ニ詳記スヘシ

三 毎朝一次各監ヲ巡リ囚徒ノ飲食衣類ヲ看視シ健康ニ害アリト認ムル事アルトキハ改良ノ意見ヲ典獄ニ具狀スヘシ

四 診察手術ヲ施ストキハ病者ニ向テ攝生ノ方法ヲ示スヘシ

授業手  
一 服役ノ囚徒ニ農業工藝等ヲ教ヘシム

押丁

一 囚徒監房出入ノ際其身體衣服ヲ搜檢シ服役者ヲ督使シ控繩戒護等ニ從事ス

女監取締

一 女監ヲ監視シ婦女入監ノ際ハ典獄ノ臨監ヲ得テ其身體衣服ヲ搜檢ス

二 飲食ヲ配與シ及ヒ女囚ノ作業ヲ督勵ス

〔四〕司獄官吏備人設置程度

明治十四年三月三十日  
內務省達乙第十六號警視廳府縣(東京府ヲ除ク)集治監

今般第十四號第十六號ヲ以テ司獄官吏名稱被定候ニ付該官吏及ヒ備人ノ儀ハ別紙程度ニ照シ設置候儀ト心得ヘク此旨相達候事

(別紙)

司獄官吏備人設置程度

判任官 在監人二百人以下五名ヲ置ク以上ハ百五十八人毎ニ壹名ヲ増ス

看守 在監人十五人ニ壹名ヲ置ク

教誨師 人員俸金適宜

醫師 人員俸金適宜

授業手 人員俸金適宜

押丁 在監人十人ニ壹名ヲ置キ俸金ハ八圓以下ヲ以テ月給又ハ日給トス

女監取締 行狀警員ニシテ四十歳以上若クハ司獄官吏ノ婦女ヲ選ミ在監人二十人ニ壹名ヲ置キ俸金ハ拾五圓以下ヲ以

テ月給又ハ日給トナス

〔五〕看守俸給支給規則 第七十一

〔六〕看守給助例 第七十二ノ 諸項ニ出ス

〔七〕司獄官吏内國旅費概則 第七十三ノ 諸項ニ出ス

〔八〕集治監假留監典獄書記看守長獄醫旅費支給方ヲ定ム 明治二十年二月十八日 内務省訓令第十號集治監假留監

集治監及假留監管制被定候ニ付テハ典獄副典獄書記看守長獄醫ノ旅費ハ明治十九年六月閣令第十四號内國旅費規則ニ據リ官等相當ノ旅費ヲ支給スヘシ

〔九〕看守押丁賞與方 明治二十二年一月十一日 内務省訓令第一號廳府縣集治監假留監

看守押丁ニシテ左ノ各項ニ該當スル者ハ明治二十一年十月内務省訓令第二十一號警察賞與規則ニ據リ功勞ノ適度ニ應

廿一年内務省訓令第廿一號ハ(第六十七ノ六項)ニ掲

- 一 反獄ヲ鎮制スルニ當テ其功勞著シキ者
- 二 自己ノ監守ニ非ラサル在監人ニシテ逃走スル者ヲ捕獲シ其功勞著シキ者
- 三 監獄内ノ水火風震及ヒ流行病ニ付其功勞著シキ者
- 四 自己ノ危難ヲ顧ミス在監人ノ性命ヲ救援シタル者

### ○第二章 囚人護送 囚徒費用

#### ●囚人護送ニ係ル沿革要領

明治六年十一月第三百九十一號達ヲ以テ囚人護送規則ヲ定ム○八年五月第七十八號達ヲ以テ囚人護送途中賄料草鞋錢等官費支給セシム○十年七月第四十九號達ヲ以テ逃走ノ軍人軍屬其他ノ囚徒自今沿道警察署ニ於テ遞傳護送セシム  
 △○十五年二月第拾號達ヲ以テ囚人護送手續ヲ定メ其遞傳方ヲ改正シ從前ノ途中矛盾スルモノハ廢止トス

**第九十七 囚人護送手續** 明治十五年二月一日 太政官達第拾號内務省開拓使警視廳府縣(東京府ヲ除ク)

明治六年<sup>十一月</sup>第三百九十一號并同十年<sup>七月</sup>第四十九號ヲ以テ囚人護送規則及ヒ遞傳方相違置候處今般更ニ別冊ノ通囚人護送遞傳方改正シ本年七月一日ヨリ施行候條從前達中矛盾ノ廉ハ同日限廢止ス此旨相達候事

(別冊)

#### 囚人護送手續

第一條 甲廳ヨリ乙廳又ハ集治監へ送移スル囚人ハ囚籍及ヒ處刑宣告書所持ノ物品ヲ併セ沿道警察本分署ニ於テ遞傳護送スヘシ

但一府縣管内本支監獄ノ間ニ護送スル囚人モ其距離拾里以外ニ至ルモノハ本文ニ準スルヲ得

第二條 新タニ就捕セシ犯罪人及ヒ諸令狀ニ據リ引致スル刑事被告人又ハ逃走ノ軍人軍屬ノ遞傳護送ヲ要スル者モ前條ノ手續ニ準スヘシ

但入監後糾問等ノ爲メ所在ノ法衙ニ往復スルハ本條ノ限ニ在ラス

### 第六類 第二章 囚人護送 囚徒費用

第三條 第一條第二條ノ護送ニ付スル囚人ノ員數及ヒ發出日時ハ其當該官吏ヨリ前以テ沿道警察本分署ヘ遞報スヘシ

第四條 護送囚人ノ數ハ一行拾名以下トス護送警吏及ヒ繩取ノ人員ハ適宜タルヘシ但便利海路ニヨルトキハ適宜囚人ヲ増加スルヲ得

第五條 遞傳護送ハ日出ヨリ日没マテヲ限トス

第六條 警察本分署ニ於テハ護送囚人ノ鄉貫氏名刑名又ハ犯罪見込書ノ要領及著發日時ヲ記載シ置クヘシ

第七條 護送ノ囚人ハ沿道警察本分署ニ宿セシムヘシ若シ支障アルトキハ該地戸長ニ照會シ宿所ヲ定メ適宜取締ヲナスヘシ

第八條 護送途中囚人病發スルトキハ沿道警察本分署ニ付シ治療スヘシ若シ死去スルトキハ該地戸長ニ埋葬ヲ囑シ引取人アル者ハ之ニ付ス醫師ニ死去證書ヲ作ラシメ戸長及ヒ護送警吏連印シ書類物品ヲ併セ送達スヘキ衙署ニ遞付シ仍ホ發出衙署ニ報知スヘシ

第九條 護送途中囚人逃亡スルトキハ先ツ緝捕方ヲ最寄警察本分署ニ報告シ仍ホ發出衙署及ヒ達スヘキ衙署ヘ報告スヘシ

但第八條及ヒ本文ノ手續ヲ爲スルメ他囚護送ヲ遲緩ス可テス若シ速ニ手續ヲ了シ難キ場合ハ最寄警察本分署ノ助力ヲ請フコトヲ得

第十條 遞傳護送スル警察官吏ノ旅費ハ都テ沿道地方ノ警察費ヲ以テ支辨スヘシ

但繩取ノ雇給ハ第十一條第十二條ノ區別ニ依リ囚人ニ屬スル費用中ニテ支辨スヘシ

第十一條 第一條ニ掲クル囚徒ニ屬スル護送中ノ費用ハ明治十四年第十七號布告ニ依リ區分シ集治監ニ送ルトキハ沿道府縣ノ仕拂ニ立テ其他ハ出發府縣ノ監獄費ヨリ支拂フヘシ

第十二條 第二條ニ掲タル各犯人ニ屬スル護送中ノ費用ハ沿道地方警察費ヲ以テ支辨スヘシ

第十三條 護送囚人死没シ引取人ナキモ其所持金錢物品埋葬費ニ足ルモノアル者及陸軍隊付下士卒海軍下士卒ノ埋葬費ハ第十一條第十二條支辨ノ限ニアラス尤其費額ハ都テ拾圓以内タルヘシ但下士卒ノ分ハ追テ陸軍省海軍省ヨリ各自ニ拂戻スヘシ十五年第六十八號公達ヲ以テ金條改正

第十四條 遞傳ニ係ル囚人犯罪人ノ賄費額ハ警察本分署ニ於テハ都テ拘留人ノ例ニ依ルヘシ他ニ宿泊セシムルトキハ一宿ニ賄臥具點燈手数料ヲ併セテ金貳拾五錢以下一晝食金七錢以下藥價診察料等ハ實費支辨スヘシ

● 伺指令

● 已決囚押送及費用ノ件ニ付伺指令 明治十九年十二月五日 岐阜縣伺

第一條 損害要償私訴案件ニ付在監輕罪囚ニ對シ管轄控訴院ヨリ呼出狀送達アリ尙監獄ヘハ押送方照會アル場合ニ於テハ之ニ應シ被告人ヲ警察傳遞ニ付シ控訴院所在地ノ監獄ヘ押送シ同監獄ヨリ出庭セシムル儀ト心得可然哉

第二條 前條押送スヘキモノトセハ其押送費用ハ沿道警察費支辨ニ屬スルモノニ候哉

第三條 控訴院所在ノ監獄ニ滞留中ノ衣食費ハ其監獄ニ於テ支辨スル儀乎又ハ發送地ノ監獄費ヲ以テ實費ヲ支辨

スル乎或ハ在府縣獄囚徒費計算法ニ準シ一日金二十錢ノ割ヲ以テ支辨スル儀ニ候哉  
内務司法兩省指令 明治十九年十二月二十二日

第一條 何ノ通

第二條 其呼出テ請求シタル者ノ支辨タルヘシ

但發送者旅費ハ本年内務省令第十一號ニ依リ囚徒ノ諸賄費用ハ實費ニ據リ裁判所ニ請求スヘシ

第九十八

集治監ニ入ルヘキ囚徒並ニ其費用區分方ヲ定ム

明治十四年三月八日

布告第十七號

集治監ニ入ルヘキ囚徒並ニ其費用ノ區分當分ノ内左ノ通相定メ本年七月ヨリ施行候條此旨  
布告候事

第一條 集治監ニ入ルヘキ囚徒ハ刑期終身ノ者及ヒ國事犯刑期五年以上ノ者トス其費用  
獄ニ拘留中ノ費用并ニ集治監ニ押送ノ費用トモハ國庫ヨリ支給スヘシ

第二條 府縣獄ニ入ルヘキ囚徒ニシテ集治監ニ在ル者ノ費用ハ其刑ヲ宣告セシ地方  
稅ヲ以テ支辨スヘシ

(一) 監獄内ノ建物中稟請ヲ要セス處分ノ件 明治二十一年十二月十四日  
内務省訓令第二十六號府縣  
監獄内ノ建物ニシテ左ニ掲ケルモノハ自今稟請ヲ要セス處分シテ後其位置ノ略圖ヲ具シ一箇年取廻メ翌年一月三十一  
日迄ニ報告スヘシ

- 一 倉庫ノ新築
- 一 物置ノ新築
- 一 人民控所ノ新築
- 一 小使部屋ノ新築
- 一 監舎ニ關セサル廁ノ新築
- 一 馬廄ノ新築

地方稅規則  
第五百五十二  
第三條十八  
九項參看

(二) 已決囚ニ係ル經費區分實地取計方

明治十四年七月二十一日  
内務大藏兩省達乙第三拾四號警視廳府縣(沖繩縣ヲ除ク)集治監

本年第十七號公布ヲ以テ已決囚ニ係ル經費區分等被定候ニ付テハ實地取計方左ノ通可心得此旨相達候事

一 豫算ヲ以テ受入タル監獄費中國庫金ト地方稅トハ混一シテ諸費(懲役人ノ諸費)ヲ仕附置每一ヶ月囚員ノ延數ニ照シ  
平均ヲ以テ一囚若干ノ費金タルヲ算出シ而シテ刑期終身ノ者ト國事犯五年以上ノ者ノ延人員ニ乘シタル金額ヲ以テ  
國庫費ノ支出ニ可取計事

但臨時加給療養費埋葬費寫眞費移轉費ノ如キ懲囚ニ關ラサル費項ハ其囚員限リノ平均ヲ以テ算出スヘシ  
一 府縣獄ニ入ルヘキ囚徒ニシテ集治監ニ在ル者ハ經費モ前項ノ例ニ依リ地方稅支出方可取計事

(三) 集治監ニ入ルヘキ囚徒ノ費用管理方

明治十四年九月一日  
内務省達乙第四拾壹號警視廳府縣(東京府ヲ除ク)

本年第十七號布告ニ係ル費用ハ當省ニ於テ管理候條該布告第一條國庫下附金ハ當省ヨリ可下渡候ニ付以後豫算帳及ヒ  
決算帳等準テ當省ヘ可差出第二條地方稅受拂方ハ集治監ニ於テ直ニ爲取扱候條此旨相達候事

(四) 在府縣獄囚徒費小科目流用方

明治十五年十月十四日  
内務省達乙第五拾貳號警視廳府縣(東京府北海道三縣沖繩縣ヲ除ク)

在府縣獄囚徒費小科目(獄費、已決囚) 彼此流用支辨セントスルキハ當省ヘ伺出候儀ト可相心得此旨相達候事  
但本件伺出候儀ハ金員仕譯書添付スヘシ

(五) 監獄不用品賣拂代金看守罰俸等國庫地方稅收入區分方

明治十六年九月二十七日  
内務省達乙第三十八號集治監(樺戶空知

三池ノ三監ヲ除ク(府縣東京府及沖繩函館札幌根室ノ四縣ヲ除ク)

國庫下付金及地方稅受ケ入金ヲ以混一ノ上罪囚ノ刑期ニ區分シ十四年內務大藏兩省達乙第三十四號計算法ニ照據購入セシ監房常置ノ器具ヲ始メ戒具雜具等不用物品賣拂代金及看守罰俸金等納入方ノ儀國庫地方ノ區分計算ニ據ラヌ十五年度以降集治監ニ生セシモノハ總テ國庫へ收入シ警視廳及府縣ニ生セシモノハ地方稅へ收入セシメ候條此旨相達候事

〔六〕在府縣獄囚徒費取扱方

明治十七年六月十二日 內務省達乙第貳拾九號警視廳府縣(沖繩縣北海道三縣ヲ除ク) 在府縣獄囚徒費取扱方左ノ通改定候條十七年度ヨリ施行スヘシ此旨相達候事

但十四年七月內務大藏兩省乙第三十四號同年九月乙第四拾貳號十五年十月乙第五拾三號之達ハ十六年度限り廢止ス  
一 集治監ニ入ルヘキ囚徒ニシテ府縣獄ニ在ル者檢束衣食一切 從前ノ獄費已ノ費用トシテ一囚一日ニ付金貳拾錢ヲ交付スヘシ

但朝夕出入アルモ各一日ヲ以テ計算スヘシ  
一十四年十月乙第五拾三號達之内現員喪ハ差出ニ不及前々年度中宣告濟人員ニヨリ左ノ科目表ニ照據豫算帳調整定期ノ通差出スヘシ  
但十七年度分ハ差出ニ及ハス

(科目表略之)

〔七〕輕罪控訴被告人ニ係ル拘禁中ノ諸費支辨方

明治十八年四月二十四日 內務省達甲第拾三號警視廳府縣

輕罪ニ係ル控訴之儀ニ付本年第貳號ヲ以テ公布相成候付テハ控訴裁判所管轄區域内各地方ヨリ控訴ヲ爲シタル被告人ニ係ル拘禁中ノ諸費ハ總テ最前裁判官渡アリタル地方ノ地方稅ヲ以テ支辨シ其費用交付方等ハ客年當省乙第貳拾九號達ニ準據シ可取計此旨相達候事  
但控訴裁判決後已決囚ニ屬スル諸費モ本文同様可心得事

〔八〕陸海軍軍法會議ニ於テ處斷ヲ受ケタル囚徒ノ費用支辨方

明治十九年一月二十九日 內務省達甲第一號警視廳府縣

陸海軍軍法會議ニ於テ輕重懲役及ヒ劊官ヲ附加シタル禁錮ノ刑若クハ普通刑法ニ依リ懲役禁錮ノ處斷ヲ受ケ官職ヲ失ヒ軍籍ヲ除カレタル囚徒ニ係ル費用ハ來ル二十年度以後軍法會議所在地地方ノ地方稅ヲ以テ支辨スヘシ  
但從前陸海軍軍律ニテ處斷セラレタル囚徒ニ係ル費用ハ明治十四年三月第十七號公布ニ依リ區分シ陸海軍刑法ニテ徒刑流刑禁獄ノ刑ニ處セラレタル費徒ニ係ル費用ハ國庫費ヨリ支辨スヘキ儀ト心得ヘシ  
右相達ス

〔九〕在府縣獄囚徒費用交付金地方稅編入方

明治二十一年九月二十九日 內務省訓令第十九號警視廳府縣(沖繩縣ヲ除ク)

明治十七年本省乙第二十九號達ニ據リ集治監ニ入ルヘキ囚徒ニシテ府縣獄ニ在ル者ノ費用トシテ交付スル金額ハ府縣會ノ議決ヲ經地方稅ノ收入支出ニ編入スルコトヲ得

● 伺指令

● 徒刑囚海路押送費用之儀ニ付伺指令 明治十六年九月廿六日(電報) 山口縣伺

本月七日付御達徒刑囚海路押送費用ハ沿道府縣ニ關スルカ本縣限ノ國庫費カ又看守押丁旅費ハ本縣地方費ト連帶スルカ將國庫費ノミノ支辨カ至急御指揮ヲ乞フ

內務省指令 明治十六年十月六日

囚徒押送費ハ沿道府縣ニ關セス旅費共國庫費支辨タルヘシ

● 監獄ニ係ル沒收金ノ儀ニ付伺指令 明治十六年十一月十三日 三重縣伺

國庫費支辨ニ係ル囚徒ノ傭工錢及沒收金モ本年乙第三拾八號御達ニ據リ地方稅雜收入へ受入可然哉

內務省指令 明治十六年十一月二十日

工錢收入ハ從前ノ通り尤工錢ト雖モ沒收金ハ何ノ通り

第六類 第二章 囚人護送 囚徒費用



●雇工錢國庫費へ收入方ノ儀ニ付伺指令 明治十六年十一月二十二日 石川縣伺

今回御省乙第三十八號ヲ以テ地方國庫ノ兩費ニテ購入セシ監房常置ノ器具ヲ始メ戒具雜具等不用物品賣拂代金及ヒ看守罰俸金等十五年度以降集治監ニ生セシモノハ國庫へ警視廳及ヒ府縣ニ生セシモノハ地方稅へ收入スヘキ旨御達相成候處因徒雇工錢ノ儀ハ右御達ノ限リニハ無之十四年御省等乙第三拾四號御達計算法ニ據リ割合兩費ト地方費ヲ指ス以下兩費へ收入スヘキ哉ニ被存別紙寫ノ通電報ヲ以テ伺御指令有之候然ル處本年十一月七日官報第百九トアルハ皆全シ

〔別紙〕同縣伺 十六年十月九日

已決因雇工錢收入區分ハ今般乙第三十八號御達ノ外ナルヤ

內務省指令 明治十六年十月十八日

伺ノ通

●在府縣獄囚徒費取扱方改正ニ付疑義ノ件伺指令 明治十七年六月廿五日 群馬縣伺

第一條 集治監ニ入ルヘキ囚徒費用トシテ一四一日ニ付金貳拾錢ノ御下附相成候金額ハ悉皆仕拂惣高へ差繼可然哉

第二條 同囚徒工錢ハ從前之通國庫へ收入之儀ト心得可然哉

第三條 押送費ハ一四一日金貳拾錢ノ外現費御下相成候儀ト心得可然哉

第四條 上告期限即宜告濟ヨリ三日間及上告中ノ諸費ハ渾テ未決因諸費ヨリ支拂之儀ト心得可然哉此段相伺候也 內務省指令 明治十七年八月十六日

第一條 集治監ニ入ルヘキ現囚徒ニ應シ國庫ヨリ支出ノ金額ヲ地方稅ト併セ支辨スヘシ

第二條 地方稅へ收入スヘシ

第三條 押送費ノ豫算内ヲ以テ支辨スヘシ

但集治監へ押送ノ外移送ニ係ルモノハ日額貳拾錢ノ内ニ包含ス

第四條 上告セサル者ハ裁判官告ノ日ヨリ上告ニ係ル者ハ刑期ニ算入スヘキ日ヨリ國庫支辨トスヘシ

●在府縣獄囚徒費其他監獄費用取扱方ノ伺指令 明治十七年六月廿四日 警視廳伺

今般乙第二十九號ヲ以テ在府縣獄囚徒費取扱方ノ儀御達相成候處實際ノ取扱上ニ於テ集治監ニ入ルヘキ囚徒ニ對スル費用ハ總テ地方費中へ混一ニ仕拂置月々其現人員ニ應シ一四一日金貳拾錢ノ割合ヲ以テ國庫ヨリ支出シタル金額ヲ總支出額混一ノニ應シ各費目ニ割合地方費ノ方へ戻入候テ可然哉又ハ國庫ヨリ支出ノ金額ハ地方稅雜收入中へ編入候テ可然哉且陸軍監獄ヨリ當廳所轄監獄へ送致相成候囚徒ニ屬スル費用モ凡テ同様ノ取扱ト心得可然哉此段相伺候也

追テ本支費用一四一日金貳拾錢ノ額ヲ以テ仕拂候上ハ俯工錢其他ノ收入金ハ悉皆地方稅雜收入へ編入候儀ト見込候也

內務省指令 明治十七年八月十六日

一 國庫支出金取扱方ハ陸軍處刑囚ニ係ル分共前段伺ノ通

一 追書ノ趣伺ノ通

●在府縣獄囚徒費取扱方ノ件ニ付伺指令 明治十七年九月六日 德島縣伺

本年六月御省乙第貳拾九號同七月乙第三拾號ヲ以テ在府縣獄囚徒費取扱方及囚徒假留監へ送致方御達相成候ニ付

第六類 第二章 囚人護送 囚徒費用

テハ疑義ノ件左ニ相伺候也

一囚徒在監諸費トシテ一四一日金貳拾錢宛御下付相成候金額ハ裁判宣告ノ日ヨリ國庫費ノ仕拂ニ相立可然哉  
一集治監ヘ入ルヘキ囚徒裁判確定ノ上ハ直ニ假留監ヘ押送可致就テハ該囚徒途中衣服ノ儀都テ獄衣着爲致其費用ハ押送費ノ仕拂ニ相立可然哉

内務省指令 明治十七年九月三十日

第一條 刑期ニ算入スヘキ日ヨリ國庫支辨トスヘシ

第二條 伺之通

●全上ノ件ニ付伺指令 明治十七年七月三日 岐阜縣伺

第一條 集治監ニ入ル可キ囚徒ニシテ府縣獄ニ在ル者費用交付方今般内務省乙第貳拾九號ヲ以テ御改定相成候ニ付テハ該囚徒費用ハ他ノ囚徒費ト混同支辨シ御交付ノ金員ハ地方稅監獄費及監獄建築修繕費ノ總金額ニ割合各費ニ對スル額ヲ定メ地方稅豫算精算警察費國庫下渡金ニ準シテ調理シ可然哉

第二條 備工錢ハ御交付ノ金員ヘ可差總裁又ハ地方稅雜收入ニ取計可然哉

第三條 豫算調製方ノ儀ハ前々年度中宣告濟云々トアレモ其以前ヨリ越シ來ル人員アルキハ是又算入スル儀ト相心得可然哉

第四條 押送中ノ費用ハ總テ實費ヲ以テ別ニ御下渡可相成儀ト心得可然哉

第五條 府縣獄ニ入ルヘキ囚徒ニシテ集治監ニ在ルモノ、費用モ乙第二十九號御達ニ準スル儀ト相心得可然哉  
右相伺候也

内務省指令

第一條 集治監ニ入ルヘキ現囚員ニ應シ國庫ヨリ支出ノ金額ヲ地方稅ト併セ支辨シ地方稅豫算議案及精算報告書ハ國庫金ヲ扣除整理スヘシ

第二條 地方稅ヘ收入スヘシ

第三條 前々年度中宣告濟ノ人員ニ限ル

第四條 押送費ノ豫算内ヲ以テ支辨スヘシ

但集治監ヘ押送ノ外移送ニ係ルモノハ日額金貳拾錢ノ内ニ包含ス

第五條 實際ノ場合ニ於テ伺出ヘシ

●在府縣獄ヨリ支出ノ金額地方監獄費等へ戻入ノ伺指令 明治十七年十月十日 警視廳伺

在府縣獄囚徒費ヨリ支出ノ金額ヲ地方監獄費へ戻入ノ儀ハ曾テ何定ノ趣モ有之候處尙熱考候ニ總支出額ニ應シ戻入候ハ少シク不穩當ニモ有之候付一四一日金廿錢ノ割合ヲ以テ國庫ヨリ支出ノ金額ハ監獄費總支出高ノ内未決囚諸費ヲ除去シ而シテ當廳ノ如キハ監獄分署ヲ鍛冶橋市ヶ谷石川島ノ三箇所ニ分離相成居候付集治監ニ入ルヘキ囚徒ノ現ニ入監セシ分署限リノ費額ニ應シ各費目ニ割合地方費ノ方へ戻入候儀致シ度然ルキハ實際取扱上至便ノ儀ト思考候ニ付此段及上申候也

内務省指令 明治十七年十一月一日

伺之通

●在府縣獄囚徒費取扱方並地方稅豫算ノ儀ニ付伺指令 明治十七年十二月十二日 鹿兒島縣伺

本年六月御省乙第貳拾九號ヲ以テ在府縣獄囚徒費取扱方ノ儀御達相成候處實際ノ取扱上ニ於テ疑義ヲ生シ候件々左ニ

第一條 本年六月廿四日警視廳伺官報第三百四  
置キ月々其現人員ニ應シ一囚一日金貳拾錢ノ割合ヲ以テ國庫ヨリ支出シタル金額ヲ總支出額混一ノニ應シ各費目ニ割合地方費ノ方へ戻入候テ可然哉又ハ云々ト云フノ項ニ對シ前段伺之通ト御指令有之右各費目トハ監獄費中未決囚諸費ヲ除キ雜給雜費已決囚諸費及ヒ監獄建築修繕中未決檻ニ係ル部分ヲ除キ已決檻建築修繕費ノ總金額ニ割合地方費ノ方へ戻入候儀ト相心得可然哉

第二條 本年七月三日岐阜縣伺官報第三百八第一條末文地方稅豫算精算共警察費國庫下渡金ニ準シテ調理シ可然哉ト云フノ項ニ對シ地方稅豫算豫案及精算報告書ハ國庫金ヲ扣除整理スヘシト御指令有之右豫算豫案ヲ調理スルニ當リ各費目ヲ指スニ就キ扣除スヘキ國庫支出ノ員額ハ在府縣獄囚徒費ノ豫算高ヲ以テ各費目上ノ豫算總額ニ應シ算出致候儀ト相心得可然哉

內務省指令 明治十八年四月一日  
書面伺之通

●控訴ニ係ル囚徒工錢收入方ノ儀ニ付伺指令 明治十八年五月 日  
本年第貳號公布ニ依リ輕罪ニ係ル被告人控訴ヲ爲モシトキ拘禁中ノ諸費及裁決後已決囚ニ屬スル諸費ハ最前裁判官波シアリタル地方ノ地方稅ヲ以テ支辨シ其費用交付方ハ客年御省乙第貳拾九號達ニ準據シ可取計旨本年四月第拾三號ヲ以テ御達ノ趣モ有之就テハ該囚工錢ハ在府縣獄囚徒等シク就業地方ノ地方稅へ收入候儀ニ可有之哉  
內務省指令 明治十八年五月三十日  
書面伺之通

●輕罪控訴裁判被告人ニ係ル拘禁中ノ諸費精算仕上方ノ伺指令 明治十八年五月十四日  
愛媛縣伺  
御省本年甲第拾三號ヲ以テ輕罪ニ係ル控訴云々其控訴ヲ爲シタル被告人ニ係ル拘禁中ノ諸費ハ總テ最前裁判官波アリタル地方ノ地方稅ヲ以テ支辨ノ儀御達相成候處右甲地方則支拂ヲ爲スヘキ地方監獄費ニ於テハ乙地方監獄署在監中ノ日數ニ依リ一日金貳拾錢ヲ以テ支拂其精算ハ未決費裁決後已決囚ニ屬シ細科目外別途仕上ケニ執計可然哉且又右金員ヲ受入タル乙地監獄費ニ於テハ國庫下附金同様未決費裁決後已決囚ニ屬シ各科目へ割當戻シ入レニ執計可然哉  
內務省指令 明治十八年六月四日  
書面前段ハ伺ノ通後段ハ雜收入へ編入候儀ト可心得事

●輕罪控訴被告人押送費用ノ儀ニ付伺指令 明治十八年六月二十三日  
岐阜縣伺

輕罪ニ係ル控訴ノ儀ニ付本年第貳號ヲ以テ公布相成候ニ付テハ控訴裁判所管轄區域内各地方ヨリ控訴ヲナシタル被告人ニ係ル拘禁中諸費支出ノ儀ハ本年御省甲第拾三號ヲ以テ御達相成候處右押送途中費用ノ儀ハ沿道府縣ノ警察費ヲ以テ支辨シ可然哉此段相伺候也  
內務省指令 明治十八年七月十日  
書面伺ノ通

●軍律ニ依リ處斷アリシ在監人費用ノ儀ニ付伺指令 明治十八年七月八日  
愛媛縣伺

軍律ニ依リ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタル被告人在監中ノ費用ノ儀ハ明治十六年九月十九日附及ヒ同十七年八月八日附ヲ以テ御達ノ趣モ有之候得共聊カ疑岐ニ涉リ候場合有之候ニ付左ニ相伺候

一陸軍治罪法第十八條初項末項ノ末文ニ依リ地方裁判所ニ於テ軍律ニ照シ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタル被告人在監中ノ費用ハ陸軍省ノ支辨ニ屬スルヤ又ハ地方稅ノ支辨ニ屬スルヤ

一前項若シ陸軍省ノ支辨ニ屬スル者トスルハ未決在監中ノ費用モ悉ク陸軍省ノ支辨ニ屬スルヤ亦ハ刑名宣告ノ日ヨリ陸軍省ノ支辨トスルヤ

一陸軍治罪法第二十一條末文ニ依リ軍人ニアラサル者陸軍法術ニ於テ普通刑法ニ照シ刑ノ言渡ヲ受ケシキ在監中ノ費用ハ陸軍省ノ支辨ニ屬スルヤ亦ハ地方稅ノ支辨トスルヤ

內務省指令 十八年八月一日  
第一二項 普通裁判所ノ審判ニ係ル該囚在監中ノ費用ハ總テ地方稅ヨリ支辨スヘシ

第三項 本年第拾貳號公布以後普通裁判所ニ於テ處斷シタルモノハ地方稅ヨリ支辨スヘシ  
但同種ノ罪囚ト雖モ本文公布以前ニ在テ軍法會議ニ於テ處斷シ該術ヨリ送附シタル囚徒ニ係ル費用ハ陸軍省ノ支辨トス

●在府縣獄囚徒費ノ件ニ付伺指令 明治十九年五月五日 靜岡縣伺

移轉費ノ儀ハ集治監入囚徒護送ノ部度管下沿道各警察署ニ於テ該署請費ノ内ヲ以テ囚人膳料入力車賃橋錢藥價等一時雜費並其實費請求ニ依リ支出取計來リ候處十九年度以降ト雖モ右ニ取計可然哉若シ然ラサレハ他府縣ヨリ護送ノ囚人通行ニ際シ差支候ニ付該費ニ限リ豫メ沿道警察署ヘ概算ノ支出取計可然哉尤後段ノ如ク概算支出取計候事ハ正當受取證書ハ月々歳出報告書ヘ添付致兼候ニ付一周年度決算ノ節ニ至リ取束手進達シ可然哉

内務省指令 明治十九年五月十五日

後段伺ノ通取計正當受取人ノ領收證書報告書ト同時ニ送致シ難キ分ハ支拂人ノ證書差出シ置其正當證書ハ翌月分ト俱ニ送致スヘシ

●在府縣獄囚徒費支辨方ノ件ニ付伺指令 明治十九年六月二十八日 靜岡縣伺

一 徒刑ノ宣告ヲ受ケタル者裁判確定ノ上假留監ヘ押送ノ後餘罪發覺ニ付原裁判所ヨリ呼戻シ候節警察傳遞ヲ以テ押送途中費用ハ沿道警察費ヨリ支辨シ可然哉尤餘罪アルト雖モ原刑集治監ニ入ルヘキ囚徒ニ係ル費用ナルヲ以テ沿道國庫監獄費ヨリ支辨可致儀ト有之候哉  
一 甲地重罪裁判所ニ於テ徒刑ニ處セラレタル者アリ然ルニ餘罪有之ニ付裁判確定ノ上ハ乙地重罪裁判所ヘ可引渡旨甲地裁判所檢事ヨリ照會ニ依リ送附候事ハ該囚ニ係ル費用最前刑名宣告ノ日ヨリ乙地ヘ發遣ノ日迄甲地國庫監獄費ヨリ(日額金二十錢ツ)支辨シ而シテ押送途中費用ハ沿道警察費ヲ以テ支拂乙地ヘ到達ノ上ハ同日ヨリ該地國庫監獄費ヨリ支辨可致儀ト心得可然哉  
一 徒刑ノ宣告ヲ受ケタル者裁判確定ノ上餘罪發覺シ爲メニ未決監ヘ移ル者アリ右ハ未決在監中ト雖素ヨリ集治監ニ入ルヘキ囚徒ニ付該囚ニ係ル費用ハ日額金二十錢ツ、國庫監獄費ヨリ支辨シ可然哉  
一 徒刑ノ宣告ヲ受ケタル者裁判不服ニテ本人上告ノ者在監中費用計算方ノ儀ハ裁判確定ノ上刑期ニ算入スヘキ日ヨリ國庫支辨ニ屬スルハ勿論ト有之候得共右上告中會計年度ヘ涉リ候節ハ前年度經費決算方如何取計可然哉

内務省指令 明治十九年六月二十八日

第一項 前段伺ノ通  
第二項 第三項 伺ノ通

第四項 年度決算ノ場合ニ於テハ地方稅監獄費ヲ以テ假拂ノ儘計算ナリシ他日裁判確定國庫支辨ニ歸スルルハ該費ヨリ支出シ地方稅雜收入ニ編入スヘシ

但國庫出納閉鎖後既往年度ニ屬スル賦額ノ仕拂ヲ要スル節ハ其金額事由ヲ詳悉シテ其時々伺出ヘシ

第七類

第一章 戶籍諸則

● 戶籍ニ係ル沿革要領

明治元年三月士民トモ本國ヲ脱スルヲ禁スル旨ヲ揭示ス○同年八月布告ヲ以テ藩籍ヲ脱シ四方ニ周流シ職ヲ唱ヘシ者ヲ復籍セシム○同年十月十四日更ニ前令ヲ布告ス○二年二月三日布告ヲ以テ脱籍シテ米々本籍ニ歸ラサル者ヲ復籍セシム○同年三月八日布告ヲ以テ東京府下ノ戶籍ヲ正シ脱籍無産ノ徒ヲ取締リ總テ無籍ノ者ヲ蓋置クヲ禁ス○同年四月十五日浮浪ノ輩本籍ニ引戻方ノ手續ヲ示ス○同年九月十七日布告ヲ以テ東京所在ノ非人乞食等遠里ニ復歸セシメ再ヒ管外ヘ出サル様藩縣ニ於テ處置セシム○同年十一月三日布告東京在留ノ脱籍無産ノ輩復籍送方及旅費賄方等ヲ定ム○三年正月九日脱籍流浪ノ輩大道無道ヲ除ノ外舊惡ヲ糾サス復籍セシムヘキ御趣意ニ付警察ノ所設ナカラシム○同年九月四日脱籍無産ノ輩復籍方規則ヲ定ム○同年閏十月二十三日布告復籍人遞送賄料等ヲ定ム○同年十一月四日布告ヲ以テ縁組規則ヲ定メ其管轄ヲ異ニスル者送籍方ヲ示ス○同年十二月十五日布告ヲ以テ宮華族ノ家人復籍方等ヲ定ム○同年十二月廿日新律綱領ヲ頒テ逃亡律ヲ置ク○四年二月二十日布告ヲ以テ元武家華族ヲ東京府ノ貫屬トス○同年三月廿三日布告ヲ以テ府藩縣共上地管轄替等ニナリタル土地ニ住居ノ士族卒及諸藩東京定府ノ類直ニ住居ノ管轄地ニ送籍スルヲ許ス○同年四月四日布告ヲ以テ戶籍法則ヲ定ム○同年五月廿二日布告ヲ以テ三年十一月布告縁組規則中平民ノ送籍ハ戶籍法第五則ニ依ラシム○同年五月廿三日布告ヲ以テ三年九月布告脱籍無産ノ輩復籍方規則ヲ改正ス○同日布告士族卒實屬聲出願ノ節取扱方等ヲ定ム○同年五月廿八日布告ヲ以テ華士族卒等脱籍逃亡後ノ處分方ヲ定ム○同年六月十日布告ヲ以テ寄留旅行ノ者鑑札渡方ヲ定ム○同年七月三日布告ヲ以テ戶籍法第四號戶籍書式申本屬ヲ以テ寄留ノ地ニ編籍スルノ例ヲ刪ル○同年七月廿三日布告ヲ以テ寄留旅行者鑑札渡方ヲ廢ス○同年八月廿三日布告ヲ以テ華族ヨリ平民ニ至ルマテ互ニ婚姻ヲ許ス○同年八月廿八日布告ヲ以テ穢多非人ノ稱ヲ廢シ一般民籍ニ編入セシム

○同年七月四日布告ヲ以テ神社氏子守札渡方規則ヲ定ム○同年十月十四日布告ヲ以テ通國六十六部ヲ禁ス○同月廿八日布告ヲ以テ普化宗ヲ廢シ住僧ヲ民籍ニ編入ス○同年十二月廿六日布告ヲ以テ木貫ニ生業ノ目的ナキ脱籍人ハ府縣送りナシメ其地ノ徒場ニ入レ生業ヲ營マシメ生業立テ本人認ノ地ニ入籍セシム○五年正月第四號布告ヲ以テ戶籍法中心得方及改正ノ條ヲ示ス○同年四月第百十二號布告ヲ以テ四年十二月布告脫籍者徒場ニ入ルノ法ヲ改メ本罪日數ハ懲役ニ服セシメ滿期ノ後徒場ニ留置スル等ハ從前ノ通取計ハシム○同月第百十五號布告ヲ以テ華士族ノ子弟等民籍ニ加入スルヲ許ス○同年六月第百八十號布告ヲ以テ四年七月布告寄留旅行者鑑札渡方廢シノ儀ヲ再ヒ令ス○六年五月第百七十三號布告ヲ以テ自今脫籍ノ置復籍セサル者ハ律ニ照シテ處分ス○同月第百七十七號布告ヲ以テ脫籍及ヒ行衛知レサル者戶籍記載方并除籍スルノ年齡ヲ定ム○同年六月第百八十七號布告ヲ以テ華士族僧尼舊神官ノ家族子弟等送籍證受與方ヲ定ム○同月第百八十號布告ヲ以テ四年七月達氏子守札渡方ヲ中止ス○同年第百二十六號布告ヲ以テ改定律例ヲ頒チ逃亡條例五條ヲ置ク○同年七月第百四十二號布告ヲ以テ戶籍法則中第二十則第廿二則第廿三則六ヶ年目毎戶籍改ノ條例ハ追テ達スルマテ施行ニ及ハス○七年一月第八號布告ヲ以テ僧尼ノ族籍ヲ定ム○同年七月第七十三號布告ヲ以テ華士族分家スル者ハ平民籍ニ編入ス○同月第七十四號布告ヲ以テ本年第八號布告ヲ改定ス○八年十二月第廿九號ヲ以テ婚姻養子養女ノ取組又ハ離縁等雙方ノ戶籍ニ登記セサル内ハ其効ナキ者ト看做ス可キ旨ヲ達ス○十年二月第二十號達ヲ以テ追テ更ニ規則ヲ定ムルマテ戶籍製表差出ニ及ハス生死送入籍等戶籍增減加除ニ關スル事件區區戶長役場ニ於テ取扱フハ從前ノ通トス○同年十一月第七十六號布告ヲ以テ逃亡律ヲ廢ス○同年十二月第九十五號達ヲ以テ犯罪決放者並脫籍無産ノ置本籍マテ遞送スルヲ廢シ日下生活ノ道ナキ者ハ投産場又ハ懲役場ニ入レ使役セシム○十一年十一月第四十七號達ヲ以テ逃亡及失踪者六ヶ月毎模樣申立三十六ヶ月後未尋申付方ヲ廢ス但逃亡失踪ノ始末及復籍ノ節届出方ハ從前ノ通リトス○十二年二月第八號達ヲ以テ廢嫡ニ屬シ特許ヲ經ヘキ者ノ外士族家督相續養子實籍替自今出願ニ不及直ニ月長ニ届出シム○十五年第五十號布告ヲ以テ四年四月布告脫籍無産ノ置復籍遞送規則同年十二月脫籍無産ノ徒復籍方布告并二十年第九十五號達十一年第四十七號達等ヲ廢ス○十

七年七月七日華族令ヲ頒チ華族ノ戶籍ハ宮内卿管掌ス○十九年九月内務省令第十九號ヲ以テ出生死去出入及寄留者届出期限ヲ定ム○同年十月同省令第二十二號ヲ以テ戶籍取扱方手續ヲ定ム

**第九十九 戶籍法則** 明治四年四月四日 布告

今般府藩縣一般戶籍ノ法別紙ノ通改正被仰出候條管内普シ布告シ可申事

戶籍検査編制ハ來申年二月一日ヨリ以後ノ事ニ候ヘ共右ニ關係スル諸般ノ事ハ今ヨリ處置致ス可ク尤三都府及各開港場ハ人民輻湊ノ地ニテ取締向速ニ不相立候テハ難相成ニ付送籍入籍並旅行寄留ノ者ハ鑑札渡方寄留表取調方等當六月廿九日ヨリ後ル可ラサル事  
但不審ノ廉ハ民部省ヘ可承合事

右之通被仰出候事

人生始終ヲ詳ニスルハ切要ノ事務ニ候故ニ自今人民天然ヲ以テ終リ候者又ハ非命ニ死シ候者等埋葬ノ處ニ於テ其時々其由ヲ記録シ名前書員數共毎歲十一月中其管轄廳又ハ支配所ヘ差出サセ十二月中辨官ヘ可差出候事  
右之通管内社寺ヘ可觸達候事

戶數人員ヲ詳ニシテ撰ナラザラシムルハ政務ノ最モ先シ重スル所也夫レ全國人民ノ保護ハ太政ノ本務ナルヲ素ヨリ云フヲ待ダス然ルニ其保護スヘキ人民ヲ詳ニセス何ヲ以テ其保護

十七年七月七日  
日華族令(第七  
百一)被仰出  
華族ノ戸籍及  
身分ハ管内  
之ヲ管掌ス

十一號  
號布告ヲ以テ  
郡區町村編制  
法ヲ頒布シテ  
前ノ區畫ノ制  
ヲ廢シ町村ニ  
キ一長ヲ置キ  
律第一號ヲ以  
テ市制ヲ施行  
テ市制ヲ施行  
町村長ヲ置キ  
該制實施ノ旨  
長ハ前令中ノ  
故ニ本法中ノ  
長職ヲ管掌ス  
町村長ノ管掌  
スル所トナス

スヘキヲ施スヲ得ンヤ是レ政府戸籍ヲ詳ニセサルヘカテ儀ナリ又人民ノ各安康ヲ得  
テ其生ヲ遂ル所以ノモ、ハ政府保護ノ庇蔭ニヨラサルハナシ去レハ其籍ヲ逃レ其數ニ漏ル  
ルモノハ其保護ヲ受ケサル理ニテ自ツ國民ノ外タルニ近シ此レ人民戸籍ヲ納メサルヲ得サ  
ルノ儀ナリ中古以來各方民治趣ヲ異ニセシヨリ僅ニ東西ヲ隔ツレハ忽チ情態ヲ殊ニシ聊カ  
遠近アレハ即チ志行ヲ同フセス隨テ戸籍ノ法モ終ニ錯雜ノ弊ヲ免レス或ハ此籍ヲ逃レ或ハ  
彼籍ヲ欺キ去就心ニ任セ往來規ニヨラス沿襲ノ習人々自ラ度外ニ附スルニ至ル故ニ今般全  
國總體ノ戸籍法ヲ定メラル、ヲ以テ普ク上下ノ通義ヲ辨ヘ宜シク粗畧ノコナカルヘシ

第一則 戸籍舊習ノ錯雜アル所以ハ族屬ヲ分ツテ之ヲ編製シ他ニ就テ之ヲ收メサルヲ以テ  
遺漏ノ事アリト雖モ之ヲ檢査スルノ便ヲ得サルニ依レリ故ニ此度編製ノ法臣民一般華族卒  
隨テ豫メ區畫ヲ定メ毎區戸長並ニ副ヲ置キ長並ニ副ヲシテ其區内戸數人員生死出入等ヲ  
詳ニスル事ヲ掌ラシムヘシ

第二則 戸長ハ必ス長ト副トニ限ルヘカラス時宜ニヨリ長副數名アルモ妨ケナシトス  
〔但戸長ノ務ハ是迄各處ニ於テ莊屋名主年寄觸頭ト唱ル者等ニ掌ラシムルモ又ハ別人ヲ  
用ユルモ妨ケナシ〕

第三則 凡ソ區畫ヲ定ムル警ハ一府一郡ヲ分テ何區或ハ何十區トシ其一區ヲ定ムルハ四  
五丁モシクハ七八村ヲ組合スヘシ然レ共其小ナルモノハ數十ニ及ヒ大ナルモノハ一二ニ

戸籍取扱ハ十  
九年內務省令  
第二十號ニ  
依リ消滅ス

止ルモ都テ其時宜ト便利トニ任セ妨ケナシ華族土族住居ノ地從前武家地屋敷地  
唱ル類モ同様タル案ヨリ云テ待ス

〔但急ニ區畫ヲ定メ難キ所ハ假ニ便宜ニ從ヒ一村一町ニテ檢査セシムルモ妨ケナシ官ノ學  
校兵隊屯所等又ハ大社大寺ノ別ニ區域ヲナセシハ其官司ノ吏員其社寺ノ執事等ニテ戸  
長ノ事ヲ扱ハシムルモ妨ケナシ〕

第四則 戸長其區内ノ戸籍ヲ式ノ如ク之ヲ集メ〔一通〕ヲ清書シ〔更ニ第一號ト第二號ト式  
ノ如ク其區内總計ノ戸籍表ト職分表トヲ作り〕其集ル所ノ籍ハ戸長ニ備ヘ置〔清書二通り  
ト共ニ其支配所ニ差出スヘシ〕支配所之ヲ其廳ニ差出シ其廳之ヲ第五號第六號ノ式ノ如ク  
其管内總計ノ戸籍表ト職分表トヲ作り戸籍一通ハ其廳ニ備ヘ置キ一通ニ廳印ヲ押シ表ト  
共ニ六ヶ年目ニ改メ太政官ヘ差出スヘシ〔支配所トハ管轄内廣遠ノ處別ニ一小部ヲ置キ  
支配セシムル所ヲ云フ總テ出張所トイフノ類ナリ〕

〔但支配所ナキ所ハ直ニ其廳ニ出スヘシ以下准之〕

第五則 〔編製ハ爾後六ヶ年目ヲ以テ改ムヘシト雖モ其間ノ〕出生死去出入等ハ必其時々〔戸  
長〕ニ届ク〔戸長之ヲ其廳ニ届出テ〕支配所アルモノハ支配所ニ  
届ケ支配所ヨリ其廳ニ届ク其廳之ヲ受ケ人員ノ増減等本書ヘ  
加除シ毎年十一月中戸籍表ヲ改メ十二月中太政官ヘ差出スヘシ〔加除ハ生ルモノト入ルモノヲ  
フ云

第六則 管轄廳ニ於テ戸籍專任ノ吏員ヲ置キ其事ニ擔當セシムヘシ若シ遺漏粗略ノ事アル  
ニ於テハ其吏員並ニ〔戸長戸長ナキ大社  
大寺ハ執事〕ノ責タルヘシ

第七類 第一章 戸籍諸則

十二年第八號  
達テ以テ十七族  
貫籍管ノ儀管  
轄總へ出願ニ  
不及直ニ月忌  
へ届出シム

第七則 區内ノ順序ヲ明ニスルハ番號ヲ用ユヘシ故ニ每區ニ官私ノ差別ナク臣民一般番號ヲ定メ其住所ヲ記スニ都テ何番屋鋪ト配シ編製ノ順序モ其號數ヲ以テ定ルヲ要ス  
〔但區内ノ屋敷亡所トナリ又ハ一戸ヲ割テ二戸トシ二戸ヲ合セテ一戸トナスコアルル其由ヲ戶籍ニ記シ番號ハ其儘據置六ケ年目ニ至リ改ムヘシ〕

第八則 各地方貫屬或ハ平民ト事務アリテ全戸他ノ管轄所ニ引移ルモノハ其由ヲ〔本貫管轄廳へ願出其應ヨリノ送りヲ取り在留地ノ應ニ〕届ケ出其所ノ籍ニ編入スヘシ又故アリテ元ノ管轄所へ引移ル時ハ之ヲ戻スコト其始メ出ル時ノ如クシ其所ノ籍ニ編入スヘシ  
〔但當時全戸既ニ引移リシ官員ノ如キハ其官省ヨリ名前書ヲ在留地ノ應ニ達シ夫ヲ證トシ其住居ノ地區ニテ其籍ヲ收ムヘシ又本貫管轄廳ニハ其由ヲ其官省ヨリ達シ其應之ヲ聽キ其所ノ籍ヲ除クヘシ尤此ヨリ後引移ルモノハ此限コアラズ送籍スルコト本條ノ如クスヘシ(第八則ヲ云)若シ全戸引移ルト雖モ情故アリテ本貫管轄廳ノ籍ニアルヲ願フモノハ其地寄留ノ部ニ入レ情願ニ任スルモ妨ナシ〕

第九則 他ノ管轄地ニ引移ル時元ノ應ヨリ送籍スルニハ其當人ヨリ元住所ノ〔組合並ニ戶長〕ニ其由ヲ届ケ〔長副連印シ其應ニ届ケ其應之ヲ受ケ其應聽知ルノ證ヲ押シ〕當人ニ渡スヘシ  
〔但管轄内廣遠ノ場所別ニ支配所アラハ其支配所ニテ之ヲ達セシメ往來困却ノ弊ナカラシムルヲ要ス〕

四年七月二十  
二日布告ヲ以  
テ寄留鑑札ヲ  
廢ス十九年内  
務省令第十九  
號ヲ以テ寄留  
届出方ヲ定ム

第十則 他ノ管轄所ヨリ此管轄所ニ入籍スル時ハ元ノ管轄所ノ證ヲ持參シ其入ル所ノ〔戶長〕ニ其由ヲ通シ戶長其相違ナキヲ糾シ其所ノ籍ニ入ルヘシ〔而シテ戶長其元應ノ證ト其入籍セシ事ノ由ヲ時々其應ニ届クヘシ〕

第十一則 管轄内甲ノ區ヨリ乙ノ區ニ移ルカ如キモ第八則ヨリ第十則迄ノ例ヲ見合スヘシ但管轄内ナルヲ以テ送籍ハ戶長ヨリ之ヲ致シ入籍ノ上其入ル所ノ〔戶長〕ヨリ其應ニ届ケ其應之ヲ聽キ即チ本書ニ加除スヘシ〔加除ハ甲ノ籍ヲ除キ乙ノ籍ニ入ルノ類ヲ云〕但其區ニ於テ時々加除スルハ亡論ナルヘシ

第十二則 〔全戸引移ラヌ又ハ一時公私ノ用ニテ寄留スルモノハ其本貫管轄廳ノ鑑札ヲ持參シ寄留地戶長ニ通シ其寄留スル所ノ應ニ名前書ヲ添ヘ鑑札ヲ差出シ其應之ヲ受ケ即チ其應ノ鑑札ト引替遣スヘシ 鑑札ニハ當人名住所職分ヲ記スヘシ 而シテ其者歸國スル節ハ同様ノ例ヲ以テ元ノ鑑札ト引替歸國スヘシ〕  
〔但管轄内廣遠ノ場所別ニ支配所アラハ其支配所ニテ引替シムヘシ故ニ鑑札ハ豫メ支配所へモ備ヘ置クヲ要ス〕

第十三則 〔修行又ハ奉公ノ爲メ他國ニ寄留スルモノモ第十二則ノ例タルヘシ 第八則但書ト〕  
〔鑑札引替ノ節其戶長ハ其役場大社大寺ハ報章ニ差出ス名前書ニハ官員ハ當人兵隊ハ隊長證印シ自餘ハ戶主備主請人等證印スルヲ要ス 名前書式ハ第三號見合スヘシ〕

全戸引移リシ官員等ノ内寄留情願ノ者モ第十二則ノ例タルヘシ 第八則但書ト 見合スヘシ



同上旅行鑑札

ヲ廢ス

同上

宿帳改メ等ハ  
爾後警察官ノ  
職務ニ屬ス

〔但是迄修行又ハ奉公イダシ寄留スル者及ヒ事務アリテ寄留スルモノ其本貫ノ廳ニ届ケ鑑札請取第十二則ノ例ヲ以テ引替ヘシ若シ道路懸隔リ當人ヨリ本貫ノ廳ニ届ケ難キ事故アルモノハ其寄留地ノ廳ニ於テ戶主備主請人等ノ證書ヲ出サシメ其廳ヨリ直ニ其本貫ノ廳ニ掛合鑑札受取ヘシ但自今以後ハ此例ニアラス〕

第十四則〔凡ソ旅行スルモノ官員ハ其官省等ノ鑑札ヲ所持シ自餘ハ臣民一般其管轄廳ノ鑑札ヲ所持スヘシ寄留ノモノハ其所持スル鑑札ヲ用ユヘシ故ニ旅行ヲ以テ渡世トスルモノ、如キハ急速ノ便ヲ得ル爲メ豫メ其鑑札ヲ申受置モ妨ケナシトス第十二則但書ノ通所置シ〕

〔但其管轄廳ノ鑑札ニハ當人名住所ト職分ヲ記スヘシ名住所及職分ヲ變セシ時ハ右鑑札ヲ引替ヘシ〕

第十五則〔驛遞旅宿ニ於テハ其鑑札ヲ認メ〕之ヲ宿帳ニ記シ止宿セシムヘシ〔此證據ナキモノハ止宿セシムヘカラス〕

第十六則 宿帳ハ〔七日目毎ニ驛遞ハ其驛出張驛遞掛ノ〕改テ受自餘ハ其〔戶長ヘ出シ〕改テ受クヘシ旅籠屋ニ限ラス都テ逗留三日以上ハ其戶長ニ届ケ人民輻湊スル三都府ノ如キハ其時々戶長ヨリ其廳ニ届ヘシ九十日以上ハ寄留トシ〔第十二則ノ手續ヲナスヘシ〕旅人病氣又ハ異變ノ節速ニ届ケ出ルハ勿論ナリ

〔但戶籍改ノ節滞留スルモノハ其所持ノ鑑札ニ突合セ檢査スヘシ〕

第十七則〔各地ニ出張スル官員出入トモ其管轄廳ヘ届ケ其出張先ノ地方廳ヘモ届クヘシ〕

六年第百八拾  
七號布告ヲ以テ  
テ僧侶ノ族籍  
ヲ定ム

六年第百八拾  
七號布告ヲ以テ  
拾貳號布告ヲ  
以テ第二十則  
第二十則第六  
年目ヲ改メ  
條ハ道ヲ違  
ル迄施行ス  
ハストス  
同年第百八拾  
號布告ヲ以テ  
守札渡方ヲ中  
止ス  
十九年内務省  
令第廿二號ヲ  
以テ戶籍編製  
及改製方等ヲ  
定ム

但地方ノ廳懸隔リシ場所一時出張シ或ハ急遞ノ事務等アルハ其手續ナキアルベシ

第十八則〔僧侶ハ其得度ノ地ヲ以テ本貫トシ他寺ニ轉住スル時ハ送籍シ行脚遍參スルモノ寄留地ニ於テ鑑札引替ル事第十二則ノ例タルヘシ〕

第十九則〔鑑札ヲ所持シテ出奔死亡シ或ハ刑ニ處セラレ歸國セサルモノハ其所ノ官司ヨリ其由ヲ本貫ノ廳ニ達シ鑑札ヲ送り還スヘシ〕

第二十則〔六ケ年目毎ニ戶籍ヲ改ムルニ當リテ其戶籍取集メシ上ハ日限ヲ定メ其區々ニ於テ長並副區内一戶毎ニ其差出ス處ノ戶籍ト現在ノ人員ニ突合セ相違ナキヲ點檢スルヲ以テ法トスヘシ〕

〔寄留ノモノハ會テ届ケ出シ名前書ヲ以テ人員及所持ノ鑑札ニ突合セ相違ナキヲ證スルヲ以テ法トスヘシ凡テ寄留ノモノハ戶籍改ノ前第十二則第十三則ノ例ニ從ヒ鑑札ヲ受ケ名前書ヲ差出置ヘシ〕

〔氏神ノ守札モ其時檢査スヘシ〕  
〔但其土地ノモノニテ其土地ニ修行又ハ奉公シテ他家ニアルモノハ戶籍改ノ日限ニハ歸宅ニテ改ヲ受ク可シモシ慥ナル證據アリテ其日限ニ歸宅シ難キモノハ其證據ヲ以テ證トスルモ不得已ヘシ〕

第二十一則〔凡ソ戶籍ヲ檢査スルハ遺漏アルヘカラス又重複スヘカラスニツノ者ノ弊アレハ檢査ノ要ヲ失フ尤甚シトイフヘシ故ニ戶長ヲ設ケ地ニ就テ戶籍ヲ收ムルハ遺漏ノ弊ヲ防ク所トイヘトモ其戶籍ヲ出入スルニ當リテ出入ハ他ノ管轄内ヲ出此管轄内ニ入ル類ヲ云フ甲ノ區ヲ出乙ノ區ニ入ル類ヲ云フ深ク注意セサレ

第七類 第一章 戶籍諸則

ハ又重複ノ弊ヲ免ル能ハス故ニ六ヶ年目毎ニ戸籍ヲ改正スルニ當リ其戸籍ヲ検査スルノ日ハ天下府藩縣一般二月一日ヨリ五月十五日ヲ以テ終ルヲ法トスヘシ此間凡百

第二十二則 (六ヶ年目毎ニ二月一日ヨリ五月十五日迄凡百日間ハ戸籍ノ出入ヲ止ムヘシ但不得止事故アルニ由リ其人ハ移轉セシメ他ノ所ニ行カシムト雖モ戸籍ノ調ハ其本住所ノ廳ニテ之ヲ取集ムヘシ此百日ノ間ニ一般ノ戸籍調終ルヲ待テ五月十六日ヨリ送籍入籍ノ事ヲ所置スヘシ)

(但戸籍検査ノ日ニ當リテ二月一日ヨリ五月十日迄凡百日間 不得已移轉セシモノハ送籍入籍ノ時五月十六日ヨリ必ス其由ト其月日ト本書ニ書顯スヘシ)

第二十三則 (六ヶ年目毎ニ五月十六日迄ニ戸籍検査既ニ終リ其廳ニ於テ六月中第四則ノ例ノ如ク其管轄内總計ノ戸籍表ヲ作り第五號式本書共ニ七月中太政官ヘ差出スヘシ第四則ト見合スヘシ)

(但一紙ハ其廳ニ留置毎年出ス所ノ表ノ基トスヘシ)

第二十四則 (寄留者ノ届書ハ其寄留スル支配所ニテ支配所ナキモノハ其廳ニテ其時々之ヲ記録シ寄留表ヲ第七號式ノ如ク製シ出入人員増減ヲ隔月検査シテ其廳ニ出シ其廳之ヲ受ケ毎年十二月太政官ヘ差出スヘシ)

(但支配所アルハ某支配所ト表ノ左傍ニ記スヘシ)

第二十五則 (三都府ハ人民輻湊ノ地ナルヲ以テ寄留表ハ他ノ藩縣ニ拘ラズ隔月検査ノ時々即チ太政官ヘ差出スヘシ)

十九年内務省令第二十二號  
書式ニ依リ消滅ス  
同上

第二十六則 (民産調ノ如キハ一般ノ御布告アルヘシト雖モ此迄地方官ニテ戸籍中家産等書載サセ來リシハ其儘出スヘシ)

第二十七則 (戸籍表ノ用紙ハ厚紙ヲ用ヒ戸籍ノ用紙ハ美濃紙ノ寸法ヲ準トシ公用ノ野紙ヲ用ユヘシ戸長ト其廳ヘ收ムル分ハ其土地求メ易キ適宜ノ品ヲ用ユヘシ故ニ每區戸長ヘ本書分ノ公用野紙ヲ其廳ヨリ下ケ渡スヘシ)

第二十八則 各地ノ戸籍一例ナルヲ要スレハ字ノ細大行ノ高低ハ其記事ヲ標別スル爲メナルヲ以テ能ク注意シ成丈ケ細字ニ記スルヲ要ス

第二十九則 此迄厄介ト號セシモノ或ハ縁故アリテ養育スルモノ等ハ其族屬ト續柄ヲ肩書コシ其事由ヲ其名前ノ上ニ記スルヲ式ノ如クスヘシ

第三十則 華族等ノ從僕其邸内ニ住居シテ一戸ヲナセルモノハ式ノ如ク其主人ノ次ニ記シ社中寺内ニアルモノ此例ニ準スヘシ

第三十一則 (凡ソ僧尼ハミナ式ニ依テ其本貫得度ノ年月及ヒ其所ヲ記シ院內受職ノ外ハ皆弟子ヲ以テ記スヘシ)

第三十二則 (穢多非人等平民ト戸籍ヲ同フセサルモノ、如キハ其最寄ノ區ニテ其戸長ヘ名前書ヲ出サセ年齢疾病等ヲモ認ムヘシ其人員男女ヲ分チ戸籍表ニ書入レ差出シ廳ニテモ戸籍表ニ入ル、一左ノ如クスヘシ)

(但生死出入其最寄戸長ニテ取扱寄留旅行ノ規則等平民同様ノ例ニ從ヒ名前書ヲ六ヶ年

四年八月廿八日布告ヲ以テ穢多非人等ノ稱ヲ廢シ一般民籍ニ編入ス

此書式ニ依リ自來厄介ヲ附籍ト改ム

目ニ出サシムル戸籍ノ如クスヘシ  
第三十三則 都テ書式ハ臣民トモ體裁一ナレハ彼此相通シ參用シテ妨ナシ

第一號 區内戸籍表式 十九年内務省令第二十二號同年同訓令第二十號等ニ依リ消滅ス

第二號 區内職分表式 同上

第三號 寄留人届書式 十九年内務省令第十九號ニ依リ消滅ス

第四號 戸籍書式 區内戸籍紙數ノ嵩ニ從ヒ幾冊ニモ綴テ戸籍ノ二戸籍ノ三トスヘシ  
年號干支月改

某<sup>府</sup>管轄第何區戸籍之一

何國何郡  
何村何町  
何町何村  
合何ヶ村町

戸籍同戸列次ノ順

戸主

高祖父母 曾祖父母 祖父母 父 母 妻 子 婦 孫 曾 玄 兄 姉 大伯叔父 伯叔父 甥 從

孫 孫 弟 妹 母 母 母 弟

從弟 違  
 又 從弟  
 兄弟姊妹夫妻  
 大伯叔父母夫妻  
 伯叔父母夫妻  
 從弟以下夫妻

(以下書式ハ十九年第二十二號內務省令ニ依リ消滅ニ付除ク)

〔二〕戶籍法中心得方並改正ノ廉

明治五年正月十三日  
 布告第四號府縣

戶籍法中心得方區々相成候ケ條並改正ノ廉左之通ニ候條本書ニ照準シ取捨可致事

〔戶籍編制ノ事〕

戶籍編制ハ來申年正月晦日現在ノ人員ヲ根據トシ同二月一日ヨリ凡百日ノ間ハ右人員檢査ノ日限ナレハ右日限中ノ増減ハ翌年正月ノ取調ニ因テ改ムヘキ事

〔死者屆方期限ノ事〕

死者埋葬所ニ於テ記錄屆方ノ儀毎年十二月中迄ノ分翌年二月中ニ大藏省ヘ可差出事

〔戶長副給料ノ事〕

戶長副給料並入費ハ凡テ下方ヨリ取立相當支給可致事

〔番號ノ事〕

六年第二百四  
 十號布告ヲ以  
 テ戶籍改メ條  
 施行方ヲ停止  
 ス  
 墓地埋葬取締  
 規則(第百十  
 一)ニ依リ消  
 滅ス

五年第廿九號  
 布告ヲ以テ卒  
 ノ稱ヲ廢ス  
 十二年第八號  
 達ヲ以テ士族  
 貫籍替ノ儀直  
 ニ戶長ニ届出  
 シム  
 廿一年法律第  
 一號ヲ以テ市  
 町村長ヲ置キ  
 郡區町村編制  
 法中戶長ノ項  
 ナ廢ス  
 十七年內務省  
 訓令第二十號  
 (第百八十)第  
 八表乃至第十  
 四表ニ依リ戶  
 籍表等ノ件消  
 滅  
 同年同省令第  
 十九號ヲ以テ  
 寄留者届出方  
 等消滅ニ屬ス

番號ハ地所ニ就テ之ヲ數フ然レモ戶數點檢ノ爲メ戶毎ニ番號ヲ貼スルハ地方ノ便宜ニ任  
 ス可キ事

送籍證ノ事

凡送籍スル者華士族〔卒〕僧尼〔舊神官〕ハ〔戶長〕ヘ申立〔管轄廳〕ノ證ヲ受ケ〔平民〕ハ〔戶長  
 副連印〕ノ證ヲ可與事

但平民ノ出入臣民ノ出產死去等前月分取集メ翌月〔戶長副〕ヨリ其廳ヘ可相屆事

囚獄及徒流人ノ事

囚獄人及ヒ徒流人等其管轄內戶籍アル者ハ戶籍表ヘ載セ他管轄內ノ者ハ寄留表中ニ書載  
 ス可キ事

總計表並屆限期ノ事

戶籍及ヒ職分寄留總計並表共別紙雛形ノ通改正相成候事

但來申年ハ戶籍共七月中届出爾後ハ一ケ年分翌正月中取調二月ニ至可届出事

寄留者ノ事

〔凡寄留スル者ノ届書ハ官員神官華士族〔卒〕僧尼〔舊神官〕ハ當人兵隊ハ隊長平民ハ戶主備  
 主請人ノ内ニテ證印シ且寄留ノ地ニ於テ一戶ヲナセシ者ハ其管下ノ者同様届書ヘ屋敷番  
 號ヲ記シ其區戶長ヘ届ケシムヘシ戶長ハ總體ノ届書ヲ集メ式ノ如ク寄留總計ヲ作り其廳  
 へ出シ其廳之ヲ受ケ寄留表ヘ書載ス可キ事〕

(書式) 十九年内務省令第廿二號同訓令第二十二號ニ依リ消滅ス

(二) 戶籍法第五則出生死去出入等届出方及寄留者届出方ヲ定ム

明治四年四月四日布告戶籍法第五則出生死去出入等届出方及明治五年正月第四號布告第八項寄留者届出方左ノ通相定メ

來ル十二月一日ヨリ施行ス

第一條 出生アリタルトキハ十日以内ニ届出ヘシ

第二條 死者アリタルトキハ埋葬以前ニ届出ヘシ

第三條 失踪者復歸シ又ハ其行方知レタルトキハ十日以内ニ届出ヘシ

第四條 廢戶主廢嫡改名復姓身分變換其他願濟ノ上戶籍ニ登記スヘキ事項ハ其許可ノ指令ヲ受領シタル日ヨリ十日以内ニ届出ヘシ

第五條 前數條ニ記載シタル事項ハ戶主ヨリ届出ヘシ戶主未定又ハ不在ナルトキハ親族二人以上又ハ其事ニ關係アル者ヨリ本籍地戶長ニ届出ヘシ但本籍地外ニアルトキハ現在地戶長ニ届出且同時ニ本籍地戶長ヘ届書ヲ發送スヘシ

第六條 他府縣又ハ他郡區ニ寄留シタルトキ自己ノ所有地ニ於テハ寄留者ヨリ他人ノ所有地若クハ自己又ハ他人ノ借地借家ニ於テハ寄留者及地主又ハ家主又ハ其地所其家ヲ管理スル者ヨリ十日以内ニ其地戶長ニ届出且同時ニ本籍地戶長ヘ届書ヲ發送スヘシ

第七條 寄留地ヲ去ルトキ自己ノ所有地ニ於テハ寄留者ヨリ其他ニ於テハ地主又ハ家主又ハ其地所其家ヲ管理スル者ヨリ十日以内ニ其地戶長ニ届出ヘシ

第八條 寄留者本籍地ニ歸リタルトキハ戶主又ハ本人ヨリ十日以内ニ届出ヘシ

第九條 正當ノ理由ナクシテ前數條ニ違背シタル者ハ貳拾五錢以上壹圓貳拾五錢以下ノ科料ニ處ス

(三) 戶籍取扱手續ヲ定ム

明治十九年十月十六日  
内務省令第二十二號

戶籍取扱手續左ノ通相定ム

戶籍取扱手續

戶籍

第一條 戶籍ハ戶籍用紙ヲ以テ之ヲ造リ各戶ヲ別葉ニ登記シ一町村毎ニ帳簿ニ編製スヘシ但便宜ニ因リ一町村ヲ數冊ニ分綴シ又ハ數町村ヲ一冊ニ合綴スルコトヲ得

第二條 戶籍簿ハ副本ヲ造リ郡役所ニ納メ置クヘシ區長ニ於テ戶籍ヲ取扱フトキハ之ヲ管轄廳ニ納メ置クヘシ

第三條 若シ登記ノ事項多クシテ欄内ニ餘白ナキトキハ用紙ヲ以テ其欄上ニ掛紙シ之ニ登記スヘシ但本紙ト掛紙トノ綴目ニハ官印ヲ捺スヘシ

第四條 戶籍ハ字畫ヲ明瞭ニ記載シ添削スルコトヲ得ス若シ錯誤脱漏ニ依リ添削スルトキハ之ニ認印ヲ捺シ且其刪ルヘキモノハ朱線ヲ畫シ原文ヲ存スヘシ

第五條 戶籍簿ノ改製ヲ要スルトキハ管轄廳ノ許可ヲ受ケテ之ヲ爲スヘシ

第六條 戶籍簿燒亡紛失シタルトキハ郡役所又ハ管轄廳ニ納メ置キタル副本ニ據リ編製スヘシ

第七條 戶籍簿ノ改製又ハ編製ヲ爲シタルトキハ郡長又ハ管轄廳ニ差出シ其検査ヲ受クヘシ但改製ニ係ル原戶籍簿ハ少クモ五十年間之ヲ保存スヘシ

登記

第八條 戶籍ニ關スル届書ヲ受領シタルトキハ先ツ届出ノ事項及届出期限アルモノハ其事項ノ年月日並届出ノ年月日届出期限ナキモノハ其届出ノ年月日ヲ登記目録ニ記入スヘシ但本籍地外ニ在ル者ニ係ル事項ニシテ届出期限アルモノハ届書發送及受領ノ年月日ヲ之ニ記入スヘシ

第九條 登記目録ハ左ノ三種ニ分テ毎年一種毎ニ之ヲ編製スヘシ但一種中ニ部門ヲ設ケ之ヲ分綴スルモ妨ナシ

一加籍目録  
一除籍目録

一 異動目録

- 第十條 第八條ノ手續了リタルトキハ直ニ戸籍ニ届出ノ事項及届出期限アルモノハ其事項ノ年月日届出期限ナキモノハ届出ノ年月日ヲ登記シ届書ニハ受領ノ年月日及登記済ノ旨ヲ記入スヘシ
- 第十一條 戸籍ニ入ル者アルトキハ其戸籍ノ末ニ登記スヘシ戸籍ヲ除ク者アルトキハ其事項ヲ朱ニテ登記シ且其氏名ニ朱線ヲ畫スヘシ
- 第十二條 全戸入籍スル者アルトキハ直ニ戸籍簿ニ編入スヘシ
- 第十三條 全戸除籍スル者アルトキハ朱ニテ登記シ其戸籍ニ朱線ヲ畫シ便宜之ヲ除籍簿ニ移スヘシ
- 第十四條 戸主ニ代替アルトキ家族ハ總テ新戸主ノ横柄ヲ以テ戸籍ヲ改寫スヘシ但舊紙ハ官印ヲ以テ新紙ト割印シタル上除籍簿ニ移シ綴ツヘシ
- 第十五條 戸籍ニ登記シ諸届ニ記入シタルトキハ總テ之ニ認印ヲ捺スヘシ又諸届ハ一箇月分ヲ類集分綴シ翌月中ニ郡區役所ハ市町區役所ハ依リ制施行ニ依リ管轄廳ニ送付スヘシ但郡役所又ハ管轄廳ニ於テハ戸籍簿ヲ改製スル時マテ之ヲ保存スヘシ
- 第十六條 送籍ヲ請求スル者アルトキハ戸籍用紙ヲ以テ送籍狀ヲ作り直ニ入籍地ノ戸長區長ヘ發送シ且其送籍ノ事項及發送ノ年月日ヲ登記目録ニ記入スヘシ
- 第十七條 人別ノ送籍狀ニハ其人別ニ關シ戸籍ニ登記シタル事項及戸主ノ氏名身分住所ヲ記載スヘシ
- 第十八條 全戸ノ送籍狀ニハ戸籍ニ登記シタル事項ヲ遺漏ナク記載スヘシ
- 第十九條 入籍ヲ届出ルトキハ原籍地戸長區長ヨリ送達シタル送籍狀ト照查シ入籍ノ手續ヲ爲シ五日以内ニ入籍報知書ヲ原籍地戸長ヘ發送スヘシ原籍地戸長ニ於テ之ヲ受領シタルトキハ其受領ノ年月日ヲ登記目録送籍狀發送年月日ノ下ニ記入シ直ニ右入籍ノ日ヲ以テ除籍スヘシ

區役所ハ市町區役所ハ依リ制施行ニ依リ

寄留

- 第二十條 他府縣又ハ他郡區ヨリ寄留シタルノ届出アルトキハ入寄留簿ニ登記スヘシ其登記ハ總テ戸籍ノ例ニ依ル
- 第二十一條 入寄留簿ハ左ノ二種ニ分チ一種毎ニ之ヲ編製シ且一種中ニ一世帯ヲ爲ス者ト然ラサル者トヲ區別編製スヘシ但一世帯ヲ爲サル者ハ一帳簿ニ列記スルモ妨ケナシ
- 一 他府縣入寄留簿
- 一 他郡區入寄留簿
- 第二十二條 寄留地ヲ去リタルノ届出アルトキハ朱ニテ記入シ其入寄留人名ニ朱線ヲ畫シ其別業ヲ爲スモノハ便宜之ヲ除帳簿ニ移スヘシ
- 第二十三條 他府縣又ハ他郡區ヘ寄留シタルノ届書到達シタルトキハ出寄留簿ニ列記スヘシ
- 第二十四條 出寄留者復歸シタルノ届出アルトキハ朱ニテ記入シ其人名ニ朱線ヲ畫スヘシ

戸籍用紙雜形第一

此欄内ニハ住所ヲ記ス 事項アルトキハ此欄内ニ記ス		轉籍移居絶家廢家ノ 事項アルトキハ此欄内ニ記ス	
此欄内ニハ身分ヲ記ス 身分變換アリタルトキハ此欄内ニ記ス		此欄内ニハ前戸主ヲ記ス	
此欄内ニハ年月日及事項ヲ記ス以下同シ	此欄内ニハ父母ノ名及長ニ 男女タルコト又ハ夫ノ名ヲ 記ス以下同シ	此欄内ニハ戸主ノ氏名ヲ記ス 氏名ノ變換アリタルトキ ハ此欄内ニ記ス	此欄内ニハ生年月日ヲ記ス 以下同シ
此欄内ニハ月	此欄内ニハ日	此欄内ニハ主	此欄内ニハ記ス
此欄内ニハ	此欄内ニハ	此欄内ニハ	此欄内ニハ

第七類 第一章 戸籍諸則



此欄内ニハ年月日寄留地及退去等ヲ記ス									
此欄内ニハ本籍及族籍ヲ記ス 非戸主ナルトキハ戸主トノ 綴柄ヲ附シテスヘシ 此欄内ニハ本人ノ氏名ヲ記ス 此欄内ニハ生年月日ヲ記ス									

**四** 生死出入届漏及従前ノ寄留者届出期限并違犯者處分方ヲ定ム  
明治十九年十一月十日(同月十三日布告)  
 内務省令第  
 二十五號

**五** 戶籍登記書式ヲ定ム  
明治十九年十月十六日  
 内務省訓令第二十號北海道廳府縣  
 戶籍登記書式等別冊ノ通相定候條此式ヲ北進參酌シ其當ニ適セシムヘク尤戶籍簿及副本調製ノ儀ハ管轄廳ニ於テ時期ヲ見計ヒ漸次着手セシムル儀ト心得ヘシ  
(別冊)

戶籍登記書式第一

何府何郡何町									
何年何月何日何町何番地地先ニ於テ拾上					何年何月何日何町何番地地先ニ於テ拾上				
△何年何月何日何町平民氏名養子ト爲ル					△何年何月何日何町平民氏名引受ト爲ル				
何年何月何日何町通何處ニ於テ拾上					何年何月何日何町通何處ニ於テ拾上				
△何年何月何日何縣何郡何村平民氏名引受ト爲ル					△何年何月何日何縣何郡何村平民氏名引受ト爲ル				
					兒 棄 兒 棄				
					△氏一 氏一				
					△氏一 氏一				
					△氏一 氏一				
					△氏一 氏一				
入寄留簿登記書式第一									
何縣何郡何町何番地持家寄留									
士族									
本縣何郡何町何番地									

書式中△印ハ朱字又ハ朱線





何番地氏名方へ寄留届出部			
		△名	
		何年何月何日生	

出寄留簿書式第一

出寄留簿

他郡區之部

何村何番地士族氏名父

母 右同人妻 名 名

右同人二男

△弟 名

△何年何月何日何府何區何町何番地氏名方へ寄留替

右何年何月何日日本縣何區何町何番地へ寄留何月何日發送届書何月何日受領

何村何番地平民氏名三女

名

右何年何月何日日本縣何郡何村何番地氏名方へ寄留何月何日發送届書何月何日受領

何村何番地士族氏名弟

名

右何年何月何日日本縣何郡何町何番地氏名方へ寄留何月何日發送届書何月何日受領  
出寄留簿書式第二

他府縣之部

何村何番地士族氏名二男

△名

△何年何月何日復歸何月何日届出部

何村何番地平民

氏 名

母 名

妻 名

右何年何月何日何縣何郡何村何番地へ寄留何月何日發送届書何月何日受領  
登記目錄部門並事項書式第一

登記目錄

加籍目錄

本籍人管内出生之部

本籍人管外出生之部

棄兒之部

無籍者就籍之部

他府縣より入籍之部

一 結婚入籍

第七類 第一章 戶籍諸則

- 二 縁女入籍
  - 三 養子女入籍
  - 四 相續人入籍
  - 五 携帶者入籍
  - 六 親族入籍
  - 七 私生子引受
  - 八 棄兒引取
  - 九 棄兒引受替入籍
  - 十 離婚復籍
  - 十一 養子女離縁復籍
  - 十二 相續人離縁復籍
  - 十三 分家入籍
  - 十四 分家者復歸入籍
  - 十五 附籍者入籍
  - 十六 附籍者別立入籍
  - 十七 絶家再興入籍
  - 十八 轉住入籍
- 他郡區ヨリ入籍之部
- 事項同上
- 他戸長役場管内ヨリ入籍ノ部

事項同上

登記目録部門並事項書式第二

登記目録

除籍目録

- 本籍人管内死亡之部
- 本籍人管外死亡之部
- 失踪者及重籍者除籍之部
- 他府縣へ送籍之部
- 一 結婚送籍
- 二 縁女送籍
- 三 養子女送籍
- 四 相續人送籍
- 五 携帶者送籍
- 六 親族送籍
- 七 私生子引渡
- 八 棄兒引渡
- 九 棄兒引受替送籍
- 十 離婚送籍
- 十一 養子女離縁送籍
- 十二 相續人離縁送籍

第七類 第一章 戸籍諸則

- 十三 分家送籍
- 十四 分家者復歸送籍
- 十五 附籍者送籍
- 十六 附籍者別立送籍
- 十七 絕家再興送籍
- 十八 轉住送籍
- 他郡區へ送籍之部
- 事項同上
- 他戸長役場管内へ送籍之部
- 事項同上
- 登記目錄部門並事項書式第三
- 登記目錄
- 管内異動目錄
- 管内送入籍之部
- 事項加籍目錄入籍之部除籍目錄送籍之部ニ同シ
- 異動之部
- 一 戸内結婚
- 二 戸内離婚
- 三 家名相續
- 四 廢戸主

二十年三月十日  
 五日内務省訓  
 令第十三號ヲ  
 以テ(私生子)  
 ノ上ニ(庶子)  
 ナ加フ

- 五 廢嫡
  - 六 廢嫡者復立
  - 七 庶子私生子爲嫡出
  - 八 棄兒立戸
  - 九 失踪
  - 十 失踪者復歸
  - 十一 失踪者所在分明
  - 十二 改名
  - 十三 復姓
  - 十四 身分變換
  - 十五 廢家
  - 十六 絕家
  - 十七 轉住
  - 十八 戸籍訂正
- 登記目錄書式第一  
 明治何年加籍目錄  
 本籍人管内出生之部
- 第 號
- 父 母
- 何村何番地主族
- 氏 名
- 妻 名

第七類 第一章 戸籍諸則

二男

右名何月何日出生何月何日届出

第 號

何村何番地平民氏名長男

名

父

母

長女

右名何月何日出生何月何日届出

第 號

孫 婦

名 名 名

母

私生子

右名何月何日出生何月何日届出

登記目錄書式第二

明治何年加籍目錄

本籍人管外出生之部

第 號

何村何番地平民氏名弟

名 名

父

母

長男

右名何年何月何日何府何區何町ニ於テ出生何月何日發送届書何月何日受領

第 號

何村何番地士族

弟 妻

名 名 名

父

母

長女

右名何年何月何日何縣何郡何村ニ於テ出生何月何日發送届書何月何日受領

第 號

何村何番地士族氏名叔母

氏 妻

名 名 名

母

私生子

右名何年何月何日何縣何區何町ニ於テ出生何月何日發送届書何月何日受領

登記目錄書式第三

明治何年加籍目錄

棄兒之部

第 號

棄兒

名

推測何年何月生

右何月何日何村何番地ニ於テ拾上ケ

登記目錄書式第四

明治何年加籍目錄

無籍者就籍之部

第 號

何村(何番地)

氏

名

右無籍之處就籍ノ何月何日願濟何月何日届出

登記目錄書式第五

明治何年加籍目錄

他府縣ヨリ入籍之部

第 號

何村何番地平民氏名婦

長男名妻

名

何年何月何日生

右何縣何郡何町何番地平民氏名二女ヲ娶ル何月何日届出何月何日入籍報知書發送

第 號

何村何番地士族氏名長男名縁女

名

何年何月何日生

右何縣何郡何町何番地平民氏名長女ヲ貰受ク何月何日届出何月何日入籍報知書發送

第 號

何村何番地士族氏名養子

名

何年何月何日生

右何府何區何町何番地士族氏名二男ヲ貰受ク何月何日届出何月何日入籍報知書發送

第 號

何村何番地平民氏名相續人實兄

亡父氏名二男

何年何月何日生

何年何月何日生

右何縣何郡何村何番地平民氏名弟ヲ貰受ク何月何日届出何月何日入籍報知書發送

第 號

何村何番地平民氏名夫名長男

名

何年何月何日生

右何縣何郡何町何番地平民氏名甥ヲ父名結婚ニ付携帶入籍ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送

第 號

何村何番地士族氏名母

名

何年何月何日生

右何縣何郡何町何番地士族氏名叔母亡父名二女ヲ貰母ニ付引受ク何月何日届出何月何日入籍報知書發送

第 號

何村何番地平民氏名子

名

何年何月何日生

右何縣何區何町何番地平民氏名二女名私生子ヲ引受ク何月何日届出何月何日入籍報知書發送

第 號

何村何番地平民氏名三男

名

何年何月何日生

右何縣何郡何村何番地平民氏名引受棄兒氏名ヲ引取ル何月何日何地何裁判所裁判言渡何月何日届出何月何日入籍報知書發送

第七類 第一章 戶籍諸則

第 號

何村何番地平民氏名引受棄兒

氏 名

何年何月何日生

第 號

右何府何郡何村何番地平民氏名引受棄兒ヲ更ニ引受ク何月何日届出何月何日入籍報知書發送

何村何番地平民氏名二女

名

何年何月何日生

第 號

右何府何郡何町何番地平民氏名妻離婚ニ付復籍ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送

何村何番地士族氏名三女

名

何年何月何日生

第 號

右何縣何郡何村平民氏名養女離婚ニ付復籍ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送

何村何番地平民氏名弟

亡父名三男

名

何年何月何日生

第 號

右何縣何郡何村平民氏名相繼人離婚ニ付復籍ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送

何村何番地平民氏名孫

母名長女

名

第 號

右何縣何郡何村何番地士族氏名長女ヲ母名離婚ニ付携帶入籍ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送

何村何番地平民

氏 名

何年何月何日生

第 號

右何府何郡何町士族氏名二男名分家入籍ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送

何村何番地士族氏名二男

名

何年何月何日生

第 號

何年何月何日何縣何郡何村何番地士族氏名二女ヲ娶ル

妻 名

何年何月何日生

第 號

右何府何郡何町士族氏名二男名分家入籍ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送

何村何番地士族氏名二男

名

何年何月何日生

第 號

何年何月何日何縣何郡何村何番地平民氏名二女ヲ娶ル

妻 名

何年何月何日生

第 號

右何府何郡何町何番地平民氏名二女ヲ娶ル

妻 名

何年何月何日生

右何縣何郡何村何番地ヨリ附籍ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送  
第號

何村何番地平民

前戸主名

氏名

何年何月何日生

右何縣何區何町何番地土族氏名附籍之處別立入籍ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送  
第號

何村何番地平民

氏名

何年何月何日生

右何府何郡何村何番地平民氏名三男當村何番地絶家何氏ヲ再興ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送  
第號

何村何番地平民

亡父名長男

氏名

何年何月何日生

何年何月何日何縣何郡何村何番地平民氏名長女ヲ娶ル

妻名

何年何月何日生

長女名

何年何月何日生

右何縣何區何町何番地ヨリ轉住入籍ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送

登記目錄書式第六

明治何年加籍目錄

他郡區ヨリ入籍之部

登記目錄書式第七

明治何年加籍目錄

他戸長役場管内ヨリ入籍之部

登記目錄書式第八

明治何年除籍目錄

本籍人管内死亡之部

第號

何村何番地平民氏名母

名

右名何月何日死亡何月何日届出  
第號

何村何番地土族

氏名

右名何月何日死亡何月何日届出  
登記目錄書式第九

第七類 第一章 戶籍諸則



明治何年除籍目錄

本籍人管外死亡之部

第 號

何村何番地平民氏名二男

名

右名何年何月何日何府何區何町ニ於テ死亡何月何日發送屆書何月何日受領

登記目錄書式第十

明治何年除籍目錄

失踪者及重籍者除籍之部

第 號

何村何番地平民氏名又從弟

名

右名何年何月何日ヨリ失踪本年何月何日滿八十歳ニ至ルニ付除籍

第 號

何村何番地平民

名

右名八十一歳何ヶ月何年何月何日ヨリ失踪本年何月何日滿三十六ヶ月ニ至ルニ付除籍

第 號

何村何番地平民

名

右名何縣何郡何村何番地ニ現住シ同村在籍ノ者ニ付何月何日何村除籍

第 號

何村何番地士族氏名三男

名

右名何年何月何日何縣何郡何町何番地平民氏名養子ト爲リ同町在籍ノ者ニ付何月何日當村除籍

登記目錄書式第十一

明治何年除籍目錄

他府縣へ送籍之部

第 號

何村何番地平民氏名妹

父名三女

名

右何府何區何町何番地平民氏名妻ニ嫁ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領

第 號

何村何番地平民氏名長女

名

右何縣何郡何村何番地士族氏名長男名妹ト爲ル何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領

第 號

何村何番地平民氏名二男

名

右何縣何郡何村何番地士族氏名養子ト爲ル何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領

第 號

何村何番地平民氏名弟

父名四男

名

右何縣何郡何町何番地平民氏名實兄ニ付相續人ト爲ル何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領

第 號

何村何番地士族氏名甥

弟名長男

名

第七類 第一章 戶籍諸則

右何縣何區何町士族氏名ト父名結婚ニ付携帶送籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領  
第號 何村何番地士族氏名叔母 亡祖父名三女 名

右何府何郡何村何番地士族氏名實母ニ付引受ト爲ル何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領  
第號 何村何番地平民氏名二女名私生子 名

右何府何郡何村何番地平民氏名子ト爲ル何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領  
第號 何村何番地平民氏名引受棄兒 氏 名

右何縣何郡何村何番地平民氏名三男ナルコト發覺シ何年何月何日何地何裁判所裁判言渡ニ付引渡ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領  
第號 何村何番地平民氏名引受棄兒 氏 名

右何縣何郡何町何番地平民氏名更ニ引受ク何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領  
第號 何村何番地士族氏名妻 名

右何縣何郡何村何番地平民氏名二女離婚ニ付送籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領  
第號 何村何番地平民氏名養女 名

右何縣何區何町何番地平民氏名三女離婚ニ付送籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領  
第號 何村何番地士族氏名相續人實兒 亡父名二男 名

右何縣何區何町何番地平民氏名伯父離婚ニ付送籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領  
第號 何村何番地平民氏名長女 名

右何縣何郡何村何番地平民氏名孫母名離婚ニ付携帶送籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領  
第號 何村何番地士族氏名二男 名

右何府何郡何町何番地へ分家送籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領  
第號 何村何番地平民 妻 氏 名 長男 名 亡父名四男 名

右何縣何郡何町何番地士族氏名二男分家ノ處復歸送籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領  
第號 何村何番地平民 氏 名 長男 名 亡父名四男 名

右何縣何郡何町何番地士族氏名方へ附籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領 弟 名

第 號 右何府何郡何村何番地へ別立送籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領 何村何番地士族氏名附籍平民 氏 名

第 號 右何府何郡何町何番地ニ於テ絶家何氏ヲ再興ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領 何村何番地平民氏名三男 名

第 號 何年何月何日何縣何郡何村士族氏名姉ヲ娶ル 氏 名 妻 名 長女 名

右何府何郡何村何番地へ轉住送籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領 登記目錄書式第十二

明治何年除籍目錄 他郡區へ送籍之部 登記目錄書式第十三 明治何年除籍目錄 他戶長役場管内へ送籍之部 登記目錄書式第十四

明治何年管内異動目錄 管内送入籍之部

第 號 右何町何番地平民氏名伯父ヲ貰受ク何月何日届出 何町何番地平民氏名弟妻 弟名妻 名

第 號 右何町何番地士族氏名長男名長女ヲ娶ル何月何日届出 何町何番地平民氏名夫 名

第 號 右何町何番地平民氏名伯父ヲ貰受ク何月何日届出 何町何番地平民氏名長男長女 名

第 號 右何町何番地平民氏名二女ヲ貰受ク何月何日届出 何町何番地平民氏名養女 名

第 號 右何町何番地士族氏名二女ヲ貰受ク何月何日届出 何町何番地士族氏名養子 名

何年何月何日何縣何郡何村何番地平民氏名長女ヲ娶ル 養子名妻 婦 名 右何町何番地平民氏名廢家ノ上氏名ノ養子ト爲ル何月何日願濟何月何日届出

第 號

何町何番地平民氏名相繼人實弟

亡父氏名三男

右何町何番地平民氏名叔父ヲ貰受ク何月何日届出

何町何番地平民氏名養孫

養子名長男

右何町何番地平民氏名廢戸ノ上氏名ノ養子ト爲リタルニ付携帶ス何月何日届出

何町何番地士族氏名父

父名妻

母

右何町何番地平民氏名祖父母ヲ實父母ニ付引受ク何月何日届出

何町何番地平民氏名姪

弟名子

右何町何番地平民氏名妹名私生子ヲ弟名子トシテ引受ク何月何日届出

何町何番地平民氏名引受養兒

氏

右何町預リノ處引受ク何月何日届出

名

二十五年三月十日  
令第十三號  
以テ本項及次  
項ヲ改正ス

第 號

何町何番地平民氏名妹

名

右何町何番地士族氏名二男名妻離婚ニ付復籍ス何月何日届出

何町何番地士族氏名二女

名

右何町何番地士族氏名妾女離婚ニ付復籍ス何月何日届出

何町何番地平民

氏

妻

長女

名

右何町何番地平民氏名弟分家ス何月何日届出

何町何番地士族氏名叔父

名

右何町何番地へ分家ノ處復籍ス何月何日届出

何町何番地士族氏名附籍平民

氏

亡父名二女

妹

名

右何町何番地ヨリ附籍ス何月何日届出

何町何番地士族

第七類 第一章 戶籍諸則

何年何月何日何府何郡何村何番地士族氏名長女ヲ娶ル  
右何町何番地平民氏名へ附籍ノ處離籍ス何月何日届出  
第 號

右何町何番地士族氏名ニ男絶家何氏ヲ再興ス何月何日届出  
第 號

右何町何番地ヨリ轉住ス何月何日届出

登記目錄書式第十五

明治何年管内異動目錄

異動之部

第 號

右結婚何月何日届出

第 號

氏 名  
妻 名

何町何番地平民

氏 名

何町何番地平民

氏 名

亡父名妻

母 名

長男 名

何町何番地士族氏名長男

名 名

婦

何町何番地平民氏名養子

名 名

右離婚何年何月何日届出

第 號

右月主ヲ廢ス何月何日願濟何月何日届出

第 號

右父名退隱シ長男名相繼ス何月何日届出

第 號

右父名死亡跡相繼ス何月何日届出

第 號

右前月主父名失踪シ何箇年經過ニ依リ相繼ス何月何日願濟何月何日届出

何町何番地士族氏名長男

名

右廢嫡何月何日願濟何月何日届出

養子名妻 名  
長女 名

何町何番地平民

氏 名

何町何番地士族

氏 名

父 名

何町何番地平民

氏 名

何町何番地平民

氏 名

第 號

右廢嫡ノ處事故解除ニ付復立ヌ何月何日願濟何月何日届出

何町何番地士族氏名長男

名

第 號

右母名父名ト結婚ニ依リ嫡出ト爲ル何月何日届出

何町何番地平民氏名子

名

第 號

右寡兒ノ處年齡滿十三歳ニ達シタルヲ以テ新ニ一戸ヲ立ツ

何町何番地平民

氏

名

推測何年何月生

第 號

右何年何月何日ヨリ失踪何月何日届出

何町何番地士族氏名叔父

名

第 號

右失踪ノ處何月何日復歸何月何日届出

何町何番地平民氏名二男

名

第 號

右失踪ノ處何月何日何縣何郡何村ニ現在何月何日届出

何町何番地平民氏名弟

名

第 號

何町何番地平民

二十年六月四日  
内務省訓令  
第三十號ヲ以テ  
(番地)ノ下  
(同居)ノ二字  
ヲ削ル

右舊稱名ヲ改ム何月何日願濟何月何日届出

何町何番地士族

氏

名

右舊姓何チ原姓ニ復ス何年何月何日願濟何月何日届出

何町何番地士族

氏

名

右平民ノ處何月何日士族へ編入セラル何月何日届出

何町何番地平民

氏

名

右士族ノ處平民ニ歸入ス何月何日願濟何月何日届出

何町何番地平民

氏

名

右廢家ス何月何日願濟何月何日届出

何町何番地士族

亡

名

右死亡後六箇月ヲ過キ相續人ヲ届出サルニ付何月何日絶家ト爲ル

何町何番地平民

氏

名

第七類 第一章 戶籍諸則

右失踪ノ處年齡八十歳ニ達シ除籍シタル後六箇月ヲ過キ相續人ヲ届出サルニ付何月何日絶家ト爲ル  
第 號 何町何番地平民

右同町何番地ヨリ移轉ス何月何日届出  
第 號 何町何番地平民氏 名

右月主トノ續柄何ハ何ノ錯誤ニ付訂正何月何日願濟何月何日届出  
第 號 何町何番地土族氏名二男 名

右生年月日ニ何月トアルハ何月ノ誤ニ付訂正何月何日願濟何月何日届出  
第 號 何町何番地平民氏名三女 名

右名某字ハ某字ノ誤ニ付訂正何月何日願濟何月何日届出  
第 號 何町何番地平民氏名三女 名

〔六〕管廳郡役所ニ納ムル戸籍簿副本及寄留届等ノ件 明治十九年十月十六日  
内務省訓令第二十一號北海道廳府縣  
省令第二十二號戸籍取扱手續第二條第十五條ニ依リ管轄廳又ハ郡役所ニ納ムル所ノ戸籍簿副本及諸届ハ之ヲ保存スル  
ニ止メ加除異動ヲ登記スルニ及ハス又寄留ニ關スル届書ハ管轄廳又ハ郡役所ニ送付スルニ及ハサル儀ト心得ヘシ

〔七〕本籍外ノ者ヨリ差出タル届書取扱方 明治十九年十月二十六日  
内務省訓令第二十二號北海道廳府縣  
内務省令第十九號第五條但書ニ依リ本籍外ノ者ヨリ差出タル届書ハ左ノ如ク取扱フヘシ  
一寄留者ニ係ル届書ハ寄留簿ニ登記シタル上入寄留届書ト合綴スヘシ但出產ニ於テハ別ニ入寄留届ヲ爲サシムルニ  
及ハス

一寄留者ニ非サル者ノ届書ハ總テ便宜編綴スヘシ  
同令第六條ノ入寄留届書第七條ノ寄留者退去届書及第八條ノ寄留者復歸届書ハ類集編綴スヘシ

〔八〕本年省令第十九號施行以前出入寄留届出アル者寄留簿整理方ヲ定ム 明治十九年十一月十日  
則令第二十三號 (同十三日布告)内務省  
北海道廳府縣  
内務省令第十九號施行以前ニ於テ出入寄留ノ届出ヲ爲シ現ニ出入寄留ノ記載アル者ハ本籍地ニ於テハ出寄留者ノ留守  
引受人又ハ其戸主入寄留地ニ於テハ地主又ハ家主又ハ其地所其家ヲ管理スル者ヲ取調タル上出入寄留簿ヲ整理スヘシ

〔九〕參賀參拜ノ儀非役有位帶勳者ハ達方并位官勳等前科ノ有無調査區役所戸長役場ニ於テ  
爲取扱方ヲ廢セシム 明治二十年一月二十日  
内務省訓令第三號北海道廳府縣  
明治十九年十月内務省訓令第二十號ヲ以テ戸籍書式等相定メ位官勳等及處刑ハ戸籍ニ登記セサルヲ以テ從前新年朝拜祝  
節並御祭典ノ節參賀參拜ノ儀非役有位帶勳者ハ通達方及位官勳等前科ノ有無調査區役所戸長役場ニ於テ爲取扱候儀  
ハ自今相廢スヘシ尤明治十四年十二月司法省丁第三十三號達及明治十九年四月司法省令丙第六號ニ依リ輕罪裁判所檢事ノ  
通知書ヲ受タルトキハ便宜之ヲ編綴スヘシ

十四年司法省  
丁第三十三號  
達ハ第三十七  
十ノ第三十八  
十五丙第六  
號ハ同第三  
八項ニ掲ケ

●伺指令

●寄留者届出ノ伺指令 明治二十一年二月六日  
石川縣伺

他府縣へ出寄留中本籍移轉スルトキハ寄留所ハ轉セサルモ本籍異動ノ爲メ更ニ本人ヨリ寄留届ヲ爲サシムヘキ儀  
ニ候哉將本人ヨリハ寄留地戸長へ本籍異動セシノミノ届ヲ爲サシメ移轉地戸長へハ本人ヨリ更ニ寄留届ヲ爲サシ  
メ、前住地戸長ヨリ送籍ノ際讓ニ受理セシ出寄留届書ヲ引繼キ移轉地戸長ニ於テハ其引繼書ニ依リ出寄留簿へ登  
記シ尙引繼ニ依リ取扱タル事項ヲ記載セシメ出寄留ノ取扱ヲ了了爲致可然義ニ候哉  
内務省指令 明治二十一年二月二十一日

伺ノ通

●家督相續ニ關シ裁判處分ヲ受ケ控訴スルモノノ戶籍届方ノ伺指令 明治十七年二月六日 山口縣伺

家督相續其他戶籍ニ關スル異動ハ其郡度速ニ届出ツ可キ成規ニ有之候處去ル明治十年第十九號公布控訴上告手續第四條第五條ニ據レハ凡ソ始審裁判所ノ判決ニ服セサルモノハ裁判言渡ノ第七日ヨリ二個月間ハ何時ニテモ控訴スルコト得且此ノ場合ニ於テハ始審裁判言渡ノ執行ヲ停止セラルルニ此ニ家督相續ニ關シ訴訟ヲ起シ始審裁判所ノ判決ヲ得タル旨ヲ以テ立戶主ノ届チナシモノアランニ戶長ニ於テ其届ニ依リ直ニ戶籍ヲ更正スルモ其者即日ヨリ戶主ノ權ヲ有スルハ勿論ニテ財產ヲ賣却スル等モ亦戶主ノ自由ナレハ他日始審裁判言渡ノ第七日ヨリ二ヶ月間他ノ一方敗訴者ヨリ控訴シ控訴裁判所ニ於テ原裁判ヲ破毀スル場合モ有之不都合ヲ生候様被相考候處右ハ如何相心得可然哉 司法省指令 明治十七年三月二十一日(内務卿連署)

伺ノ趣控訴期限内ハ勿論控訴ヲ爲シタルモ其終審ノ判決アル迄ハ始審直者ノ届書ノミニ依リ戶籍ヲ更正ス可カラサルモノトス

但他ノ一方ノ者ニ於テ控訴セサル旨申立ルカ若クハ裁判所ノ命令書ヲ證トシテ更正ヲ求ムルモハ格別ナリトス

○第二章 種族 氏名 年齢

●種族ニ係ル沿革要領

明治元年五月三日德川氏ニ令シテ旗下歸順ノ體ヲ自今朝臣ト爲ス○同月二十四日布令シテ高家交代寄合チ一席トナシ中大夫ト稱シ元寄合元兩番席以下席千石以上チ一席トナシ下大夫ト稱シ元兩番席以下席々千石以下百石迄チ一席

トナシ上士ト稱ス○二年六月十七日公卿諸侯ノ稱ヲ廢シテ華族ト改稱ノ旨ヲ布告ス○同年七月行政官支那同附ヲ以テ辨官支那同附ト爲ス○同年十二月二日大夫士以下ノ稱ヲ廢シ改テ士族卒ト稱ス○三年二月五日華族ニ令シテ元服ノ輩自今齒ヲ染メ眉ヲ掃フヲ停止ス○同年九月十日各藩中士族卒ノ外別ニ等級ナカラシムルヲ令ス○同年十一月二十日布告シテ華族元武家ノ輩自今東京ニ住居セシム○同年十一月府縣實屬ノ内番幕府ニ於テ躑躅之間取扱ヲ受クルモ譜代ノ申渡ナキ者ハ卒ト爲ス○同月宮元堂上卒族並舊官人等士族卒トシ華族以下地方官實屬ト爲ス旨ヲ布令ス○四年二月二十日布告チ以テ元武家華族ノ輩總テ東京府實屬ト爲ス○同年八月二十八日布告チ以テ穢多非人ノ稱ヲ廢シ自今身分職業トモ平民同様ト爲ス○同年十月二十八日尊化宗ヲ廢シ住僧ヲ民籍ニ編入ス○同年十二月十八日布告チ以テ華士卒在官ノ外農工商ノ職業ヲ營ムヲ許ス○五年正月第二十九號ヲ以テ卒ノ稱ヲ廢シ各府縣實屬卒ノ内從前番代抱替等ノ稱ヲ以テ其俸等へ祿高ヲ給シ自然世襲ノ姿トナリシモノハ士族ニ列セシムル旨ヲ布告ス○同年二月第四十四號布告チ以テ舊來郷士ト稱シ家筋由緒アル者ヲ士族ニ列ス○同年四月第十五號布告チ以テ華士族子弟厄介等民籍編入ヲ許ス○七年一月第八號布告チ以テ僧尼族籍編入方ヲ布告ス○同年七月第七十三號布告チ以テ自今華士族分家ノ者ハ平民籍ニ編入セシム○同月第七十四號布告チ以テ僧尼族籍編入ノ布告ヲ改正ス○十二年二月第八號達ヲ以テ士族家督相續養子實屬替ノ儀廢嫡等ニシテ特許ヲ經ヘキモノノ外ハ出願ニ不及直ニ戶長ニ届出シム○十三年一月第三號布告チ以テ華士族ノ當主死亡後相續人ナキ者家名繼承期限ヲ定ム

第百 華士族ノ子弟民籍加入ヲ許ス 明治五年四月九日 布告第百十五號

自今華士族子弟厄介ノ輩民籍ニ加入爲致候儀可爲勝手事

(二)僧尼族籍編入方 明治七年七月十日 布告第七十四號

今般華士族分家候者ハ總テ平民籍ニ編入相成候ニ付本年一月第八號僧尼族籍編入ノ布告自今左ノ通更定候條此旨僧侶ヘ布告スヘキ事



- 一 僧尼ノ輩族籍被相定候條各自其原籍ニ復スヘキ事
- 一 原籍不分明又ハ復籍ヲ望マサル者ハ現在地ヘ別ニ本籍相定若シ現在地ノ外ヘ本籍相定度望ノ者ハ一旦現在地ヘ定籍ノ上其地ヨリ望ノ地ヘ送籍スヘシ
- 但別ニ本籍相定候者ハ元身分ニ不拘總テ平民籍タルヘキ事
- 一 眞宗(維新以來華族ニ列セラレシ者ヲ除クノ外)并ニ舊修驗等世襲ノ者モ一般平民タルヘキ事
- 一本末寺共其住職タル者宗教事務管理ノ儀一般職分同様タルヘキ事
- 但一寺住職ノ者ハ平民タリ共總テ身分取扱士族ニ準シ候儀ハ從前ノ通タルヘキ事
- 一 戶籍法中右等ニ牴觸ノ廉ハ總テ廢止候事
- 二 人民署名肩書 明治八年二月二十五日 布告第四十四號
- 人民署名肩書ノ儀自今貫屬或ハ管下ノ文字ヲ除キ何處華族士族平民ト記載可致此旨布告候事

- 但從來ノ諸規則及ヒ雛形中ニ掲載セル肩書ノ儀モ總テ本文ノ通可相心得事
- 三 華士族當主死亡後相續人ヲ定ムル期限 第五百五ノ五 項ニ出ス
- 四 士族家督相續養子貫籍替届出方 第五百五ノ十 項ニ掲ク
- 五 士族家督相續管轄替等身上異動届差出ニ及ハス 明治十年二月十二日 內務省達乙第拾貳號府廳ヘ達 士族家督相續又ハ管轄替等身上異動届ノ儀自今不及差出候條此旨相達候事

華族局ハ舊位局ト改ム

〔六〕華族養子女縁組離縁復籍及貫屬替轉居等ノ送入籍ヲ了シタルトキ華族局ヘ通牒方 明治十八年十二月八日 宮内省達乙第貳號華族有之府廳

〔七〕有位者改名貫屬替死去願届ヲ取扱タルトキ郡區長ヨリ華族局ヘ通牒方 明治二十年六月二十日 宮内省達第三號 北海道府廳

〔八〕華族貫屬替願出方 明治二十年十月十五日 宮内省達第五號華族一般 自今地方ニ就キ產業ニ從事シ或ハ家計ヲ維持スルノ目的ヲ以テ各府縣並北海道ヘ移住セントスルモノハ其事情ヲ具シ貫屬換願出ヘシ其目的至當ト認ムルモノハ問届クヘシ

〔九〕僧尼編籍處分方 明治八年十一月十七日 內務省乙第百五拾壹號府廳ヘ達 僧尼之輩定籍ノ儀ニ付昨年第七拾四號ヲ以テ公布相成候處各自原籍ニ復スル分ハ格別現在地ヘ本籍ヲ定ムルニ至ツテハ自然各地方區々ノ所分ニ相涉リ候テハ不都合ニ付左ノ通相心得速ニ可致編籍此旨僧尼ヘ布達スヘキ事 心得方

一 原籍不分明又ハ復籍ヲ望マサル者ハ現今住所ノ區内ヘ別ニ本籍可相定尤本籍ヲ定ムルニ付更ニ土地及ヒ家屋ヲ設ケルニ及ハス現在地ノ區戶長(中立其區内(村町)ヘ定籍スヘシ若シ現在地ノ區内(村町)ノ外ヘ本籍ヲ定メ度望ノ者ハ一旦前條ノ如ク定籍ノ上其地ヨリ望ノ地ヘ送籍スヘキ事 但別ニ本籍ヲ定ムル者身分ノ儀ハ昨年第七拾四號公布ノ通タルヘキ事

〔十〕僧尼住職中寺院へ居住ニ付心得方

明治九年六月九日

教部省達書第貳拾壹號府縣

僧尼編籍ノ件昨八年十一月内務省乙第百五拾壹號達書ニ據リ各自本籍爲相定候上ハ住職中其寺院へ居住ノ儀總テ從前之通可相心得管ニ付此旨寺院へ可布達事

伺指令

●有位者貫屬替死亡届通牒方ノ件ニ付伺指令 明治二十年六月二十二日 千葉縣伺

本年達第三號ヲ以テ有位者改姓名貫屬替又ハ死亡セシトキハ其願届ヲ取扱タル郡區長ヨリ直ニ御省華族局へ通牒スヘキ旨拜承然ルニ貫屬替死亡届ノ義ハ戶長ニ於テ取扱候義ニ付右ハ戶長ヨリ直ニ通牒爲致可然歟

宮内省指令 明治二十年六月二十七日  
伺ノ趣郡區長ヨリ通牒セシムヘキ義ト心得ヘシ

第一百一 華族令

明治十七年七月七日  
宮内省達番外華族一般

華族令左ノ通被 仰出候ニ付此旨相達候事

奉勅

華族令

第一條 凡ソ爵ヲ授クルハ 勅旨ヲ以テ宮内卿之ヲ奉行ス

第二條 爵ヲ分テ公侯伯子男ノ五等トス

第三條 爵ハ男子嫡長ノ順序ニ依リ之ヲ襲カシム女子ハ爵ヲ襲クコトヲ得ス但現在女戶主

ノ華族ハ將來相續ノ男子ヲ定ムルトキニ於テ親戚中同族ノ者ノ連署ヲ以テ宮内卿ヲ經由シ授爵ヲ請願スヘシ

第四條 嗣今有爵者又ハ戶主死亡ノ後男子ノ相續スヘキ者ナキトキハ華族ノ榮典ヲ失フヘシ

第五條 有爵者ノ婦ハ其夫ニ均シキ禮遇及ヒ名稱ヲ享ク

第六條 華族戶主ノ戶籍ニ屬スル祖父母、父母及妻及嫡長子孫及其妻ハ俱ニ華族ノ禮遇ヲ享ク

第七條 本人生存中相續人ナシテ爵ヲ襲カシムルコトヲ得ス

但刑法又ハ懲戒ノ處分ニ由リ爵ヲ奪ヒ又ハ族籍ヲ削ラレ更ニ特旨ヲ以テ相續人ニ授クル者ハ此例ニ在ラス

第八條 華族ノ戶籍及身分ハ宮内卿之ヲ管掌ス

第九條 華族及華族ノ子弟婚姻シ又ハ養子セントスル者ハ先ツ宮内卿ノ許可ヲ受クヘシ

第十條 華族ハ其子弟ヲシテ相當ノ教育ヲ受ケシムルノ義務ヲ負フヘシ

〔一〕華族席順 明治十七年七月十五日

宮内省達乙第五號華族一同

華族席順ハ爵ヲ以テ定ム爵同キ者ハ位階ヲ以テ定ム  
右相達候事

〔二〕麝香間祇候待遇 明治十七年五月十五日

宮内省達乙第六號麝香間祇候華族

爵位無爵者ハ特ニ其主ノ爵ニ均シキ禮遇ヲ享ケシム  
右相達候事

第百二 華族世襲財產法 明治十九年四月二十九日公布  
勅令第三十四號

朕華族世襲財產法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治十九年四月廿八日

內閣總理大臣伯爵伊藤博文

勅令第三十四號

華族世襲財產法

- 第一條 華族戸主滿二十年以上ノ者ハ此法ニ依リ世襲財產ヲ創設スルコトヲ得但滿二十年以下ノ者ト雖モ前代戸主ノ遺言アルトキハ世襲財產ヲ創設スルコトヲ得
- 第二條 世襲財產ハ總テ家督相續者ヲシテ之ヲ相續セシムルモノトス
- 第三條 世襲財產ハ左ニ掲クル所ノ二類ニ限ル但第十五國立銀行株券ハ第二類ニ準シ世襲財產ト爲スコトヲ得
- 第一類 田畑山林宅地鹽田牧場池沼等
- 第二類 政府發行ノ公債證書又ハ政府ノ保證若クハ特別ノ監督ニ屬スル銀行若クハ會社ノ株券

第四條 世襲財產ハ前條二類中ノ一種又ハ數種ニシテ其總額毎年金五百圓ニ下ラサル純收益ヲ生スル財產タルヘシ但其財產中收益ナキ地所ヲ加フルモ妨ケナシ

第五條 世襲財產ノ所有者ハ特ニ世襲スヘキ建物庭園圖書寶器等ヲ以テ世襲財產附屬物ト爲スコトヲ得

第六條 負債償却ノ義務アル財產ハ世襲財產及ヒ附屬物ト爲スコトヲ得ス

第七條 世襲財產ノ所有者ハ宮内大臣ノ認可ヲ得テ其財產ヲ増加スルコトヲ得

第八條 世襲財產ノ所有者ハ宮内大臣ノ認可ヲ得テ第二類ノ財產ヲ更換シテ第一類ノ財產ト爲スコトヲ得但第一類ヲ第二類ト爲スコトヲ得ス

第九條 第一類ノ財產若シ災害又ハ其他ノ事故ニ依リ第四條ノ制限額ヨリ減シタルトキハ五箇年以内ニ其缺額ヲ補充スヘシ

第十條 第二類ノ財產其元金ノ任拂ヲ受ケタルトキハ一箇年以内ニ第一類又ハ第二類ノ財產ヲ以テ其缺額ヲ補充スヘシ

第十一條 世襲財產ノ所有者ハ其財產ノ純收益ヲ抵當トシテ負債ヲ爲スコトヲ得但毎年其純收益ノ三分一以上ノ償却ヲ爲スヘキ義務ヲ負擔スルコトヲ得ス

第十二條 世襲財產ノ純收益ハ如何ナル場合ト雖モ債主ヨリ毎年其三分一以上ヲ差押フルコトヲ得ス

第十三條 世襲財產及ヒ附屬物ハ之ヲ賣却讓與シ又ハ質入書入ト爲スコトヲ得ス

第十四條 世襲財產及ヒ附屬物ハ負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得ス

第十五條 世襲財產ハ左ノ場合ニ於テハ其効力ヲ失フモノトス

一 戸主死亡ノ後家督相續スヘキ男子ナキトキ

一 爵ヲ奪ハレ又ハ族ヲ除カレ家督相續者ナキトキ

一 第九條第十條ニ掲ケタル欲額ヲ其期限内ニ補充セサルコトキ

第十六條 世襲財產及ヒ附屬物ハ其所有者ニ於テ之ヲ廢止スルコトヲ得ス

第十七條 世襲財產ハ宮内大臣之ヲ管理シ華族局ヲシテ其事務ヲ取扱ハシム

第十八條 華族局ハ世襲財產臺帳ヲ備ヘ置キ世襲財產及ヒ之ニ關スル事項ヲ記入スヘシ

第十九條 世襲財產ヲ創設増加更換又ハ補充セントスル者ハ其願書ニ財產目錄ヲ添ヘ宮内

大臣ニ差出シ其認可ヲ受クヘシ世襲財產附屬物ヲ設ケントスル者亦同シ

第二十條 宮内大臣ハ前條ノ願書目錄ヲ審查シ第一類ノ財產及ヒ第二類ノ公債證書ハ所轄

ノ地方廳ニ命シ株券ハ銀行若クハ會社ニ命シ世襲財產ト爲スヘキ旨ヲ官報及ヒ其地方一

定ノ新聞紙ニ掲ケ一週日間之ヲ公告セシムヘシ

世襲財產附屬物ハ華族局ニ於テ之ヲ公告スヘシ

第二十一條 前條公告ヲ了リタル後三十日ヲ經テ該財產ニ關シ故障ヲ申出ル者ナキトキハ

宮内大臣ハ世襲財產臺帳ニ記入セシメ第一類ノ財產ハ所轄ノ地方廳ニ命シ〔地券〕臺帳ニ

記入セシメ地方廳ハ戶長ニ命シ公證簿ニ記入セシムヘシ第二類ノ公債證書ハ所轄ノ地方

廳ニ株券ハ銀行若クハ會社ニ命シ帳簿ニ記入セシムヘシ

華族局ニ於テハ該地券又ハ公債證書若クハ株券ノ券面ニ世襲財產ト爲リタル旨ヲ記入ス

ヘシ

第二十二條 世襲財產其効力ヲ失ヒタルトキハ宮内大臣ヨリ地方廳又ハ銀行若クハ會社ニ

命シ之ヲ公告セシムヘシ

世襲財產附屬物ハ華族局ニ於テ之ヲ公告スヘシ

第二十三條 第二十條及ヒ第二十二條ニ關スル公告費用ハ其財產所有者ヨリ之ヲ華族局ニ

納ムヘシ

第二十四條 世襲財產ニ關スル事件ヲ協議スルカ爲メ戶主及ヒ滿二十年以上ノ相續者若ク

ハ後見人ト親屬三名以上トヲ以テ親屬會議ヲ組織シ豫メ宮内大臣ニ届出ヘシ但親屬ナキ

トキハ宮内大臣ノ認可ヲ得テ一族又ハ他ノ華族ヲ以テ親屬會議員ニ充ルコトヲ得

第二十五條 世襲財產ニ關スル願書屆書ハ親屬會議各員ノ連署ヲ要ス

第二十六條 此法施行ノ手續ハ宮内大臣之ヲ定ム

第二十七條 此法ハ明治十九年八月一日ヨリ之ヲ施行ス

氏名ニ係ル沿革要領

明治元年十一月十九日布告ヲ以テ諸藩トモ從來國名等ヲ以テ姓氏ニ換用スル者總テ本姓ヲ稱セシム○同年十二月八

日布告ヲ以テ以來松平ノ稱號ヲ止メ本氏ヲ稱セシム○同月十二日布告ヲ以テ宮堂上諸侯等京坂其他自領ニアラサル所ニ於テ川達出入等申付苗字帶刀ヲ許スヲ禁ス○二年正月九日布告ヲ以テ百姓町人共ニ舊幕府ヨリ許セシ苗字等ヲ廢ス○三年九月十九日布告ヲ以テ自今平民苗字ヲ許ス○同年十一月十九日布告ヲ以テ國名並舊官名ヲ以テ通稱ニ用ユルヲ禁ス○五年五月第百四十九號布告ヲ以テ通稱實名兩様相名乘來ル者自今一名タラシム○同年八月第二十三號布告ヲ以テ華族ヨリ平民ニ至ルマテ自今苗字名屋號等改稱ヲ禁ス○同年九月第二十五號布告ヲ以テ自今僧侶苗字ヲ設ケシム○六年三月第百十八號布告ヲ以テ御歷代御諱並御名ノ文字自今人民一般相名乘ルヲ許ス但熟字ノ儘用ユルヲ禁ス○八年二月第二十二號布告ヲ以テ自今平民必ラス苗字ヲ唱ヘシメ苗字不分明ノ者ハ新ニ設ケシム

**第百三** 通稱名乘兩様用フルヲ禁ス 明治五年五月七日 布告第四十九號

從來通稱名乘兩様相用來候證自今一名タルヘキ事

**二** 國名舊官名ヲ以テ通稱ニ用ルヲ禁ス 明治三年十一月十九日 布告

自今舊官人元諸大夫侍並元中大夫等位階總テ被廢候事  
一 國名並ニ舊官名ヲ以テ通稱ニ相用候儀被停候事

**三** 僧侶苗字ヲ設ク 明治五年九月十四日 布告第百六十五號

自今僧侶苗字相設住職中ノ者ニハ某寺住職某氏名ト可相稱事  
但苗字相設候ハ、管轄廳ヘ可届出事

**三** 御歷代御諱並御名ノ文字人民一般名乘ルヲ許ス 明治六年三月二十八日 布告第百十八號

御歷代御諱并御名ノ文字自今人民一般相名乘候儀不及憚事

但熟字ノ儘相用候儀ハ不相成候事

**四** 平民苗字取設方 明治八年二月十三日 布告第二十二號

平民苗字被差許候旨明治三年九月布告候處自今必苗字相唱可申尤祖先以來苗字不分明ノ向ハ新タニ苗字ヲ設ケ候様可致此旨布告候事

**五** 苗字名屋號共改稱ヲ禁ス 明治五年八月二十四日 布告第百三十五號

華族ヨリ平民ニ至ル迄自今苗字名並屋號共改稱不相成候事

但同苗同名等ニテ無餘義差支有之者ハ管轄廳ヘ改名可願出事  
九年第五號布告ヲ以テ但舊中  
ハノ下ニ  
字ヲ加フ

**第百四** 年齡計算方 明治六年二月五日 布告第三十六號

自今年齡ヲ計算候儀幾年幾月ト可相數事

但舊曆中ノ儀ハ一千支ヲ以テ一年トシ其生年ノ月數ハ本年ノ月數ト通算シ十二ヶ月ヲ以テ一年ト可致事

**二** 丁年ヲ定ム 明治九年四月一日 布告第四十一號

自今滿二十年ヲ以テ丁年ト相定候條此旨布告候事

第三章 養子婚姻 家督相續 合家分家絶家 出踪逃亡

旅行

養子婚姻相續ニ係ル沿革要領

明治元年十二月二日御沙汰跡目相續隱居家督養子縁組等ノ出願方ヲ定ム○三年閏十月十七日隱居養子等ノ出願方ヲ  
華族ニ令ス○同日同上ノ件ヲ士族ニ令ス○同年十一月四日布告ヲ以テ縁組規則ヲ定ム○四年四月二十二日布告ヲ以  
テ前令申送附方ヲ示ス○同年八月二十三日布告ヲ以テ華族ヨリ平民ニ至ル迄互ニ婚姻ヲ許ス○同年九月四日布告ヲ以  
以テ華士族ニ不拘家督相續願申死去ノ節ハ直ニ届出シム○六年一月第二十七號布告ヲ以テ華士族平民互ニ養子取組  
ヲ許ス○同年二月第二十八號布告ヲ以テ華士族相續法ヲ定ム○同年五月第六十二號布告ヲ以テ婦離縁ノ訴訟ヲ許  
ス○同年八月第三十一號布告ヲ以テ本年第二十八號布告中へ合家許可ノ件ヲ追加ス○七年七月第七十三號布告ヲ以  
テ華士族分家スル者ハ平民籍ニ編入セシム○八年十二月第二十九號布告ヲ以テ婚姻養子養女ノ取組若クハ其離縁縁  
等變方月籍ニ登記セサル内ハ無効ト看做ス○九年五月第七十五號布告ヲ以テ自今合家ヲ禁止シ既ニ合家セシ分令後  
ノ取扱方ヲ定ム○同年六月第五十八號達ヲ以テ實子アル者養子ヲ以テ相續人トシ有子ノ寡婦夫ヲ迎テ前夫ノ跡相續  
人ト定ムル等華士族ノ外地方官限リ聽許ヲ許ス○十年八月第六十號達ヲ以テ華族ノ外戸主家名ヲ廢シ他へ縁付復籍  
等地方官ニ於テ處分セシム○同年十二月第九十九號達ヲ以テ九年第五十八號達平民養子相續人等ノ儀士族ト雖モ同  
様取計ヲ許ス○十一年八月第二十號布告ヲ以テ常備兵役ヲ免ヘサル前分家ヲ許サス○十二年二月第八號達ヲ以  
テ士族家督相續養子貫籍ノ儀自今直ニ月長ニ届出シム○同年十二月第四十六號布告ヲ以テ徵兵令ヲ改正シ徵兵ニ關  
スル從前ノ布告達及指令等ハ渾テ廢止トス○十三年一月第三號布告ヲ以テ華士族當主死亡後相續人無之者相續人ヲ  
定ムル期限ヲ六月トシ期限後相續人ヲ届出サルトキハ族稱ヲ廢ス

第百五 華士族家督相續法 明治六年一月二十二日 布告第二十八號

今般華士族家督相續ノ儀ニ付左之通被相定候條此旨相達候事

家督相續ハ必ス總領ノ男子タルヘシ若シ亡没或ハ癡篤疾等不得止ノ事故アレハ其事實ヲ  
詳ニシ次男三男又ハ女子へ養子相續願出ツヘシ次男三男女子無之者ハ血統ノ者ヲ以テ相  
續願出ツヘシ若シ故ナク順序ヲ越テ相續致ス者ハ相當ノ答可申付事 六年第二百六十三號布  
告ヲ以テ全條改正

幼少ニテ家督爲致候節ハ親戚又ハ他人ニテモ相當ノ者相撰後見可爲致事

當主隱居致シ實子又ハ養子家督相續致シ候上其相續人多病或ハ不埒ノ儀有之歟又ハ病死  
致シ最前ノ隱居壯健ニテ再相續願出候節ハ聞届不苦事

但再相續人ト可稱事

當主壯年ナレトモ疾病其外無據事故有之養子致シ候處前當主疾病平愈又ハ事故相解候節  
再家督致シ右養子ハ實家へ立戻リ候歟又ハ當主他へ縁付候共雙方熟談ノ上願出候ハ、聞  
届不苦事

本家分家親戚等ノ内當主病死致シ跡子弟幼年並婦女子等ノ砌死者ノ遺言又ハ其父母並重  
立候親戚及遺妻子熟談ノ上合家願出候ハ、聞届不苦事

父兄伯叔總テ目上ノ者子弟甥等ノ目下ノ家ヲ繼承スルトキハ相續人ト稱シ養子ト稱スヘ  
カラス

當主死去跡嗣子無之婦女子ノミニテ已ナ得サル事情アリ養子難致者ハ婦女子ノ相續差許

九年第七十五  
號布告ヲ以テ  
廢止ス

從前ノ給祿可支給事

婦女子相續ノ後ニ於テ夫ヲ迎ヘ又ハ養子致シ候ハ、直ニ其夫又ハ養子ニ相續可相讓事  
年六  
第二百六十三號  
布告ヲ以テ追加

右之通候條(華族ハ管轄廳ヨリ正院ニ相伺)士族ハ管轄廳ニ於テ開屆可申事

(二)華族ノ輩隱居及養子出願方 明治三年閏十月十七日 布告華族

一華族之輩年五十歳ヨリ隱居願之儀可爲勝手事

但癡疾及事故ニ罹リ候輩ハ此限ニ非ス

一實子無之輩ハ年齡ニ不拘養子願之儀可爲勝手事

右之通更ニ被仰出候條此旨相達候事

(三)士族ノ輩隱居及養子出願方 明治三年閏十月十七日 布告士族

一士族之輩年五十歳ヨリ隱居願之儀可爲勝手事

但癡疾及事故ニ罹リ候輩ハ此限ニ非ス

一實子無之候ハ、年齡ニ不拘養子願之儀可爲勝手事

右之通更ニ被仰出候條此旨相達候事

(三)華族ヨリ平民ニ至ルマテ互ニ婚姻ヲ許ス 明治四年八月二十三日 布告

華族ヨリ平民ニ至ル迄互ニ婚姻被差許候條雙方願ニ不及其時々戶長ニ可届出事

(但送籍方ノ儀ハ戶籍法第八則ヨリ十一則迄ニ照準可致事)

十七年七月七日  
日宮内省達華  
族令(第百一)  
ニ依リ華族ノ  
身分ハ宮内大  
臣ニ於テ處分  
ス

市制町村制ニ  
依リ戶長ノ二  
字戶籍取扱手  
ハ消滅ス

華族令及十二  
年第八號公達  
ニ依リ但書中  
減士族ノ件消

(四)華士族平民互ニ養子取組方及届出方等

明治六年一月二十一日  
第貳拾七號布告

自今華士族平民互ニ養子取組不苦候事

但華族ハ(管轄廳ヨリ正院ニ伺出)士族ハ管轄廳ニテ開屆(平民ハ戶長ニ可届)出事

(五)華士族當主死亡後相續人ヲ定ムル期限

明治十三年一月二十九日  
第三號布告

華士族當主死亡後相續人無之親族協議ノ上家名預リ置追テ相續人ヲ定ムルハ當主死亡後

日數五十日ヲ過クヘカラス若不得已事情有之親族連印管轄廳ニ延期願出ルモノハ更ニ相

當ノ猶豫ヲ與フルト雖モ死亡後六ヶ月ヲ過キ仍ホ相續人ヲ届出サルトキハ其族稱ハ廢絶

候儀ト可相心得此旨布告候事

(六)婦離縁ヲ請フモ夫肯セサル節出訴ヲ許ス

明治六年五月十五日  
布告第百六十二號

夫婦ノ際已ムテ得サルノ事故アリテ其婦離縁ヲ請フト雖モ夫之ヲ肯ンセズ之レカタメ數

年ノ久テ經テ終ニ嫁期ヲ失ヒ人民自由ノ權理ヲ妨害スルモノ不少候自今右様ノ事件於有

之ハ婦ノ父兄弟或ハ親戚ノ内附添直ニ裁判所ニ訴出不苦候事

(七)婚姻養子養女ノ取組若クハ離婚離縁等戶籍ニ登記セサル内ハ其効ナキ者ト看做ス 明治八年

十二月九日  
太政官達第百九號(使)府縣

婚姻又ハ養子養女ノ取組若クハ其離婚離縁綜合相對熟議ノ上タリ尼趣方ノ戶籍ニ登記セサル内ハ其効ナキ者ト看做ス

ヘク候條右等ノ届方等閑ノ所業無之様精々説諭可致置此旨相達候事

(八)子女アル者養子入夫等ヲ以テ相續人ト爲ヌテ許ス

明治九年六月五日  
太政官達第五拾八號(使)府縣

第七類 第三章 養子婚姻 家督相繼 合家分家絶家 出踪逃亡 旅行 二百六十九

十年第九十九  
號ヲ以テ士族

ト雖モ同様取扱不苦旨ヲ達ス

實子アル者養子ヲ以テ相續人トシ子女アルノ寡婦夫ヲ迎ヘテ前夫ノ跡相續人ト定ムル等ハ一般離業許定規ニ候得共華士族ヲ除クノ外現實種貧或ハ老病等ニテ實子孫アリト雖モ幼少ナルカ又ハ有子ノ寡婦タリトモ種貧或ハ其子女幼少且後見スヘキ者モ無之歟ノ場合ニテ親族協議ヲ以テ願出候節不得止事情ニ係ル者ハ地方官限リ聽許不苦此旨相違候事

〔九〕戶主其家ヲ廢シ他へ入夫或ハ養子女トナリ又ハ復籍等出願ノ者取扱方 明治十年八月廿一日 太政官達第六拾號

〔十〕士族家督相續養子貫籍替届出方 明治十二年二月十三日 太政官達第八號(使)府縣

〔十一〕戶籍ニ登記セサル者裁判上處分方 明治十年六月十九日 司法省達第四拾六號大審院上等裁判所地方裁判所

八年第二九號御達ノ儀ニ付有馬判事ヨリ甲號ノ通届出ニ因リ乙號ノ通太政官へ上申候處丙號ノ通御裁令相成候條此段爲心得相違候事

擬律伺 明治八年第二九號公布婚姻又ハ養子女ノ取組若クハ其離業離縁令相對熟談ノ上タリトモ雙方戶籍ニ登記セサル内ハ其効ナキ者ト看做ス可ク云々ト有之候付テハ雙方父母親屬熟談ノ上人ノ妻トナリ男女ノ子アル者ト雖モ戶籍ニ登記無之者ハ犯姦告罪等ノ節無論處女ト看做シ處分致ス儀ニ可有之尤右ノ者夫又ハ夫ノ祖父母父母ヲ謀殺故殺毆傷罵詈等ニ至ル迄總テ凡人ヲ以テ論シ且人ノ養子女トナリテ同居シ實際親子ノ會釋ヲ爲ス者ト雖モ前同斷ノ者ハ皆凡人ヲ以

テ處分致シ可然哉已ニ戶籍法規則確定ノ上ハ婚姻又ハ養子女等其時々送籍等ヲ不爲者ハ無之答ニ候得共邊土僻隅ノ愚民ニ至テハ絶テナシトモ雖確定候ニ付犯者アルニ臨ミ實際ト條理上ト不都合ヲ可生機有之關係不渺聊疑義ヲ生シ候條豫メ御指揮ヲ受置度此旨相伺候也

明治九年四月十八日

司法卿大木喬任殿

在宮城縣

七等判事有馬純行

乙號

太政官へ上申

婚姻又ハ養子女ノ取組若クハ離縁等ノ儀ニ付テハ八年第二九號ヲ以テ使府縣へ達セラレタリ然ルニ該達ハ文意稍明確チ欠キ或ハ宮崎縣例ノ如キ疑團ヲ生スルアリト雖モ篤ト該達ノ文意ヲ熟按スルニ假令ヒ相對熟談ノ上タリ云々ノ文字アリテ既ニ其婚姻ヲ行ヒ夫婦トナリタル者ヲ指稱スルニアラス其主意ヲ約言スレハ婚姻養子ノ取組等ヲ爲スニ當リ雙方ノ熟談ノミニテハ一概ニ之ヲ夫婦父子ト見ル可カラサル旨ヲ示シタルモノナリ(尤モ最初該達施行ノ際ハ此辨明ト其旨意ヲ異ニセシヤモ知ル可カラサレト今日ノ日法律ノ改良修正ヲ要スルニ當テハ成ルヘク舊法ヲ破毀セス之カ辨明ヲ以テ其効ヲ得シムルヲ良トス)然ルニ若シ之ヲ以テ既ニ婚姻ヲ行ヒ親族隣里モ之ヲ認許セシ者ニ適用シテ凡人ヲ以テ處分スルハ實ニ人類社會ノ根本タル一家親族ノ大倫ヲ亂スヘキ法律ト云ハサルヲ得ス



丙號

太政官ヨリ御指令

伺之趣八年第二百九號ノ諭達後其登記ヲ忘リシ者アリト雖モ既ニ親族近隣ノ者モ夫婦若シクハ養父子ト認メ裁判官ニ於テモ其實アリト認ムル者ハ夫婦若シクハ養父子ヲ以テ論ス可キ儀ト相心得ヘシ

〔十二〕離縁争訟ニ付處分方

明治十年七月十三日 司法省達丁第五十號大審院上等裁判所地方裁判所

離縁争訟ノ儀ニ付甲號ノ通名古屋裁判所ヨリ伺出ニ因リ乙號ノ通太政官へ上申御裁令ノ上丙號ノ通及指令候條此段爲心得相違候事

甲號 士族養子主離縁ノ儀ニ付伺十年五月十八日

名古屋裁判所

當主實子ナク親族或ハ他ヨリ養子致シ既ニ戸主ト成リタル後身持放蕩養父母等ノ侍養ナク又ハ卑族ノ扶助ヲナサシムル等ヨリ一家不和生シ送ニ辱罵及ヒ親戚運器シテ戸主ノ離縁ヲ願フ者往々有之然ニ其故障ナク養實熱職ノ調タルハ府縣限リ離縁開届行政ト裁判トノ權ハ熟ト不熟トニヨリ別チ來リタル處明治八年四月申別紙佐賀縣伺へ來書ノ如ク内務省指令アリシヨリ假令戸主及ヒ實家ニ於テ云々故障アリ未タ承諾ナサスト雖モ養母又ハ養祖父母養家ノ親戚運器シ縣廳ニ願出ル時ハ直ニ行政官ニ於テ離縁申付ルニ至レリ之處分スル者ナリ 抑モ如此ニシテ養實熱職相整以テ離縁ヲ要スル者固ヨリ行政ノ權内ナリト雖モ其戸主及ヒ實家之ナ背セサル等ハ則チ裁判權内ニシテ行政官ノ處斷スヘキニ非ラズ然ニ今裁兩局ニ互レリ權限歸着スル所以來如何相心得可然裁別紙相添此段相伺候也

別紙略之

乙號 名古屋裁判所伺養子ノ戸主離縁ノ儀ニ付太政官へ上申十年五月六日

告達若クハ裁令ニ限リ事情ヲ開示離縁ヲ願許スルハ現今ノ體裁姑ク地方官ノ職任トスルモ甲之ヲ要求シ乙之ヲ背セ

ス雙方相争ノ處分ニ至テハ之ヲ裁判所へ訴へ裁判官ノ裁判ニ任ス可キト當然ノコトナラン

別紙名古屋裁判所伺援引スル所ノ内務省指令ニ據ル時ハ養子ノ戸主縱令之ヲ承諾セサルモ放蕩一家ノ沈没ニ管スルノ事實アリテ養母親族運器シテ願出ツルニ於テハ事情開示ノ上離縁ヲ開届クルコト地方官ノ權内ニ委スルモノト如シ然ル時ハ離縁ノ際雙方熱職整ハス如何ナル紛争ヲ生スルモ地方官之レヲ裁判處分スヘキ歟是レ決シテ其理ナキナリ抑モ離縁ノ争モ即チ人民私權上ノ争ニシテ他ノ普通ノ争訟ト異ナル所ナシ然ルチ之ノミ地方官ノ權任トスル時ハ裁判所ノ權限ニ概制如何ニモ不都合ナラン現今既ニ各地方裁判所ヲ設ケラレタル上ハ右等ノ裁判ハ勿論裁判所ノ權任ナリト思考セリ因テ左之通指令可及ト存シ候得共一應爲念仰高裁候條至急御裁可相成度候也

司法卿大木喬任代理

明治十年五月六日

二等判事玉乃世履

右大臣岩倉具親殿

丙號 指令

伺ノ趣養實熱職整ハサル争訟ヲ裁制スルハ固ヨリ裁判所ノ權ナリト心得可シ

〔十二〕後見人職務權限

明治十六年七月十八日 内務省番外達府縣

後見人職務權限ノ儀ニ付別紙ノ通太政官へ相伺御指令相成候條爲心得此旨相違候事

後見人職務權限ノ儀ニ付伺

後見人規則發布ノ義ハ目下急務ヲ要スル事項ニ付客年四月十三日上申シタル旨趣モ有之就テハ伺出ノ府縣へ追テ一般ノ法律制定相成マテ地方從來ノ慣習ニ依リ可取扱旨指令及ヒ來候處爾後後見職務ノ權限伺出ル府縣夥多有之抑後見人ハ當初親族ニ於テ撰任シタルモノナレモ常ニ監察スヘキ方法モ無之ニ付規則御制定マテ不動產買賣讓渡實書入等ニ限リ其證書又ハ願書ニ親族連署ノ上ナラテハ戸長ニ於テ公證ヲ與ヘサル様相定メ其旨指令及ヒ度右ハ未タ成規モ無之此段相伺候也

十九年司法省  
訓令第三百九  
號(第二百九  
十九)ノ十一  
項ニ依リ登  
記法施行ニ於  
テ本令ヲ適用  
セシム

第七類 第二章

養子婚姻 家督相繼 合家分家絶家 出跡逃亡 旅行

内務卿山田顯義

明治十六年五月三十日  
太政大臣三條實美殿

伺之趣聞届候事

明治十六年七月三日

伺指令

●養子養女戸籍ニ登記セサル前犯罪處分ノ請訓  
明治十六年十月十八日  
水戸輕罪裁判所檢事請訓

婚姻又ハ養子養女ノ取組整ヒタル上ハ明治八年第二百九號御布告ニ基キ速ニ戸籍ニ登記スヘキハ勿論ナレ邊土僻隅ノ愚民ニ至テハ其ノ手續ヲ盡サトル者往々有之然ル内其妻ト稱スル者姦罪ヲ犯シ或ハ養子女ナル者祖父母父母ト稱スル者ヲ毆打ナシタル等ノ節ハ何レモ戸籍上登記ナキヲ以テ姦罪ハ夫ト稱スル者ヨリ告訴スルモ處女ト見做シ不問ニ措キ毆打罪等ハ凡人ヲ以テ論スル義ニ可有之哉將タ假令戸籍ニ登記セサルモ親族近隣ノ者モ夫婦若クハ養父子ト認メルニ於テハ明治十年本省丁第四十六號御達ニ基キ處分可然哉

司法省内訓 明治十六年十月二十六日

養子女戸籍登記以前犯罪處分ノ請訓ノ趣右ハ後段見解ノ通此旨及内訓候也

●養子戸主携子離縁ノ伺指令  
明治十六年十二月二十日  
茨城縣伺

養子離縁ノ際嫡子連飯候儀ハ養實兩家ノ協議ニ任セ不苦モ養子戸主タル上ハ不相成儀ニ可有之而シテ嫡子トハ嫡長男又ハ庶長男ニ限リ候儀ニテ女子ハ假令獨子ト雖モ養實協議ノ上引連離縁致シ不苦哉云々明治十三年三月二日本縣伺ニ同月廿三日付ヲ以テ書面之趣嫡男ノ例ニ準シ取扱候儀ト可心得尤一男女子トモ不得止事情有之願出候節ハ聞届不苦事ト御指令有之然ルニ年月日不詳(明治十四年官令新編第二號)第一條茲ニ甲家乙家ヨリ養子致居候處該養子一男ヲ舉ケル后故アリテ離縁セントスルニ方リ甲家ニテ舉ケレ一男ヲ乙家ヘ携帶候儀ハ双方協議ニ任セ不

苦哉福岡縣伺ニ第一條離縁ノ養子戸主ニアラサルモ伺之通ト御指令有之由是觀之ハ離縁ノ養子戸主タル上ハ不相成儀ニ有之モ不得止事情有之ハ聞届不苦儀ニ候哉此段相伺候也

内務省指令 明治十七年三月二十五日

伺之通

●軍人結婚ノ伺指令  
明治十七年三月十九日  
東京府伺

陸軍々人結婚之儀ハ該條例ニ據リ許可ヲ不得ハ舉行難相成答ノ處茲ニ尋常結婚ノ例ニ依リ妻ノ送籍ヲナスモノアリ各區役所戸長役場ニ於テハ其配偶者ノ軍人タルト否トナ知ルニ由ナク既ニ送籍ヲナシ後チ軍人タルヲ以テ該條例ニ依リ身元證書ヲ請フ者有之然ルニ軍人ハ將官及同等官ニ在テハ勅許ヲ仰キ准士官以上ニ在テハ陸軍卿ノ許可ヲ請ケ下士以下ニ在テハ所管長官ノ許可ヲ請ケサレハ結婚不相成儀ニ付當初軍人タルヲ告ケヌ夫妻ノ送入籍ヲ申出タルハ素ヨリ順序ニ違フタルモノニ付其結婚送入籍ハ無効ノモノトシ更ニ允許ヲ乞ハシメ可然哉

陸軍省指令 明治十七年四月十日

伺之趣陸軍々人タル者武官結婚條例ニ依ラスシテ結婚スヘキ筋無之萬一有之ニ於テハ其結婚無効ニ屬スルハ勿論之儀ト可相心得候事

但本文ノ如キ者有之候ヘハ官姓名取調可申出候事

●幼戸主年長ノ者ヲ養子ト爲スノ伺指令  
明治十七年三月八日  
山梨縣伺

爰ニ三歳未満ノ幼戸主家事擔保難相成事故等ヲ以テ壯年ノ者ヲ養子ニ實受家督讓與致度旨申出ツル者アリ然ニ年長ノ者ヲ養子シテ之ヲ子ト呼ビ又年少ノ者ヲ指シテ父ト稱スルカ如キハ實際上甚不穩當ノ儀被存候得共何等據ルヘキノ法規モ無之取扱上差支候ニ付相伺候也

内務省指令 明治十七年五月八日

伺之趣離聞届候下心得ヘシ

但幼戸主疾病其他不得已事情ニ依リ他人ヲ以テ相續セシメサルハ一家ノ浮沈ニ關スル等ノ類ハ親族ノ熟議ヲ以テ先代ノ養子トナシ相當ノ者ヲ貰受幼戸主ノ相續人トシテ家名ヲ繼承セシムル義ハ苦シカラス

●年長ノ者ヲ相續人ト爲ス件伺指令 明治十九年十一月二日 山形縣伺

茲ニ單身戸主(丁年以上ノモノ)ニシテ資質柔弱又ハ病身等ニテ家事難管貧困ニ迫ル事情ヲ以テ強壯ノ年長者ヲ相續人ニ貰請共ニ家事ヲ維持致シ度趣ヲ以テ親族協議出願ノ者有之右ハ自然不倫ノ弊習ヲ生セシムル儀ニ可立至存セラレ候ニ付聽許スヘカラサル儀ト相心得可然哉又ハ親族協議出願ノ時ハ其事實篤ト取調相違無之ニ於テハ聽許可然哉

内務省指令 明治十九年一月二十四日  
伺ノ趣ハ前段見解ノ通

●姉ノ養女トナリシモノ稱呼ノ伺指令 明治十九年十二月三日 德島縣伺

妻ノ實家ノ妹ヲ養女トナスハ聞届不苦儀ト相考候處其姉ニ對シテハ養母ト稱スヘキヤ將タ姉妹ノ稱呼ヲ存スヘキ儀ニ候哉

司法省指令 明治十九年十二月十五日  
伺ノ趣ハ前段見解ノ通

●離縁ノ養女ヲ妻ニ迎フル件ニ付上申指令 明治十九年十二月二十八日 東京府上申

離縁養女ヲ妻ニ娶ル義ニ付明治十一年七月五日大阪府伺内務省指令ノ趣モ有之候處右伺面ハ母子ヲ前後ニ娶ル儀ナルヲ以テ離縁届旨指令相成候事ト存候然ルニ單ニ養女ヲ貰ヒ置キ夫レチ離縁復籍セシメ更ニ妻ニ貰ヒ受ケントスルモノアリ右ハ大阪府伺面ノ事實トモ相異リ乃チ婿養子其婦(女)ヲ離縁シ同居ノ儘更ニ其妹ヲ他ノ養女トナシタル上妻ニスルト較相均キモノニテ先キニ養父ト呼ビ養兄ト呼フノ差ハアルナレ同シク血縁ノ無キモノニ有之候間右等ノ分ハ妻ニ貰受候テモ差支無之様モニ被存候然レニ且養父子ト呼ビシモノナルニ依リ倫理上不都合

ニ付縁組差留メ可申哉

司法省指令 明治二十年一月十四日  
後段伺之通

●婿ノ妹ト配偶ノ件ニ付伺指令 明治十九年十二月二十八日 埼玉縣伺

甲ノ長女ヲ乙ノ妻ニ嫁シ乙ノ妹ヲ甲ノ妻ニ迎ヘントス右ハ自然配偶者ノ妹ヲ繼母ト稱セサルヲ得サルモノニテ穩當ナラサル儀ニ付聽許スベカラサル儀ト相心得可然哉

司法省指令 明治二十年一月十四日  
伺之通

●戸主ノ父其妻ヲ離婚其家ニ差置件ニ付伺指令 明治二十年一月十一日 山形縣伺

戸主ノ父(實)隱居己レノ妻(他ヨリ入嫁)ヲ離婚シ依然同家族ニ据置キ其身ハ他ヘ入籍(養子入夫又ハ分家復籍等)ノ儀實際不得止事情アルモノハ聽許不苦儀ニ候哉果シテ苦シカラストセハ離婚ノ妻戸主ノ養母又ハ繼母ナル時ハ戸主ヨリノ續柄如何相心得可然哉

司法省指令 明治二十年二月四日  
伺ノ趣左ノ通心得可シ

前段 隱居者己ノ妻(他ヨリ入嫁)ヲ離婚シ其身他ニ入籍ノ儀不得止事情アルモノハ聽許苦シカラス但離婚シタル妻ヲ其儘戸主ノ家族ニ据置(同居又ハ附籍)候儀ハ相成ラヌ  
後段 戸主ニ於テ養母又ハ繼母ノ續柄ナキモノトス

●養子ノ妹ト結婚ノ伺指令 明治二十年二月十日 福岡縣伺

他家ニ入嫁セシ妹ノ配偶者ノ養子ト相成候儀ハ不相成不得己ハ先代ノ養子トシ配偶者ノ相續人トナスハ不苦旨曾テ内務省御指令ノ次第モ有之候處茲ニ甲者乙ノ次男ヲ貰受ケ養子トナシ而シテ又乙ノ三女(養子ノ實)ヲ一且丙

家ノ養女トナシ然ル上更ニ甲ノ妻トナスハ苦シカラサル哉亦ハ如何ナル事情アルモ離間届儀ト心得可然哉

但結婚不苦モノトセハ妻ト養子ノ縦柄如何心得可然哉

司法省指令 明治二十年二月二十八日

何之趣離間届儀ト心得可シ

●相續權ノ伺指令 明治二十年二月十四日 新潟縣伺

男子ナキ戸主養子(嗣子ト定メス)セシ後長男出生スルトキハ家督相繼ノ權其長男ニアルカ將タ養子ニアルカニ付テハ其實子ヲ以テ繼嗣トスルモ養子ヲ總領トスルモ親族ノ熟議ニ任セ不苦ト存候處明治十七年九月京都府ヨリ徵兵令第二十二條第二項ノ儀ニ付陸軍省へ養子(嗣子ト定メス)離縁シ更ニ他家ノ子弟ヲ貰受ケ嗣子トナスモノアリ右ハ養父六十歳以上ナレハ徵集猶豫ニ可爾乎將タ男子ナキモノ、養子ハ自ラ相續權ヲ有スル儀ニシテ假令以前ノ養子ハ嗣子ニ取極メサル旨申立ツルモ後ノ養嗣子ハ本項ニ據リ取扱フヘキ哉トノ伺ニ後段伺ノ通ト指令アリ果シテ陸軍省指令ノ如クナルトキハ前ノ養子ハ自ラ相續權ヲ有シ嗣子ノ位置ニ在リテ後ノ養子ハ更定嗣子ナレハ若シ養子後ノ實子(養子トハ異ナレトモ)ヲ繼嗣トナサントスルトキハ其養子ヲ廢嫡スルノ手續ヲ爲サ、ルヲ得ス

司法省指令 明治二十年三月二日

何之趣男子ナキ戸主ノ養子ハ嗣子ニ定メサルモ別段ノ契約アルニ非サレハ自ラ嗣子ノ地位ニ在ルモノナルヲ以テ後ニ實子出生スルモ直ニ實子ヲ以テ嗣子ト爲スヲ得サル儀ト心得可シ

●後見人權限ノ伺指令 明治十九年十二月七日 富山縣伺

幼戸主ノ後見人ハ親族協議ノ上選任スヘキ處其親族ナキカ或ハ之アルモ未丁年者ナルハ其町村戸長ヲシテ適宜後見人ヲ選定セシメ候テ可然哉果シテ然ラハ幼戸主所有ノ不動産賣買讓渡借入等ノ場合モ後見人ノ署名セシ證書ニ對シ戸長ニ於テ公證付與爲致可然乎

第百六 外國人民ト婚姻ヲ許ス

明治六年三月十四日 布告第百三號

自今外國人民ト婚姻差許左之通條規相定候條此旨可相心得事

一 日本人外國人ト婚嫁セントスル者ハ日本政府ノ允許ヲ受クヘシ

一 外國人ニ嫁シタル日本ノ女ハ日本人タルノ分限ヲ失フヘシ 若故有ツテ再ヒ日本人タルノ分限ニ復センヲ願フ者ハ免許ヲ得能フ可シ

一 日本人ニ嫁シタル外國ノ女ハ日本ノ國法ニ從ヒ日本人タルノ分限ヲ得ヘシ

一 外國人ニ嫁スル日本ノ女ハ其身ニ屬シタル者ト雖モ日本ノ不動産ヲ所有スルヲ許サス 但日本ノ國法並ニ日本政府ニテ定タル規則ニ違背スルコトナクハ金銀動産ヲ持携スル妨ケナシトス

一 日本ノ女外國人ヲ婿養子ト爲ス者モ亦日本政府ノ免許ヲ受クヘシ

一 外國人日本人ノ婿養子トナリタル者ハ日本國法ニ從ヒ日本人タルノ分限ヲ得ヘシ

一 外國ニ於テ日本人外國人ト婚嫁セントスル者ハ其國或ハ其近國ニ在留ノ日本公使又ハ領事官ニ願出許可ヲ乞フヘシ 公使及ヒ領事官ハ裁下ノ上本國政府へ届出ヘシ

第百七 私生ノ子 明治六年一月十八日 布告第二十一號

妻妾ニ非サル婦女コシテ分娩スル兒子ハ一切私生ヲ以テ論シ其婦女ノ引受タルヘキ事 但男子ヨリ已レノ子ト見留メ候上ハ婦女住所ノ戸長ニ請テ免許ヲ得候者ハ其子其男子ヲ父トスルヲ可得事

伺指令

第七類 第三章

養子婚姻

家督相繼

合家分家絶家

出踪逃亡

旅行

●私生兒送籍ノ伺指令 明治十九年十一月二十六日 山梨縣伺

適子女ナリ私生ノ子女ノミナ有スル女戸主夫ヲ迎ヘ其夫ヘ家名ヲ譲リタル後ト雖モ嫡子ヲ擧ケサル間ハ妻ノ私生兒繼承權ヲ有スヘクニ付他ヘ送籍候儀ハ不相成候哉

内務司法兩省指令 明治十九年二月十七日

伺ノ趣私生ノ子ハ當然繼承ノ權ヲ有スルモノニアラサルヲ以テ其父母嫡子ヲ擧ケサル間ト雖モ他ヘ送籍スルヲ得ル儀ト心得可シ

●私生ノ子婦女ノ公生男子ニ引直方ノ伺指令 明治二十年一月十三日 京都府伺

私生子ヲ男子巳ノ子ト認メ婦女住所ノ戸長ノ允可ヲ得タルモハ庶子トシ男子ノ籍ヘ編入スヘキノ處婦女ノ籍ニ存在ノ儘其父ノ氏名等ヲ明記シ婦女ノ公生男女ニ引直度旨雙方連署申出ルモノ有之右ハ惣ニ任セ不苦哉

司法省指令 明治二十年一月二十三日

伺ノ趣男子ノ認メヲ受ケタル私生子ハ其父母タル男女結婚セサルトキハ庶子ト稱スヘキノナルヲ以テ婦女ニ於テ公生ノ子ニ引直スヲ得サル儀ト心得ヘシ

第百八上 合家ヲ禁シ從前合家セシ分取扱方 明治九年五月二十日 布告第七十五號

明治六年ノ第廿八號第五項及ヒ同年ノ第三百一號ヲ以テ合家ノ儀布告候處詮議ノ次第有之自今被禁止候條此旨布告候事

但從前既ニ合家セシ分ハ今後左之通可取扱事

一分家セント欲スルモノハ其合家セシ本人ノ一代中ニ限り復舊スルヲ許ス其子孫ニ至テ

ハ七年第七十三號布告分家ノ例ニ據ルヘシ

一 戸籍記載方及ヒ刑律上ノ關涉ニ於テハ戸主ノ血屬ハ等親ニ依リ其血屬ナキハ等親外ノ親屬ナルヘシ

一 士族平民合家セシモノハ總テ士族ニ編入スヘシ

〔二〕華士族分家ノ者平民籍ニ編入方 明治七年七月十日 布告第七十三號

自今華士族分家ノ者ハ平民籍ニ編入候條此旨布告候事

但分祿ノ儀ハ不相成其宗家祿高ノ中適宜給與候儀ハ勝手タルヘキ事

第百八下 單身戸主死亡又ハ除籍ノ後絶家トスルノ期限 明治十七年六月十日 布告第二十二號

單身戸主死亡又ハ除籍ノ日ヨリ滿六箇月以内ニ跡相續者ヲ届出サル者ハ總テ絶家トス

右奉 勅旨布告候事

〔一〕從前死亡又ハ除籍シタル者跡相續届出期限 明治十七年六月十日 太政官布告第十四號

今般第二十號布告ヲ以テ絶家期限制定候ニ付テハ從前死亡又ハ除籍シタル者ハ該布告施行ノ日ヨリ滿六ヶ月以内ニ跡相續者ヲ届出ルコトヲ得 右布告候事

### ● 脱籍無籍ニ係ル沿革要領

明治元年三月定三札ヲ以テ脱走ヲ禁ス○同年八月全國ニ布告シテ藩籍ヲ脱シ四方ニ周流シテ義ヲ唱ヘタル者ヲ復籍セシム○同年十月四日更前令ヲ布告ス○二年二月三日脱籍シテ未タ本籍ニ歸ラサル者復籍ヲ布告ス○三年正月九日布告脱籍流浪ノ輩大逆無道ノ外ハ惡惡ヲ糺サス復籍セシムルノ御趣意ニ違ヒ苛察ノ所業ナカラシム○同年九月四日脱籍無産ノ輩復籍方ノ規則ヲ定ム○同年閏十月二十三日布告ヲ以テ府藩縣送リノ復籍人賄料ヲ定ム○四年十月十四日布告廻國六十六部ヲ禁シ脱籍ノ者ハ復籍法ニ照ラシテ本貫ニ歸ラシム○同年十二月二十六日達ス本貫ニ於テ生業ノ目的ナキ脱籍人ハ府縣送リヲ止メ其地ノ徒場ニ入レテ生業ヲ營マシメ追テ生計ヲ立ルノ見込アル者ハ本人望ノ地ニ入籍セシム○六年四月第六十一號達ヲ以テ四年四月達脱籍人復籍規則第一條ヲ改ム○同年五月第七十三號布告ヲ以テ從前脱籍ノ輩ニシテ復籍セサルモノハ自今律ニ照シテ處分ス○同年五月第七十七號布告ヲ以テ脱籍及行衛知レサル者戶籍登記方及除籍ノ年齡ヲ定ム○七年六月內務省第十四號布達ヲ以テ復籍宿村送ノ方法ヲ定ム○十年十一月第九十五號達脱籍無産ノ輩本籍迄遞送ヲ廢シ復籍寄留等ハ本人ノ望ニ任セ取計ヒ目下生活ノ道ナキ者ハ授産場又ハ懲役場ニ入レ囚人ト別居シテ使役セシム○十一年十一月第四十號ヲ以テ復籍規則第七條ニ照シ逃亡失踪者六ヶ月毎及永尋等ノ處分方ヲ廢シ本人逃亡失踪ノ始末及復籍ノ節届出ハ從前ノ通トス○十五年九月第五十號布告ヲ以テ已二十四日二十三日布告脱籍無産ノ輩復籍遞送規則○同年十二月二十六日脱籍無産ノ徒復籍方布告并十年九十五號達十一年第四十七號達第五十五號達ヲ廢ス

### 第百九

### 脱籍及行衛知レサル者除籍ノ年齡

明治六年五月二十八日  
太政官達第七十七號(開拓

使)府

脱籍及行衛知レサル者家出後三十六ヶ月ヲ除ヘ永尋中ノモノハ戶籍表總計人員ノ外ニ記

犯罪人携帶ノ  
幼兒處分方ノ  
何指令ハ第九  
十五ノ末項ニ  
附載ス

載シ又當人年齡八十歳以上ニ相成候得ハ除籍シ何レモ毎人大藏省へ可届出事

(一) 無籍在監人就籍方 明治十五年六月二十九日  
內務省達第三十九號警視廳府縣集治監

無籍在監人ハ在監中定籍ノ手續ヲ爲サシムルニ及ハス本人放還ノ時籍ヲ望ノ地ニ定メシメ典獄ヨリ就籍地區戶長へ通知書ヲ作り本人ヲシテ携帶就籍ノ手續ヲ行ハシムヘシ此旨相達候事

(但典獄ハ前年中監獄内無籍人ノ出入出生死亡ノ員數并ニ其年一月一日ノ現員ヲ毎年一月限リ在監地區戶長へ通知スヘシ區戶長ハ之ヲ受ケ該地ノ人口ニ算入スヘシ)

(二) 無籍在監人就籍方達但書ヲ删除ス 明治十九年五月十五日  
內務省令第八號廳府縣集治監

明治十五年六月六號達但書ヲ删除シ同十六年五月同乙第二十七號達(衛生統計表)ヲ廢止ス

(三) 失踪逃亡跡遺留財產處分方 明治十一年一月二十六日  
司法省達丁第四十一號大審院諸裁判所

失踪死亡跡遺留財產處分ノ儀ニ付太政官裁令ノ趣在ノ通內務省ヨリ通知有之候條爲心得相達候事

內務省ヨリ通知 明治十一年一月十八日

失踪並ニ死亡跡遺財產處分ノ儀ニ付別紙寫ノ通太政官へ伺候處即チ朱書ノ通御指令相成候仍テ爲御心得此段及御通知候也

(別紙)

內務省ヨリ太政官へ伺 明治十一年五月十日

失踪並死亡跡遺財產處分ノ儀ニ付テハ追々御指令ノ次第有之即今當省ニ於テ右御指揮ニ準據シ各府縣へ及指令候得共猶ホ穩當ナラサル限有之更ニ左ノ通更定致度相伺候

一 失踪逃亡者ノ遺財ハ家族ニテ保管シ家族ナキハ親族親族ナキハ區戶長役場ニテ保管セシメ負債アルモノハ其債却處分ヲ取計ハスル例ニ有之 岡山縣何租稅未納ノ者脱走處分ノ件へ候處右負債處分ノ儀ハ種々差問ノ限有之候ニ

### 第七類 第二章

養子婚姻 家督相繼 合家分家絶家 失踪逃亡 旅行

付以來ハ保管財産申書入質トナリタル分ハ其約定期限ニ至リ償却ノ處分地方官ニテ開屆書入質ニアラサル負債ノ處  
ハ一切裁判處決ヲ經テ償却候様致度

一前條ノ遺財負債ナキカ又ハ負債償却シテ猶ホ餘財アル分ハ三十六ヶ月ヲ過キテ復歸セサル時ハ官没スル例ニ有之候  
處 筑摩縣何村民退轉所有地ノ件ハ八年五月二日御指令並發前縣何 右三十六ヶ月ノ期限ハ裁判上失踪者負債處分ノ期  
限ニテ官没ノ期限モ之ニ準スルハ種常ナラス依テ該財産ハ可成丈永久ニ保護スルノ趣旨ヲ以テ自今十年ヲ期滿トシ  
官没ノ處分ニ及ヒ候様致度

一死亡跡相續人無之遺財ハ三十六ヶ月ヲ待タス直ニ官没シ負債アル時ハ償却スル例ニ有之 第二條對註同御指  
償却處分區別ノ義ハ第一條ノ通取計ハセ候様致度

右ハ各府縣ヨリ續々何出候事件モ有之義ニ付至急御裁令被下度候也  
朱書御指令 明治十一年  
十一月四日

何ノ趣ハ左ノ通可相心得事

第一項 區戶長ニ保管スル財産中負債償却處分ノ義ハ其書入質公證ノ有無ニ拘ハラヌ部テ裁判上ノ處分ニ任シ區戶  
長ハ之ヲ保存スルニ止ルヘシ

第二項 追テ法律制定迄ハ官没ノ處分ヲ爲サス本人歸來セバ其遺財ヲ返付スヘシ

第三項 負債償却處分ノ義ハ第一項指令ノ通

**〔四〕 戶長ニ於テ保管スル失踪逃亡及絶家ノ財産ハ目錄ヲ作リ郡區長ニ差出サシム** 明治十七年  
一月十日

内務省達  
番外府縣

失踪逃亡死亡及絶家ノ財産ヲ戶長ニ於テ保管スルルハ財産目錄ヲ作り郡區長ニ差出候様可致此旨相達候事

**〔五〕 廢戶主並財産管理方** 明治十五年八月二十二日

廢戶主并財産管理ノ儀ニ付左ノ通り太政官ヨリ御達相成候條此旨爲心得相達候事  
司法省達丁第四十四號大審院裁判所

司 法 省

廢戶主并財産管理ノ儀ニ付別紙ノ通内務省ヨリ何出朱書ノ通及指令候條其旨爲心得諸裁判所へ可相達事

明治十五年八月十四日

太政大臣三條實美

(別紙)

廢戶主并ニ財産管理ノ義ニ付何

別紙品根縣何ノ趣審案候處第一條受刑者廢戶主ノ義ハ去ル明治十年中法制部ニ質問ノ上一年以上ノ懲役ニ處セラレ一  
家營生難相立場合ニ於テハ戶主ヲ廢スルヲ許可致來候處今般新刑法御實施ニ付爾後ハ舊例ニ準據シ輕重禁錮一年以上  
ノ處刑ヲ受ケ一家生計難相立者ニ限リ父母若クハ親屬協議ノ上廢戶主出願スレハ聞届不苦候哉又其第三條禁治産ノ處  
分ヲ受ケル者ノ財産管理ハ疊日上申致置候通リ後見人規則御設定相成候上同規則ニ據リ可取扱心得ニ有之候得共其第  
四條管理ノ職ニ任スヘキ家族親戚ナキ者ハ戶長ヲシテ財産保管セシメ其負債償却等ハ總テ裁判處分ニ歸セシメ候テ可  
然候哉同縣何書之相添此段相候候也

明治十五年五月十九日

内務卿山田顯義

太政大臣三條實美殿

朱書

何ノ趣左ノ通可相心得事

明治十五年八月十四日

第一條 廢戶主ノ儀ハ何ノ通

第三條 財産管理人ノ儀ハ受刑者ヲシテ家族又ハ親戚ノ内ニ就テ之ヲ撰定セシメ其姓名ヲ管轄裁判所ニ届出テ置キ

他日賣買貸借等ノアルルキハ都テ該所ノ處分ヲ仰カシムヘシ

第四條 戶長管理ノ儀ハ何ノ通

第七類 第三章

養子婚姻 家相相繼 合家分家絶家 失踪逃亡 旅行

〔六〕失踪死亡跡遺留財產賣却交換質入書入等ノトキ始審裁判所ノ認許ヲ受シム 明治二十一年七月十四日  
司法省訓令第  
十號裁判所

失踪又ハ死亡跡遺留財產ヲ其親族ニ於テ保管スル場合本人又ハ其家ノ利害ニ關シ協議ヲ以テ賣却交換若クハ質入書入等ヲ爲サントスルトキ不動產ニ付テハ自今都テ管轄始審裁判所ノ認許ヲ受ク可キ儀ト心得可シ

〔七〕失踪死亡跡遺留財產賣却交換質入書入ニ關スル認許請求書差出方 明治二十一年十月三十日  
司法省訓令第十五號裁判所

親族ノ保管ニ係ル失踪又ハ死亡跡遺留財產ノ賣却交換若クハ質入書入ニ關スル認許請求書ハ保管人又ハ其代人出頭ノ上差出ス可キ儀ト心得可シ

〔八〕失踪逃亡死亡者ノ遺留財產處分方治安裁判所ノ認許ヲ乞フヲ得 明治二十一年十二月七日  
司法省訓令第十七號始審裁判所  
所治安  
裁判所

親族又ハ區月長ニ於テ保管スル失踪逃亡並死亡者ノ遺留財產處分ノ件ハ自ラ始審裁判所所在地ヲ除クノ外管轄治安裁判所ニ認許ヲ乞フコトヲ得治安裁判所上席判事ハ始審裁判所長ノ代理心得ヲ以テ認許ヲ與フ可シ

●伺指令

●單身戶主死亡跡財產處分ノ請訓 明治二十年九月十日  
長崎縣請訓

單身戶主死亡跡相續者無之者ノ財產成規ニ據リ五箇年間區月長ニ於テ保管中左ノ場合ニ於テ處理上疑問ナ生シ候ニ付此段請訓候也

第一條 遺留財產ノ内土地ハ税金不納ノ爲成規ニヨリ公賣ニ付シ所有權已ニ落札人ニ歸シタルヲ以テ地主ヨリ土地引渡ヲ請求スルトモ該地ニアル建物ハ第一第二債主アリテ今猶保管中ナレハ之レカ處分ヲ了ルノ後ニ非レハ

右ニ當ル敷地落札人へ引渡スヘカサル儀ト心得可然哉

第二條 第一債主ハ月主ト生前契約アル趣ヲ以テ依然遺留家屋ニ住居セリ然ルニ未タ所有權ノ第一債主ニ移リタルニ非ス郡區役所ニ於テ保管スヘキ管ナルヲ以テ右等居住者ハ無論保管者ヨリ退去ヲ命スヘキモノト心得可然哉

第三條 返金契約期限ヲ經過スルモ債主ヨリ裁判處分ヲ仰カサルカ爲成規ノ期限間之ヲ保管スルトキハ益負債額相當且ツ第一條ノ如キ地主ノ權利ヲ妨クルノ不都合ナ生ス右ノ場合ニ於テハ保管者ヨリ債主ヲ促シ告訴セシムヘキ儀ニ候哉

內務省指令 明治二十年十一月十六日(司法省連帶)

第一條 建物ノ保管中ニ拘ハラス公賣ニ付セラレタル敷地ハ落札人へ引渡スヘキモノトス

第二條 屋ノ所有者生存中負債ノ爲メニ債主ニ家屋ヲ貸與シ債主ニ於テ所有者生存中ヨリ引續キ現ニ住居シタルモノナレハ直ニ退去ヲ命スルヲ得サルモノトス但賃借者ノ利益ノ爲メ所有貸借ノ解約ヲ爲スハ格別ナリ

第三條 債主ヲ促シ告訴セシムヘキモノニアラス但該財產成規ノ期限內保管ノ上ハ官沒ノ處分ヲ爲スヘキモノナルヲ以テ負債償却方ニ付保管者ニ於テ意見アルトキハ裁判所ノ處分ヲ仰カシムヘシ

●海外旅行沿革要領

明治二年四月布告ヲ以テ締盟諸國ニ行ントスル者ハ外國官外國掛役所ニ印章渡方ヲ出願セシム○同月外國官布告ヲ以テ海外旅行ノ者在留中心得其他ノ規則ヲ定ム○三年正月十九日布告ヲ以テ外國航海出願規則ヲ定ム○七年八月第八十八號布告ヲ以テ航海公證規則ヲ定ム○九年十月第百廿八號布告ヲ以テ朝鮮國へ渡航セント欲スル者ハ海外行免狀又ハ航海公證ヲ受クシム○十一年五月第九號布告ヲ以テ二年四月三年正月布告海外行印鑑免狀渡方及九年第百二



十八號布告海外行免狀ノ廢止シ自今外務省本年第一號布達海外旅券規則ニ照準セシム○十二年五月第十九號布告ヲ以テ七年第八十八號布告航海公證規則ヲ廢ス

第一百十 海外旅券規則 明治十一年二月二十日 外務省布達第一號

從來當省ヨリ發行候海外行免狀之儀海外旅券ト改稱別紙規則相定候條此旨布達候事 (別紙)

海外旅券規則

旅券ハ日本國民タルヲ證明スルノ具ニシテ海外各國ニアリテ要用少ナカラサルヲ以テ外務省ヨリ之ヲ發行ス規則左ノ如シ

第一條 旅券ヲ請フ者ハ別紙雛形ノ書面ヲ以テ外務省又ハ開港場管廳ニ願出之ヲ受取ルヘシ右郵便ヲ以テスルモ若シカラス旅券ヲ受取ラハ直ニ其示シアル所ニ當人姓名ヲ自記スヘシ

第二條 旅券ヲ受クルモノハ手數料トシテ金五拾錢ヲ納ムヘシ但旅券ハ一人一枚ニ限ルヘシ若シ五歳以下ノ小兒其父母同道ナルキハ其父母ノ旅券ニ附記スルヲ以テ足レリトス

第三條 内地ニ於テ右旅券受取ル間合之ナキカ又ハ海外ニ於テ遺失シタルカノトキハ其國在留ノ日本公使館又ハ領事館ニ其趣ヲ記載セル書面ヲ出タシ自身出頭シテ願ヒ受クヘシ但其手數料トシテ金貳圓ヲ納ムヘシ

第四條 公用ヲ以テ旅行シ官費ヲ以テ留學スル者ハ内地ニアリテハ其官廳ヨリ直ニ外務省

ニ掛合海外ニ在リテハ前條ノ趣ニ從ヒ旅券ヲ受取ルヘシ但手數料ハ納ムルニ及ハス

第五條 旅券ハ其赴クヘキ國ノ公使又ハ領事ノ證明ヲ得ル儀其國ニヨリ要用少ナカラス其節ハ其館ニ就テ直ニ之ヲ請フヘシ但其定規ニ隨ヒ手數料ヲ拂フヘキモノトス

第六條 海外ニアリテ所持ノ旅券我領事官ノ證明ヲ要用トスルコトアリ其節ハ之ヲ請ヒ得ヘシ但領事官ナキ地ニ於テハ公使館ニ到リテ之ヲ請フヘシ

第七條 旅券ハ歸朝ノ後三十日以内ニ其最初受取リタル官廳ニ之ヲ返納スヘシ郵船等ノ海員常ニ旅券ヲ要スル者ハ此限ニ在ラス但シ海外ニアリテ我公使又ハ領事館ヨリ受取リタル者ハ外務省ニ返納スルヲ以テ足レリトス

旅券願書式

私儀何々ノ爲某國ニ罷越或ハ往來致度ニツキ旅券御渡方奉願候也

明治 年 月 日

何府縣下

第何大區何小區

何國何郡何村町何番地又ハ寄留

士族屬職業

何 姓 名 印

年何年何ヶ月

外務省又ハ何府縣御中

第七類 第三章

養子婚姻

家督相續

合家分家絶家

出踪逃亡

旅行

右之通相違無之候也

前書之通證明候也

上封

戸長 姓名印  
府知事縣令姓名印

旅券願	何府縣下
外務省或ハ某府縣	何國何郡何驛村
御中	何町
	何誰

旅券文言

官印

右

ニ赴クニ付通路故障ナク旅行セシメ且必要ノ保護扶助ヲ與ヘラレンコトヲ其筋ノ諸官ニ希望ス

年 月 日

日本皇帝陛下官位姓名自記

所持人姓名自記

右ハ官員及官費留學生ニ與フル式ナリ

籍

當人姓名

齡

右ノ者故障ナク通行セシメ且必要ノ保護扶助ヲ與ヘラレン事ヲ其筋ノ諸官ニ希望ス

年 月 日

日本帝國官位姓名自記

所持人手記

右ハ華士族平民ニ與フル者ナリ共ニ英佛獨清文ヲ譯付ス

(一)朝鮮國旅行ノ者旅券出願方 明治十一年三月六日 外務省布達第二號

本年二月廿日第壹號達海外旅券規則第壹條外務省又ハ開港場警廳下掲載有之候處朝鮮國へ旅行候者ニ限リ左ノ縣廳へ願出旅券受取候テ不苦候條此旨布達候事

廣島 山口 島根 福岡 鹿兒島

〔長崎縣嚴原支廳〕

○第四章 墓地埋葬 死亡 忌服

第七類 第四章 墓地埋葬 死亡 忌服

十九年勅令第  
五十四號ニ依  
リ支廳ハ消滅  
シ島廳ヲ置ケ

### ●墓地埋葬沿革要領

明治五年六月第九十二號布告ヲ以テ自葬祭ヲ禁シ葬儀ハ神官僧侶ノ内ヘ可願旨ヲ令ス○同年第九十三號ヲ以テ自今氏子等神葬祭依頼ノ節喪主ヲ助ケ諸事可取扱旨神官ヘ布告ス○同年八月大藏省第五十八號布告ヲ以テ人民所持ノ耕地畔際等ヘ遺體ヲ埋葬スルヲ禁ス○六年七月第二百五十三號布告ヲ以テ火葬ヲ禁ス○同年十月第三百五十五號達ヲ以テ耕地宅地ハ勿論林藪タリ正許可ヲ得スシテ新ニ墓地ヲ設ケ區域ヲ取廣クルヲ禁セシム○七年一月第十三號布告ヲ以テ自今教導職ノ輩ヘ葬儀ヲ依頼スルコトヲ許ス○八年五月第八十九號布告ヲ以テ六年第二百五十三號火葬禁止ノ布告ヲ廢ス○同年六月內務省乙第八十號ヲ以テ燒場取扱心得ヲ達シ遺骨ヲ塲中ニ埋葬スルヲ禁ス○十四年十月內務省乙第四十八號達ヲ以テ教院教會所脫教所ニ於テ葬儀ノ執行ヲ禁ス○十五年一月內務省乙第四號ヲ以テ自今神道教導師其主神ヲ鎮祭シ其教徒ノ葬儀ヲ執行スル爲メ祠堂建設出願方ヲ達ス○同月內務省乙第七號達ヲ以テ神官教導職兼補ヲ廢シ葬儀ニ關係セサルモノトシ府縣社以下ハ當分從前ノ通トス○十七年十月第二十五號布達ヲ以テ墓地及埋葬取締規則ヲ定ム○同年十月第八十二號達ヲ以テ規則違背者處分方ヲ示ス○同年十一月內務省乙第四十號ヲ以テ本年第二十五號布達第八條ニ記セル方法細目ノ標準ヲ達ス

### 第百十一 墓地及埋葬取締規則

明治十七年十月四日  
太政官布達第二十五號

墓地及埋葬取締規則左ノ通相定ム

#### 墓地及埋葬取締規則

- 第一條 墓地及火葬場ハ管轄廳ヨリ許可シタル區域ニ限ルモノトス
- 第二條 墓地及火葬場ハ總テ所轄警察署ノ取締ヲ受クヘキモノトス

第三條 死體ハ死後二十四時間ヲ經過スルニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲナスコトヲ得ス  
但別段ノ規則アルモノハ此限ニアラス

第四條 區長若クハ戶長ノ認許證ヲ得ルニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲナスコトヲ得ス  
但改葬ヲナサントスル者ハ所轄警察署ノ許可ヲ受クヘシ

第五條 墓地及火葬場ノ管理者ハ區長若クハ戶長ノ認許證ヲ得タル者ニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲナサシムヘカラス又警察署ノ許可證ヲ得タル者ニ非サレハ改葬ヲナサシムヘカラス

第六條 葬儀ハ寺堂若クハ家屋構内又ハ墓地若クハ火葬場ニ於テ行フヘシ

第七條 凡ソ碑表ヲ建設セント欲スル者ハ所轄警察署ノ許可ヲ受クヘシ其許可ヲ得スシテ建設シタルモノハ之ヲ取除ケシムヘシ

但墓地外ニ建設スルモノ亦之ニ準ス

第八條 此規則ヲ施行スル方法細則ハ警視總監府知事縣令ニ於テ便宜取設ケ內務卿ニ届出

右布達候事

〔一〕墓地及埋葬取締規則ニ違背スル者處分方

明治十七年十月四日  
太政官布達第八拾貳號警視廳府縣

今般第貳拾五號ヲ以テ墓地及埋葬取締規則布達候ニ付此規則ニ違背スルモノハ違背罪ノ刑ヲ以テ處分スヘシ此旨相達候事

二 墓地及埋葬規則細則標準

明治十七年十一月十八日  
內務省達乙第四拾號警視廳府縣へ達

本年第貳拾五號布達第八條ニ記載セル方法細目ハ左ノ條件ヲ標準トスヘシ此旨相達候事

第一條 墓地ハ從前許可セラレタル者ニ限ル

但已△1ヲ得サル事情アリテ之ヲ取廢メ又ハ新設スル場合ニ於テハ地方廳ニ願出ヘシ

第二條 墓地ヲ新設スルハ國道縣道鐵道大川ニ沿ハス人家ヲ隔ルコト凡ソ六拾間以上ニシテ土地高燥飲用水ニ障ナキ地ヲ撰ムヘシ

第三條 墓地ハ種族宗旨ヲ別タス其町村ニ本籍ヲ有シ若クハ其町村ニ於テ死シタルモノハ何人ニテモ之ニ葬ルコトヲ得其從前別段ノ習慣アルモノハ此限ニアラス

但死刑ニ處セラレタル者ハ墓地ノ一隅ヲ區劃シテ其内ニ埋葬スルモノトス

第四條 墓地ノ周圍 墓地ト墓地ニ非サルニハ樹木ヲ栽ユヘシ墓地ノ内ニハ一丈以上ノ樹木塀牆ヲ存スヘカラサルモノトス

但從前ヨリ現存スル者ハ此限ニアラス

第五條 墓地ハ清潔ヲ旨トシ掃除及修繕ヲ怠ルヘカラス

第六條 火葬場ハ人家及人民輻湊ノ地ヲ隔ル凡ソ百貳拾間以上ニシテ風上ニ位セザル地ヲ撰ヒ火爐煙筒ヲ備ヘ臭烟ヲ防クノ裝置ヲナシ且周圍ニ塀牆ヲ設クヘシ

但山林原野等ニシテ人家ヲ隔タル場所ナルトキハ格別ナリトス

第七條 火葬ハ成ルヘク日沒後之ヲ行フヘシ

第八條 墳穴ノ深サハ六尺以上タルヘシ若シ土地ニヨリ六尺ニ至リ難キモノ及ヒ火葬ノ遺骨ヲ埋藏スルモノハ格別ナリトス

第九條 墓地火葬場ニハ必ス管理者ヲ置キ其姓名ハ區役所又ハ戶長役場ニ届ケ置クヘシ

第十條 死者ノ姓名族籍官位勳爵法號及生死ノ年月日建立者ノ姓名ヲ記スルニ止リ誌銘傳費等ノ碑文ヲ刻セサル墓標ハ所轄警察署ノ許可ヲ受ルノ限ニ非ス

第十一條 死屍ヲ埋葬又ハ火葬セント欲スル者ハ主治醫ノ死亡届書ヲ添ヘテ區長又ハ戶長ノ認許證ヲ乞フヘシ

第十二條 醫師ノ治療ヲ受クルノ猶豫ナクシテ死亡シタルモノヲ埋葬又ハ火葬セント欲スルモノハ醫師ノ檢案ヲ差出シ區長又ハ戶長ノ認許證ヲ乞フヘシ

妊娠四ヶ月以上ノ死胎ニ係ルトキハ醫師若クハ産婆ノ死産證ヲ差出シ區長又ハ戶長ノ認許證ヲ乞フヘシ

第十三條 變死ニ係ルモノハ立會醫師ノ檢案書ニ捺印ナクシテ差出スヘシ

第十四條 囚徒ノ死屍ヲ引取埋葬又ハ火葬セント欲スルモノハ獄醫ノ死亡證書寫ニ司獄官ノ捺印ヲ乞ヒテ差出スヘシ

第十五條 區戶長ハ前條ノ届書證書ヲ領收スルニアラサレハ埋火葬ノ認許證ヲ與フヘカラス

三 墓地ノ設ケルヲ禁ス

明治六年十月二十三日  
太政官達第三百五拾五號(使)府縣

第十六條 從來撰ニ墓地ヲ設ケ候儀ハ不相成候處今般私有地ノ證券相渡候上ハ心得違ノ者モ難計ニ付耕地宅地ハ勿論林藪タリモ許可ヲ得スシテ新ニ墓地ヲ設ケ或ハ區域ヲ取廣ケ候儀可令禁止就テハ忽墓地差支候鄉村モ可有之候條管下一般諸寺院

第十七條 境内ヲ始其他永久墓地ニ定ムヘキ場所取調圖面ヲ副ヘ大藏省ヘ可伺出此旨相達候事

第十八條 但即今墓地差支候場所ハ相當ノ處分致シ置本文ノ通至急取調可申尤管下總體一時取調出來兼候ハ、差向墓地差支候鄉村ヨリ取掛リ送次同省ヘ可伺出

四 古墳ト見ユル地ハ掘ニ發掘ヲ禁ス

明治七年五月二日  
太政官達第五拾九號府縣

上世以來御陵墓ノ所在未定ノ分即今取調中ニ付各管内宛蕪地開墾ノ節口碑流傳ノ場所ハ勿論其他古墳ト相見ヘ候地ハ  
猥ニ發掘爲致間敷候若差向墾闢ノ地ニ有之分ハ繪圖面相副教部省ヘ可伺出此旨相達候事

**〔五〕醫師患者死亡届**

明治九年二月五日  
内務省達乙第十三號各縣

管内醫師施治ノ患者死亡スル時ハ左ノ書式ニ準シ遺漏ナク區戸長ヲ經テ管廳ヘ爲届出申ケ年宛取調メ二月ヲ限リ當省  
ヘ可差出此旨相達候事 十六年乙第廿八號ヲ以テ届書ハ當省ヘ差出スニ不及旨ヲ達ス又戸長ノ下(若クハ  
醫務取締)トアレハ(醫務取締)ハ十二年乙第五十六號省達ニ依リ消滅ニ付除去ス  
死亡届 料紙半紙

病名 年號月日死

何業何職 姓 名 年 齡

右ハ私施治ノ患者ニ候處死去候間此段御届申上候也

何府何大區何小區何町番地  
醫師 姓 名

年號月日

何縣令 何某殿  
參事

**〔六〕患者死亡届差出順序**

明治九年四月一日  
内務省達乙第四拾四號各縣

當省本年乙第十三號ヲ以テ患者死亡届ノ儀相達候處右届書差出方順序醫師ヨリ直チニ差出候テハ數醫ノ施療ヲ受ケタ  
ル患者死亡ノ節醫師各自届出重複シ或ハ互ニ讓リ合榮兩相成候儀モ可生ニ付主任ノ醫師ハ必ラス届書ヲ死者ノ家人ニ  
付與スヘク家人ハ必ス之レヲ請求シテ該病家ヨリ(區戸長)ニ爲差出候儀可取計此旨更ニ相達候事 同上(戸長)ノ下(或  
チ除

**〔七〕死亡届書ニ職業記載方**

明治廿年十月二十七日  
内務省達乙第百二十四號府縣

本年二月乙第十三號達(三府)ハ同月八日相達候死亡届ノ儀往々書式ニ照準セズ職業ヲ記載セサル書面有之元來死亡  
届ハ土地ト職業ニ原ツケル疾病ニ異同多少アルヲ查出シ豫防法講究ノ用ニ供候條向後例ヘハ大工ハ大工鍛冶ハ鍛冶共  
他總テ本人ノ職業ヲ記載スヘク此旨更ニ相達候事  
但シ例ヘハ大工ノ家族モ他業ヲ營居者ハ本人ノ職業ヲ記載シ若シ本人無業ナレハ無業ト記シ候儀ト可相心得事

**● 伺指令**

**● 墓地火葬場新設ノ儀ニ付伺指令**

明治十七年十二月十一日  
佐賀縣(電報)伺

御省乙第四拾號達墓地火葬場新設ノ方法ハ衛生樞要ノ事件ニ付地方衛生會ニ附議シタル上施行セサレハ太政官ヨ  
リ定メラレタル衛生會規則ニ背クニ似タリ故ニ墓地取締規則ヨリ相省キ相當ノ順序ヲ經道ヲ施行シタシ

内務省指令 明治十七年十二月十九日

當省乙第四拾號達ノ儀ニ付本月十一日附伺ノ趣ハ墓地火葬場新設ノ方法ノミニ限ラス該達ニ據リ相定ムヘキ方  
法細目ノ全部トモ施行前地方衛生會ノ審議ニ付スヘキ儀ト心得ヘシ

**● 古墳發掘ノ件ニ付伺指令**

明治十九年三月十九日  
熊本縣伺

本縣宇土郡立岡村立岡山字西園野官林ニ於テ何者ノ所爲ナルヤ古墳發掘有之趣該地戸長ヨリ申出ニ付直ニ官吏ヲ  
派シ實査致サセ候處別紙圖面略ノ通ニ有之右ハ此儘ニ措キ候テハ不都合ニ付夫々再葬保存取計可申ヤ然ルモ該  
費用ハ官費御下渡可相成哉

大藏農商務兩省指令 明治十九年四月十四日

伺ノ趣古墳取致ノ儀聞届費用ノ儀ハ十八年度雜件増費トシテ別途可下渡候條費額取調更ニ大藏省ヘ可申出事

### ●行旅病死入取扱沿革要領

明治四年六月十七日布告ヲ以テ行旅ノ靈病氣ノ節取扱方規則ヲ定ム○十一年十二月第五十五號迄ヲ以テ前令第二條中地方官廳ヲ戶長役場ト改ム○十五年第四十九號布告ヲ以テ行旅死亡人取扱規則ヲ制定ス○同月第五十號布告ヲ以テ四年六月十七日布告行旅病人取扱規則ヲ廢ス

### 第百十二 行旅死亡人取扱規則

明治十五年九月三十日  
布告第四十九號

行旅死亡人取扱規則左ノ通制定ス

#### 行旅死亡人取扱規則

- 第一條 凡ソ引取人ナキ行旅死亡人アルトキ所在戶長ハ之ヲ最寄墓地へ假埋葬スヘシ其例死變死等ニ係ル者ハ警察官ノ檢視ヲ受クヘシ
- 第二條 死亡人ノ本籍氏名詳ナルキ戶長ハ死亡ノ狀況并ニ埋葬其他死亡人ニ屬スル費用ノ計算書ヲ本籍戶長へ通報スヘシ本籍戶長ハ之ヲ其家ニ通示シ費用ノ辨償ヲ要スルキハ三十日限差出サシメ埋葬地戶長ニ送付スヘシ若シ其家赤貧ニシテ辨償シ能ハサルキハ其本籍地方稅ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ
- 第三條 死亡人ノ本籍氏名詳ナラサルキ戶長ハ其相貌景狀附屬シタル物品場所年月日等ヲ詳記シ三十日間最寄揭示場へ揭示シ且兩度以上新聞紙ヲ以テ公告スヘシ公告ノ日ヨリ九十日ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルキハ該費用ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘシ
- 第四條 死亡人所持ノ金錢ハ埋葬其他死亡人ニ屬スル費用ニ供スヘシ又所持ノ物品ハ前條

ノ期限ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルキハ之ヲ公賣シ同上ノ費用ニ充ツヘシ  
但本籍氏名詳ナル者其家赤貧ニシテ費用ヲ辨償スルコト能ハサルキハ直ニ其物品ヲ公賣スルモ妨ケナシ

第五條 死亡人ノ遺財前條ノ費用ニ充テ餘贏アルキハ之ヲ本籍へ送付スヘシ其本籍氏名詳ナラサルモノハ之ヲ五ヶ年間〔戶長〕役場ニ保管シ仍ホ本籍氏名詳ナラサルニ於テハ地方稅雜收入ニ組入ルヘシ

右奉 勅旨布告候事

### ●伺指令

●軍人行旅中死亡等ノ節取扱方ノ伺指令 明治十六年八月十日  
廣島縣伺

客年第四十九號ヲ以テ行旅死亡人取扱規則公布有之並本年三月廿四日附ヲ以テ行旅人ニシテ重症飢餓等ニ迫リ目下難捨置者ハ戶長役場ニ於テ適宜救護ヲ加ヘ其費用ハ本人家元ヨリ辨償セシメ家元赤貧ニシテ辨償難相成有籍者ハ本籍無籍者ハ救護地々方稅ヲ以テ支辨スヘキ旨内務省ヨリ訓示有之候處海軍下士兵卒ニシテ單身旅行中萬一右等ノ場合ニ於テ假埋葬又ハ一時救護スヘキハ勿論ナレ其若引渡方及之ニ係ル諸費辨償ノ儀ハ御省軍務局又ハ鎮守府へ照會可然哉身分管轄一般人民ト異ル廉有之爲念此段相伺候也

海軍省指令 明治十六年八月二十五日  
伺之趣單ニ東海鎮守府へ照會候儀ト可相心得事

●海軍下士兵卒等旅行中死亡之節取扱方ノ伺指令 明治十六年十一月二十二日  
滋賀縣伺

第一條 明治十五年第四十九號公布ヲ以テ行旅人死亡取扱規則被定候處海軍下士兵卒等ニテ單身旅行中死亡スル

モノ有之ハ總テ該規則ニ準シ可取扱ハ勿論ノ義ト相考候得共其死體引渡方及入費償却方ノ義ハ滿役歸郷等ノ  
モノニ在テハ右規則第二條ニ依リ本籍戸長ヘ照會セシメ其他ノ者ハ東海鎮守府ヘ照會シ可然哉

第二條 前條果シテ然ラハ埋葬其他ノ費用 食料、藥價、醫師診斷、檢案料、通信費等ハ東海鎮守府ヨリ悉皆償却相成ル義乎或ハ其幾分  
ヲ償却相成ル義ニ候哉果シテ然ルハ其不足分ハ家元ヨリ償却爲致可然哉

第三條 本年三月二日付ヲ以テ内務卿ヨリ行旅人ニシテ重症飢餓等ニ迫マリ目下難關ヨリハ適宜救護ヲ加ヘ右ニ  
屬スル費用ハ自辨タルヘク若シ本人又ハ家元赤貧ニシテ辨償スル能ハサルハ地方稅教育費 無籍者ハ救護地  
以テ支拂ヘキ旨達有之候ニ付テハ下士兵卒等ニシテ萬一右等ノ場合ニ於テハ一時救護ヲ加ヘ其費用償却ノ義ハ  
滿役歸郷等ノモノヲ除キ其他ノ者ハ東海鎮守府ヘ照會セハ該費悉皆償却相成候義ニ候哉又ハ本人資力限リ追徴  
シ尙不足スルハ其家元ヨリ辨償爲致候義ニ有之候哉

第四條 下士兵卒等單身旅行中盜難ニ罹リ亦ハ旅費金遺失等ニテ歸途 滿役歸郷等ノ 差關ル旨ヲ以テ救護方申出候  
モノ有之ハ事實取調相違無之ニ於テハ衣服ナキモノハ衣服購求費宿泊ヲ要スルモノハ其宿泊料ヲ繰替貸與シ  
可然哉

海軍省指令 明治十六年十一月二十二日  
何之趣左ノ通可相心得事

第一條 在職ノ下士卒旅行中死亡スル者有之其死體引渡方ノ義ハ直ニ東海鎮守府ヘ照會スヘキ義ト心得ヘシ  
但親戚故舊ヨリ死體引取方出願スルハ下士金拾五圓卒金拾圓ヲ埋葬料トシテ下付スヘクニ付該金額ハ  
同府ヨリ受取ルヘシ

第二條 前條ニ於ケル埋葬料其他ノ費用ハ前段伺之通東海鎮守府ニ於テ處辨スヘクニ付該費目ヲ區分シ各調  
書ヲ以テ其都度照會セシムヘキ儀ト心得ヘシ

第三條 前段伺之通

第四條 旅行中盜難又ハ旅費金遺失等ニテ困難ノ者アルハ明治十一年乙第十號當省達旅行證票規則第三條  
ニ比準シ事實相違ナキモノハ一時救護ヲ加ヘ其費用ハ前二條ノ通同府ヘ照會スヘシ

●下士兵卒旅行中一時救護ノ伺指令 明治十六年十二月十九日 茨城縣伺  
海軍下士兵卒ニシテ單身旅行中重症飢餓等ニ迫リ一時ノ救護又ハ假埋葬セシ者引渡方及諸費ノ儀本年八月廿五日  
廣島縣伺ニ對スル御指令ニ據リ其時々東海鎮守府ヘ照會可致ハ勿論ナレモ右ハ官私(官命ヲ帶フル者或ハ私事ニ  
出ル者)ノ別ナク之ニ係ル費用ハ悉皆下附セララル、御主趣ニ候哉

海軍省指令 明治十七年二月十九日  
書面埋葬費ハ何ノ通其他ノ費用ハ事故ヲ明記シ更ニ可伺出事

第一百十三 忌服ノ儀京家ノ制ヲ廢ス 明治七年十月十七日 布告第百八號

忌服ノ儀追テ被仰出ノ品モ可有之候得共差向京家ノ制武家ノ制兩様ニ相成居候テハ法律上  
不都合有之ニ付自今京家ノ制被廢候條此旨布告候事

(一)僧尼人民一般ノ服忌ヲ受ケシム 明治五年六月十二日 布告第百七十六號

僧尼服忌ノ儀ハ是迄御制度モ無之候處自今人民一般ノ服忌ヲ可受事

○第八類

○第一章 醫業 賣藥 藥品

●醫業諸規則沿革要領

明治四年十月文部省布達ヲ以テ大學東校ニ種痘局ヲ置キ種痘醫ニ免許狀ヲ與ヘ並痘苗分與方ヲ定ム○五年九月文部省第二十九號達ヲ以テ東校ノ免許ヲ得タル種痘醫ヨリ授術セラレタル者ハ其管轄限リ施術ヲ免許セシム○七年十月文部省第二十七號布達ヲ以テ種痘規則ヲ定メ施行免狀ヲ附與ス○九年一月内務省乙第五號達ヲ以テ醫師試驗法ヲ定メ新ニ開業スル者ハ府縣ニ於テ試驗ノ上免狀ヲ授與セシム○同年四月内務省甲第八號布達ヲ以テ文部省制定ノ種痘規則ヲ廢シ更ニ種痘醫規則ヲ定ム○十年八月内務省乙第七十六號達ヲ以テ維新以來官廳及地方公立病院ニ醫術ヲ以テ奉職從事セシ者ハ試驗ヲ須ス免狀ヲ渡サシム○十二年二月内務省甲第三號布達ヲ以テ九年乙第五號達中醫師試驗科目等ノ規則ヲ定メ該規則ニ牴觸セル指令等ヲ廢止ス○十五年二月第四號布達ヲ以テ自今文部省ノ認可ヲ得タル醫學校卒業生ハ試験ヲ要セス開業免狀ヲ下付ス○同年三月内務省乙第十四號達ヲ以テ從來開業醫ノ子弟ニシテ助手ト成リ醫業ヲ以テ家名相續ノ者ニ限リ試驗ヲ要セス開業許可ノ證ヲ付與スルヲ許ス○同年四月内務省乙第二十六號達ヲ以テ前令開業醫ノ子弟ニ開業許可ノ證ヲ付與スルハ本年八月申限トシ右期限後ハ一切之ヲ許サス○同年八月第三十九號布告ヲ以テ醫師醫業ニ關シ犯罪者クハ不正ノ行爲アルトキハ其業ヲ停止シ又ハ之ヲ禁ス○十六年十月第三十五號布告ヲ以テ醫師免許規則ヲ制定シ十五年第四號布達同年第三十九號布告ヲ廢ス○同月第三十四號布達ヲ以テ醫術開業試驗規則ヲ定メ十二年内務省甲第三號布達ヲ廢ス

第百十四

醫師免許規則

明治十六年十月二十三日  
布告第三十五號

醫師免許規則別冊ノ通製定シ明治十七年一月一日ヨリ施行ス



但明治十五年二月第四號布達同年八月第三拾九號布告ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス  
右奉 勅旨布告候事

(別冊)

醫師免許規則

- 第一條 醫師ハ醫術開業試験ヲ受ケ内務卿ヨリ開業免狀ヲ得タル者トス  
但此規則施行以前ニ於テ受ケタル醫術開業ノ證ハ仍ホ其効アリトス
- 第二條 開業免狀ヲ得ントスル者ハ試験及第證書ヲ以テ地方廳ヲ經由シテ内務省ニ願出ツ  
ヘシ
- 第三條 官立及府縣立醫學校ノ卒業證書ヲ得タル者其證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ノコトヲ願  
出ツルトキハ内務卿ハ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ
- 第四條 外國ノ大學醫學部若クハ醫學校ニ於テ卒業シタル者或ハ外國ニ於テ醫術開業免許  
ヲ得タル者其卒業證書又ハ開業證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ノコトヲ願出ツルトキハ内務卿  
ハ其證書ヲ審査シ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ
- 第五條 醫師ニ乏キ地ニ於テハ府知事縣令ノ具狀ニヨリ内務卿ハ醫術開業試験ヲ經サル者  
ト雖モ其履歷ニヨリ假開業免狀ヲ授與スルコトアルヘシ
- 第六條 開業免狀ヲ得ル者ハ免狀下付ノ節手数料金三圓ヲ納ムヘシ
- 第七條 開業免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ内務省ノ醫籍ニ登錄シ時々之ヲ公告スヘシ

刑法第二百十五條參看

十六年司法省  
丁第三十九號  
(第九十七項)  
九ノ七ノ七ノ  
ナ以テ醫業ニ  
關スル犯罪處  
斷ノ節内務省  
ヘ通知方ヲ定  
ム

- 第八條 開業免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ノ變換ニ由リ免狀ノ書換ヲ願フ者ハ其事由ヲ  
記シ地方廳ヲ經由シテ内務省ニ願出ツヘシ
- 第九條 開業免狀ノ書換ヲ願フ者ハ免狀下付ノ節手数料金壹圓ヲ納ムヘシ
- 第十條 醫師廢業又ハ死亡シタルトキハ地方廳ヲ經由シテ其開業免狀ヲ内務省ニ返納スヘ  
シ
- 第十一條 醫師其業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アルトキハ中央衛生會ノ審議ヲ經内務卿  
ニ於テ其業ヲ停止若クハ禁止スルコトアルヘシ  
但其事開業免狀ヲ得ルノ前ニ在リト雖トモ本條ニ準シ處分スルコトアルヘシ
- 第十二條 前條ニ據リ醫業禁止ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ地方廳ニ於テ直チニ其開業  
免狀ヲ取上ケ之ヲ内務省ニ返納スヘシ其停止ノ處分ニ係ルモノハ幾年月日間停業シタル  
旨ヲ開業免狀ニ裏書シ應印ヲ捺シテ之ヲ本人ニ下付スヘシ
- 第十三條 内務卿ハ醫業禁止ノ處分ヲ爲シタル後ト雖トモ本人ノ行狀ヲ勘査シ中央衛生會  
ノ審議ヲ經特ニ其禁止ヲ解クコトアルヘシ
- (一) 醫師開業試験規則 明治十六年十月二十三日  
太政官布達第三十四號  
今般第三十五號ヲ以テ醫師免許規則布告相成候ニ付醫術開業試験規則册ノ通り相定メ明治十七年一月一日ヨリ施行  
ス
- 但明治十二年二月内務省甲第三號布達ハ同日ヨリ廢止ス  
右布達候事

(別冊)

醫術開業試験規則

第一條 醫術ヲ開業セントスル者ハ此規則ニ據リ試験ヲ受クヘシ  
第二條 内務卿ハ毎年二回醫術開業試験ヲ舉行スヘシ但試験ヲ舉行スヘキ地方及ヒ試験期日ハ六ヶ月前之ヲ内務卿ヨリ告示スヘシ

第三條 内務卿ハ醫術開業試験ヲ舉行スル毎ニ官立及ヒ府縣立醫學校病院ニ從事スル者又ハ地方ニ於テ學術名望アル醫師理化學者等ヲ選ビ試験委員ヲ命スヘシ  
但齒科醫術開業試験ニ於テハ齒科醫一名ヲ試験委員ニ加フルコトアルヘシ

第四條 内務卿ハ主事者ヲ派遣シ試験一切ノ事ヲ監督整理セムヘシ

第五條 醫術開業試験ハ之ヲ二期ニ分チ前期試験後期試験トス前後二期ノ試験ヲ同時ニ受クルコトヲ得ス  
但齒科醫術開業試験ハ全科一時ニ受クルモノトス

第六條 試験科目ヲ定ムルコト左ノ如シ

- 前期試験科目
    - 第一 物理學
    - 第二 化學
    - 第三 解剖學
    - 第四 生理學
  - 後期試験科目
    - 第一 外科學
    - 第二 內科學
    - 第三 藥物學
    - 第四 眼科學
    - 第五 產科學
    - 第六 臨床實驗
- 第七條 齒科試験科目ヲ定ムルコト左ノ如シ

- 第一 齒科解剖及生理
- 第二 齒科病理及治療
- 第三 齒科用藥品
- 第四 齒科用器械
- 第五 實地試験

第八條 前期試験ハ一ヶ年半年以上後期試験ハ更ニ一ヶ年半年以上修學セシ者ニ非レハ之ヲ受クルコトヲ得ス  
但齒科醫術開業試験ハ二ヶ年以上修學セシ者ニ非サレハ之ヲ受クルコトヲ得ス  
第十七年第二號布達  
第九條 前期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ修學ノ履歷書ヲ副ヘ後期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ履歷書及前期試験及第ノ證書ヲ副ヘ毎年六月十二日中地方廳ニ差出スヘシ地方廳ハ翌月五日迄ニ其書類ヲ取纏メ内務省ニ進達スルモノトス

但履歷書ニハ其師若クハ他ノ開業醫師二名以上ノ保證アルヲ要ス  
第十條 地方廳ニ於テ試験出願者中醫事ニ關シ犯罪者クハ不正ノ行爲アリト認ムル者アルトキハ之ヲ内務省ニ具狀スヘシ内務省ニ於テハ中央衛生會ノ審議ヲ經其情狀ニ因リ期限ヲ定メ試験ヲ許サルコトアルヘシ

第十一條 試験問題ハ試験主事者試験委員協議ノ上之ヲ撰定シ試験場ニ臨ミ受験人ヲシテ筆答セシムヘシ  
但時宜ニヨリ口答セシムルコトアルヘシ

第十二條 試験主事者ハ試験終ルノ後試験委員ト與ニ其成績ヲ評定シ及第シタル者ニハ直チニ及第證書ヲ與フヘシ  
但及第證書ニハ試験主事者試験委員連署スヘシ

第十三條 試験ニ落第シタル者ハ半年ヲ終ルニ非レハ再試験ヲ請フコトヲ得ス  
第十四條 醫術開業試験ヲ受クル者ハ試験開場ノ前日迄ニ左ノ手数料ヲ納ムヘシ

- 前期試験手数料 金三圓
- 後期試験手数料 金五圓
- 齒科試験手数料 金五圓

第八類 第一章 醫業 賣藥 藥品

第十五條 受験申疾病及ヒ其他ノ事故アリテ試験ヲ中止シ又ハ落第シタル者ト雖モ前條ノ手数料ヲ返付セス

(二) 試験ヲ要セスシテ醫師ノ免狀ヲ受與スヘキ者格例 明治十六年十一月十七日 内務省達乙第四十六號府縣

本年第三十五號布告醫師免許規則第三條ニ據リ試験ヲ要セス免狀ヲ授與スヘキ者ハ東京大學及ヒ左ノ條件ヲ具ヘ當省ノ特許ヲ得タル醫學校ノ卒業證書ヲ有スル者ニ限り候條右ニ適應スル醫學校有之候向ハ其校則教則及教員履歷書生徒員數其他學校ニ關スル一切ノ書類取纏メ豫メ當省ヘ稟議スヘシ此旨相達候事

但明治十五年太政官第四號布達ニ依リ既ニ特許ヲ得タル向ハ此際更ニ稟議ニ及ハス

- 一 三名以上ノ醫學士(歐米ノ大學校ニ於テ卒業シタルモノ等)ヲ以テ教諭ニ充ツルモノ
- 一 生徒ノ員數ニ相當セル助教ヲ置ケモノ
- 一 四年以上ノ學期ヲ定メ教則并ニ試驗法ノ完備スルモノ
- 一 生徒ノ實地演習ヲ爲スヘキ病院アルモノ
- 一 器械標本ノ具備スルモノ

(三) 醫師開業受験人心得 明治十六年十二月十日 内務省告示甲第二十六號

今般太政官第三十四號ヲ以テ醫師開業試驗規則布達相成候ニ付右受験人心得左之通相定候條此旨告示候事

受験人心得

第一條 醫師開業試験ハ當省ヨリ告示シタル試驗舉行地ノ中各自便宜ノ地ニ於テ之ヲ受クルヲ得ヘシ

第二條 醫師開業試験ヲ受ケント欲スル者ハ本年第三十四號布達醫師開業試験規則第九條ニ準據シ其願書ヲ居住ノ地方廳ヘ差出スヘシ

第三條 前條許可ノ指令ヲ受ケタル者ハ當省ヨリ告示シタル期限迄ニ試験舉行ノ地ニ着シ宿所氏名ヲ其地方廳ヘ届出ツヘシ

第四條 試験手数料ハ試験舉行ノ前日迄ニ醫師開業試験場ヘ相納ムヘシ

第五條 試験場ノ取締上不都合ト認ムヘキ所爲アル者ハ主事者ヨリ退場セシムルコトアルヘシ

願書式

醫師開業試験願

住所(寄留ナレハ本籍ヲ併記スヘシ)

族籍

氏名

年月生

私儀何年何月何地ニ於テ醫師開業前期(後期)齒科ナレハ醫師ノ上齒科ノ二字ヲ加ヘ前期後期ノ四字ヲ除ク 試驗相受度別紙書類相添此段奉願候也

右 氏名印

(戸長) 氏名印

(衛生委員) 氏名印

内務卿宛

(四) 從來開業ノ醫師ハ試験ヲ要セス鑑札等ヲ附與ス 明治十年八月十六日 内務省達乙第七十六號府縣

昨明治九年當省乙第五號ヲ以テ醫師試験ノ儀相達從來開業ノ者ハ試験ヲ要セス地方限リ鑑札等ヲ與ヘ新舊ヲ區分シ以テ醫師改進ノ基礎相立候處維新以來該術ヲ以テ諸官廳及地方公立病院ニ奉職從事シ主トシテ醫藥者クハ教授ノ任ニ當リタル者ハ志願ニヨリ試験ヲ不須直ニ免狀可交付候條左ノ箇條ニ照觀シ本人ノ願書及履歷書ニ當廳ノ添書ヲ付シ可申出此旨相達候事

但自今官立醫學校ニ於テ卒業證書ヲ得シモノ、外ハ總テ成規ノ試験ヲ遂ケ候儀ト可相心得事

一 内務省醫視病院醫員及ヒ舊醫視廳醫員

乙第五號ハ十六年第三十四號布告及第三十五號布告ニ據リ消ス

但藥局專任ノモノハ此例ニアラス以下之ニ做ヘ

- 一 陸軍省軍醫副及軍醫試補以上
- 一 海軍省軍醫副以上

皇漢醫道掛種痘館掛ハ之ヲ除ク

- 一 文部省及舊大學東校少得業生及ヒ醫學教育下醫官直醫以上並同省直轄諸學校醫員
- 一 司法省及舊彈正藥醫員

- 一 宮内省六等侍醫以上及舊少典醫官權少侍醫以上
- 一 開拓使病院醫員
- 一 府縣病院及地方公立病院當直醫以上

**〔五〕** 從前府縣ニ於テ下付ノ醫術開業ノ證ヲ所持スル者更ニ免狀附與 明治十七年一月二十一日 內務省達乙第四號府縣

從前府縣ニ於テ下付シタル醫術開業許可ノ證ヲ所持スル者ハ今般更ニ當省ニ於テ免狀附與可致候條此旨相違候事

**〔六〕** 引取人ナキ刑死者及囚徒ノ遺骸解剖方 明治十八年七月二十一日(文部卿連署) 內務省達甲第二十五號府縣

監獄則ニ扱クル所ノ刑死者及死亡者ニシテ親屬故舊其遺骸ノ下付ヲ請フ者ナキトキハ官公立醫學學校若クハ病院ニ於テ該遺骸ヲ解剖實驗ノ用ニ供スルヲ得此旨相違候事

但屍體解剖ノ後ハ縫理シテ原體ニ復シ不都合無之様取計ハシムヘシ

**〔七〕** 入齒齒抜口中療治接骨等營業ノ者開業及鑑札渡方 明治十八年三月二十三日 內務省達甲第七號府縣

入齒齒抜口中療治接骨等營業ノ者ハ明治十六年十月第三拾四號布達ニ據リ醫術開業試驗ヲ經ルニ非サレハ新規開業不相候條從來之營業者ハ此際各地方總ニ於テ鑑札ヲ付與シ相當之取締法相立可申此旨相違候事

但既ニ取締法相設居候向ハ更ニ本分ノ手續ヲ爲スニ及ハス

**〔八〕** 鍼灸術營業者取締方 明治十八年三月二十五日 內務省達甲第七號府縣

二十一年文部省告示第十號(第二百七十八項)參看

鍼灸術營業者之儀ハ從來開業之者并ニ新規開業セントスル者ハ自今出願セシメ其修業履歷ヲ檢シ相當ト認ムルトキハ差許不苦其取締方之儀ハ便宜相設可申此旨相違候事

但既ニ營業差許タルモノハ更ニ出願セシムルニ及ハス

### ● 伺指令

**● 醫師開業規則ノ儀ニ付伺指令** 明治十六年十月二十九日(電報) 三重縣伺

第三十五號布告醫師規則第一條但世開業ノ證トハ縣限リ與ヘタル鑑札モ此内ニ含蓄スル儀カ

內務省指令 明治十六年十一月二日

伺之通

**● 醫師免許規則第三條學校ノ儀ニ付伺指令** 明治十六年十一月二日 廣島縣伺

本年第三十五號布告醫師免許規則第三條ハ同第三十四號公達醫術開業試驗規則第六條ノ科目ヲ教授セル縣立醫學校ノ卒業證書ヲ得タル者ハ試驗ヲ要セス免狀下付ノ旨趣ナル哉

內務省指令 明治十六年十一月十三日

醫術免許規則第三條ニ於テ試驗ヲ要セス免狀授與ノ際職ニ及フヘキ者ハ特ニ當省ノ許可ヲ得タル學校ノ卒業生ニ限ルヘシ

**● 醫術開業試驗規則第八條ノ件ニ付質義并回答** 明治十六年十一月一日 內務省質義

醫術開業試驗規則第八條ニ於テ前期試驗ハ一ケ年半後期試驗ハ更ニ一ケ年半以上修學セシモノニアラサレハ云々ト有之右更ニ一ケ年半トハ前期試驗ヲ受ケタルヨリ計算スル儀ニ無之前修學ノ一ケ年半ヨリ又更ニ一ケ年半修學スルトニシテ即チ就學ヨリ通算シテ三年ヲ經シ以上ハ試驗差許可申義ト相心得候ヘ共爲念此段及御質義候也

參事院回答 明治十六年十一月八日

本月一日付實開醫術開業試驗規則第八條ノ件ハ見解ノ通右及回答候也

●醫術開業試驗規則之儀ニ付伺指令 明治十六年十月三十一日 埼玉縣伺

本年十月第三拾四號布達醫術開業試驗規則第六條ニ於テ試驗科目前後二期ニ區別有之其科目中眼科產科等ヲ列記有之儀ニ付後來眼科產科等特ニ其一科之試驗ヲ以テ專門開業許可之儀ハ御開屆相成儀トハ存候得共同則第七條ニ於テ齒科醫ノミ獨專門開業許可相成候様相見聊疑團相生シ候ニ付相伺候也

内務省指令 明治十六年十一月十九日

伺之趣齒科醫術ニ限リ專門開業差許候儀ト可心得事

●醫師免許規則中ノ儀ニ付伺指令 明治十六年十一月二日 山梨縣伺

醫師免許規則第一條但書ニ此規則施行以前ニ於テ受ケタル醫術開業ノ證ハ仍ホ其効アリトスト有之右ハ從前御省ノ試驗ヲ經或ハ試驗ヲ須ヒス免狀御下付ノ者ハ勿論明治九年御省乙第五號御達ニ依リ縣限免許致シ候從來開業ノ醫師ヲモ總テ包括シタル儀ト相心得可然哉

前項ノ如ク從前縣限リ免許候モノモ仍ホ其効アリトスルハ若此等ノ者其業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アルハ規則第十一條ノ旨ニ準シ縣令ニ於テ適宜處分致シ可然哉

内務省指令 明治十六年十一月二十一日

第一項 伺之通

第二項 當省ニ於テ處分スヘキ儀ト心得ヘシ

●醫術試驗規則ニ付伺指令 明治十六年十一月十五日 愛知縣伺

本年太政官第三拾四號布達ニ依リ醫術試驗ヲ願出ル者ノ年齡ニ制限ハ無之候哉

内務省指令 明治十六年十一月二十八日

醫術試驗ヲ願出ルモノノ年齡ハ制限ナシ

●醫師免許規則及醫術開業試驗規則中疑義ノ廉伺指令 明治十六年十一月六日 鳥取縣伺

本年第三拾五號布告醫師免許規則及本年第三十四號布達醫術開業試驗規則中左ノ項目疑義ニ涉リ決兼候間至急何分御指令相成度此段相伺候也

醫師免許規則ノ部

一第一條但書ニ此規則施行以前ニ於テ受ケタル醫術開業ノ證ハ仍ホ其効アリトスト有之候處右ハ本縣限リ履歷ニ依リ許可セシ開業免許證モ含蓄スル儀ト心得可然哉又ハ御省ヨリ交付相成免許證而已ニ止ル儀ニ候哉

一第三條中官立及府縣立醫學校トハ客年文部省第四號達醫學校通知甲乙兩種ノ醫學校ヲ指稱スル儀ニ候哉

醫術開業試驗規則ノ部

一第八條ノ場合ニ於テ三ヶ年以上醫學ヲ修メ居モノ前期試驗ヲ及第シ更ニ後期試驗ヲ受ケ度モノハ則三ヶ年以上修學セシ故ヲ以テ更ニ一ヶ年半ヲ經過セサルモ出願可然哉又ハ前期試驗及第ノ上一ヶ年半修學スルモノニ非レハ不相成儀ニ候哉

一内外産眼科等其機科專門開業願出度モノアルモ爾後一切不相成儀ト心得ヘクヤ

一第四條主事者ヲ派遣シ試験一切ノ事ヲ監督整理セシムヘント有之候處右試驗場ニ係ル費用ハ別ニ御省ヨリ御支辨相成候儀ニ候哉

内務省指令 明治十六年十一月三十日

第一項 前段伺之通

第二項 本年當省乙第四十六號達ノ通心得ヘシ

第三項 前段伺之通

第四項 第五項伺之通

●醫師免許規則ノ儀ニ付伺指令 明治十六年十一月七日 長野縣伺

第一條 今般第三十五條布告醫師免許規則第三條第四條ニ該ルモノ、出願ニハ別途修學履歷書ハ要セサル儀ニ可有之哉

第二條 同上第五條ニヨリ假開業免狀ヲ得タル者他縣或ハ管内ト雖モ他郡區へ轉籍寄留ノ場合ハ免狀返納セシムヘキ儀ニ可有之哉

但當縣管内ニシテ轉住ノ場所醫師ニ乏シキ地方ナレハ本文ノ限リニ無之儀ト心得可然哉

第三條 假開業免狀御授與之者ヨリハ規則第六條及ヒ第九條ノ手数料ハ上納ニ不及儀ニ候哉

第四條 規則第十一條ニ該ルモノアルキハ客年九坤節第五九五號御訓示之通心得可然哉

右相伺候也

內務省指令 明治十六年十二月三日

第一條第四條何之通

第二條免許區域外ニ轉居スルモノハ何之通

但書ノ儀ハ其都度具申スヘシ

第三條手数料上納セシムヘシ

●醫師試驗規則ノ伺指令 明治十六年十二月十七日 東京府伺

本年太政官第三十四號布達醫術開業試驗規則第九條ニ據レハ後期試驗ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ履歷書及前試驗及第ノ證書ヲ添ヘ云々ト有之候處改正前ノ試驗規則ニ據リ內科外科眼科產科等各專門ヲ試驗及第シ既ニ右ノ免許狀ヲ所持シ後期試驗志願ノ者ハ再ヒ前期試驗ヲ要セス直チニ後期試驗御許可相成候事トハ存候得共爲念此段相伺候也

內務省指令 明治十六年十二月二十四日

何之通

●醫師開業免許規則之儀ニ付伺指令 明治十六年十一月二十七日 秋田縣伺

今般太政官第三十五號ヲ以テ醫師開業免許規則公布相成候ニ付左ノ件々相伺候

第一條 規則第一條但書此規則施行以前ニ於テ受ケタル醫術開業ノ證ハ仍ホ其効アリトスト有之然ルニ從來開業醫ニシテ是マテ廢業シ鑑札付與セサルモノ更ニ復業願出其證確實ナルモノハ今后ト雖モ本縣限リ開業差許不苦儀ト心得可然哉

第二條 規則第五條醫師ニ乏キ地云々ハ一府縣管内ヲ指示セラレ候儀ニ可有之哉或ハ一管内例之ハ甲地方ニ醫師アルモ乙地方ハ山間遠隔ニ僻在シ醫師ニ乏シク患者醫療ヲ得ルニ苦ム等ノ實況アルモノハ是又本條ニ據リ具狀スルヲ得ル儀ト心得可然哉

第三條 死亡又ハ廢業者開業免狀ノ儀昨十五年三月二十五日尙全四月二十六日御指令ニ依リ該免狀ハ本廳へ返納セシメ候上裏面へ死亡或ハ廢業ノ旨ヲ明記シ臚印ヲ捺シ下付致置候處規則第十條ノ趣モ有之候得共當縣地ノ如キハ該ニ具狀ノ通リ醫師缺乏事ヲ其子弟ヲ勸勵スルノ一端モ相成候儀ニ付自今ト雖モ前御指令ニ據リ取計度候條如何相心得可然哉

第四條 規則第十二條醫業停止ノ處分ニ係ルモノハ幾年月間停止シタル旨ヲ開業免狀ニ裏書云々ト有之右ハ左ノ書式ヲ以テ裏書取計可然哉

(免狀裏書樣式畧之)

內務省指令 明治十七年二月二十五日

第一條 十六年第三十四號布達ニ依リ更ニ試驗ヲ受シムヘシ

第二條 後段之場合ニ限ルヘシ

第三條 離間屆

第四條 何之通

●醫師免許規則之儀ニ付伺指令 明治十六年十二月十八日 群馬縣伺

第一條 今般第三十五號布告醫師免許規則中第五條ニ依リ醫術假開業免狀ヲ得シ者アリシ地方へ他ヨリ醫師轉住  
 スト雖モ三四名ノ多キニ達セサル以上ハ縱令同村内タリトモ假免狀所有ノ醫師其儘開業罷在不苦儀ニ候哉

第二條 管内醫師ニ乏シキ地方區域制限ハ豫テ本縣限相定メ別段御省へ伺又ハ御届ニハ不及儀ニ候哉

内務省指令 明治十七年二月廿六日

第一條 第二條トモ其都度伺出ツヘシ

●醫師免許規則之儀ニ付伺指令 明治十六年十二月十一日 佐賀縣伺

第三拾四號布告醫師免許規則中疑團之廉々左ニ相伺候也

第一條 規則第五條ニ醫術ニ乏シキ地ニ於テハ府知事縣令ノ具狀ニ依リ醫術開業試驗ヲ經サル者ト雖モ其履歷ニ  
 ヨリ假開業免狀ヲ授與スルコアルヘシト有之其履歷トハ三ヶ年以上醫學ヲ修業シタル實蹟ヲ有シ其師若クハ他  
 ノ開業醫師ニ從來開業醫師モ準之 二名以上ノ保證アルモノ等凡程度モ有之モノニ候哉

第二條 規則第八條ニ開業免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ノ變換ニ由リ免狀ノ書替ヲ願フモノ云々トアリ該免狀  
 ハ本籍縣内ニ限リ他縣轉籍等ノ者ハ必ス書換ヲ要セシムヘク儀ニ有之候哉

第三條 規則第六條第九條ノ手数料ハ其時々或ハ一ヶ月取廻メ御省へ送納スヘキ哉

内務省指令 明治十七年三月二十五日

第一條 修學年限及保證ノ制限ナシ

第二條 他府縣轉籍者ハ書換モシムヘシ

第三條 本年當省乙第十七號達ノ通心得ヘシ

●藥舖醫師兼業之儀ニ付伺指令 明治十六年五月十一日 福井縣伺

管テ御省免狀所持又ハ縣限許可シタル藥舖ニシテ醫學修業ノ上成規ニ據リ醫術開業出願候節試驗問頭請求致候ハ

御交附可相成ハ勿論ト信認仕候而シテ試驗成績合格者へ開業免狀交附セラレシ上ハ右醫師從前藥舖業相兼業ス  
 ルモ固ヨリ醫師試驗規則其他ニ嫌疑之明文無之限リハ別ニ妨ケ無之儀ト相心得可然哉

内務省指令 明治十七年四月十一日

伺之通

●醫師藥種商兼業伺指令 明治十七年四月十九日 埼玉縣伺

醫師ニシテ藥舖兼業不相成儀ハ各縣伺御指令等ニモ相見候就テハ藥種商ト雖モ同様兼業不相成儀ニ候哉

内務省指令 明治十七年四月三十日

伺之趣藥種商兼業不苦儀ト可心得事

●醫術開業免狀授與之儀ニ付伺指令 明治十六年十二月二十四日 宮城縣伺

御省乙第四拾七號ヲ以テ明治十年御省乙第七拾六號達以後奉職ノ者ト雖モ該達ニ比準スヘキモノハ志願ニ依リ直  
 ニ醫術開業免狀御授與可相成旨御達相成候付テハ縣立避病院擔當醫員ノ如キハ勿論該達ニ比準スルヲ得ヘキ儀ト  
 存候處縣立病院附屬梅院擔當醫員及郡區醫員ノ如キモ縣令ノ命スル處ニシテ地方稅賦金等ヨリ俸給々與致置候  
 儀ニモ有之且地方衛生會員中醫業ヲ以テ撰拔セラレタルモノハ俸給ハ給與不致ト雖モ同様縣令ヨリ命シ置候ニ就  
 テハ是亦々該達ニ比準スルヲ得候儀ト相心得可然哉

内務省指令 明治十七年五月二十日

●醫術開業免狀授與ノ儀伺書ニ掲載スル種類ノモノハ總テ許可ノ限リニアラス

●醫術開業後期試驗願ノ儀ニ付照會回答 明治十七年六月二十六日 秋田縣照會

醫術開業後期試驗出願ノ者ハ前期試驗及第ノ證書ヲ相添願出ヘキ成規ニ候處右ハ一身ノ榮譽ヲ證スルモノニシテ  
 長ク保存致度旨願出之者有之事情尤モノ次第ニ候條本證書ハ當廳ニ於テ調査ノ上其寫ヲ以テ進達致不苦儀ニ可有之  
 哉

内務省衛生局回答 明治十七年七月五日

本月二十六日附醫術開業後期試驗出願ノ節前期試驗及第ノ證書寫ヲ添ヘ差出スモ苦シカラス

●入齒々抜口中療治接骨等營業者取締御達中疑義ノ伺指令 明治十八年三月二十八日 宮城縣伺

第一條 入齒々抜口中療治接骨等營業ノ者トアルハ右四業ノ外ニ鍼灸按摩等ノ者ヲモ含蓄セラルルヤ

第二條 從來口科又ハ整骨科ノ者明治十六年十二月御省乙第五十號御達ニ據リ醫籍編入進達ノ上御省ヨリ免狀下附ノ者ヲ除キ其他右ノ如キ營業ヲ爲ス者ノ取締相立候儀ト心得可然哉

第三條 營業鑑札ハ廳費ヨリ支辨スヘキヤ又ハ地方稅ヨリ支辨スヘキモノナルヤ

第四條 從來ノ營業者ハ此際各地方廳ニ於テ鑑札ヲ附與シ云々トアレハ從來ノ營業者出願期限ハ地方廳ニ於テ適宜相定可然哉

内務省指令 明治十八年四月二十日

第一條 鍼灸按摩ハ含蓄セス

但鍼灸ハ明治十八年常省甲第十號達ノ通可心得按摩ハ其廳ノ見込ニ任セ適宜取締相設候儀ハ苦シカラス

第二條 第四條伺之通

第三條 後段伺之通

●死體解剖ノ件ニ付伺指令 明治十八年十月八日 栃木縣伺

第一條 本年七月御省甲第二十五號御達ニ刑死者及病死者ニシテ親屬故舊其遺骸ノ下付ヲ請フ者ナキハ官公立醫學校若クハ病院ニ於テ解剖實驗ノ用ニ供スルヲ得ト有之候處右ハ監獄則第七十九條第一項ニ依リ其死亡シタル時限ヨリ二十四時以内ニ遺骸ノ下付ヲ乞フ者ナクハ直ニ解剖スルトセハ親屬故舊遺地ニ在ル者ハ或ハ失竊ノ掛念アルニ付時限ニ關セス全ク遺骸ノ下付ヲ出願セサル者ニ限り解剖差許ス儀ト心得可然哉

第二條 前條遺骸解剖ノ儀ハ鑑ニ刑死者遺骸ノ下付ヲ乞フモノナキモノ外何人ニ不拘本人ノ情願ニアラサル者ト其遺屬者ノ承諾ヲ得サル者トハ解剖不相成旨神奈川縣へ御指令ノ趣モ有之候處甲第二十五號御達ニ依レハ死者ノ情願并ニ遺屬者ノ承諾ヲ要セサル儀ト心得可然哉

内務省指令 明治十八年十月廿二日

第一條 伺ノ通

第二條 伺ノ通

但既ニ二十四時問ヲ過キ假埋葬セシモノハ解剖ヲ許スヘカラサル者トス

●刑死者及死亡者解剖ノ件ニ付伺指令 明治十八年十一月七日 岡山縣伺

本年御省甲第二十五號ヲ以監獄則ニ掲クル所ノ刑死者及死亡者ニシテ親屬故舊其遺骸ノ下付ヲ請フ者ナキハ官公立醫學校若クハ病院ニ於テ該遺骸ヲ解剖實驗ノ用ニ供スル云々ノ儀御達相成候ニ付テハ右刑死者等解剖施行ノ節ハ同達但書ノ通死體解剖後總理シテ原體ニ復シ不都合無之様可致ハ無論ノ儀ニ有之候得共埋葬原體ニ復セシ上ハ適宜埋葬者クハ火葬ニ取計可然哉

内務省指令 明治十八年十二月一日

第一條 伺ノ通

第二條 伺ノ通

但既ニ二十四時問ヲ過キ假埋葬セシモノハ解剖ヲ許スヘカラサル者トス

●病死體解剖ノ件ニ付伺指令 明治十八年十二月四日 山形縣伺

病死體解剖ノ儀ハ醫術進歩ノ爲メ緊要ノ事柄ニ付雙方熟識ノ上郡役所へ届置候ハ、患部ノ剖觀不苦哉ノ旨伺出候者有之右ハ明治九年七月二十九日付三府へ御達ノ類例モ有之同様相心得可然哉

内務省指令 明治十八年十二月二十七日

第一條 伺ノ通

第二條 伺ノ通

但既ニ二十四時問ヲ過キ假埋葬セシモノハ解剖ヲ許スヘカラサル者トス

●醫術開業免狀出願ノ際誤記セル族籍等訂正出願ノ件ニ付照會回答 明治十八年十月三十日

醫術開業免狀出願ノ際誤記セル族籍等訂正出願ノ件ニ付照會回答 明治十八年十月三十日

醫術開業免狀出願ノ際誤記セル族籍等訂正出願ノ件ニ付照會回答 明治十八年十月三十日

醫術開業免狀出願ノ際誤記セル族籍等訂正出願ノ件ニ付照會回答 明治十八年十月三十日

醫術開業免狀出願ノ際誤記セル族籍等訂正出願ノ件ニ付照會回答 明治十八年十月三十日



靜岡縣 照會  
醫術開業免狀出願ノ際族籍姓名年齢等誤記ノ爲メ後日其訂正ヲ出願候者ハ明治十六年太政官第三十五號御布告第九條ノ部外ナル哉  
内務省衛生局回答 明治十八年十二月八日

明治十八年十月三十日付第六十號ヲ以テ醫術開業免狀出願ノ際族籍姓名年齢等誤記シタル者處分方ノ儀ニ付御照會ノ趣致了承候右ハ總テ醫師免許規則第八條第九條ノ手續ニ據リ出願爲致可然ト被存候條右様御領承有之度此段及御回答候也

賣藥規則沿革要領

明治三年十二月廿三日布告ヲ以テ賣藥取締規則ヲ定メ大學東校ニ於テ管ス○五年五月第四百四十二號布告ヲ以テ鼠取堀取藥等墨石ノ類ヲ加ヘタル賣藥ヲ禁ス○同年七月第二百二號布告ヲ以テ三年十二月廿三日布告賣藥取締ヲ廢ス○六年十二月第四百廿九號布告ヲ以テ賣藥取締ヲ文部省ノ管理トシ賣藥出願ノ者ハ該省ニ申出檢査ヲ受ケシ△○十年一月第七號布告ヲ以テ賣藥規則ヲ制定ス○十一年二月第四號布告ヲ以テ賣藥税金納方ヲ定メ

第一百十五 賣藥規則 明治十年一月二十日 布告第七號

賣藥規則別冊ノ通相定候條此旨布告候事

賣藥規則

第一章

十五年第五十號布告(第一百四十九)ヲ以テ賣藥印紙稅則ヲ定メ

第一條 此規則ニ稱スル處ノ賣藥トハ丸藥膏藥煉藥水藥浴劑散藥煎藥等ヲ調製シ効能書ヲ附シ販賣スルモノヲ云フ十年第八十九號布告ヲ以テ全條改正

第二條 此賣藥營業者ハ藥味分量用法服量功能ヲ詳記シタル書ニ族籍氏名ヲ記シ其管轄廳ニ願出免許鑑札ヲ受クヘシ十一年第二十七號布告ヲ以テ(管轄廳)ノ下八字ヲ削リ

但免許ヲ受ケタル者ニケ所以上ニ於テ之ヲ調製スル時ハ其箇所毎ニ免許鑑札ヲ受クヘシ十五年第五十二號布告ヲ以テ但書ヲ追加ス

第三條 管轄廳ニ於テハ願書ヲ檢査シ其製藥配伍ノ藥品劇毒微毒ニ拘ハラヌ取扱上失誤ヲ生シ易キモノ及ヒ毒藥劇藥取締ニ關係スルモノハ之ヲ許サ、ルヘシ十一年第二十七號布告ヲ以テ(內務省)ヲ(管轄廳)ト改メ(毒藥)ノ下(劇藥)ノ二字ヲ加フ

第四條 (第八條ニ記シタル期限中)藥味分量用法服量能書ヲ改正セント欲スル者其由ヲ届出舊鑑札ヲ返納シテ更ニ新鑑札ヲ願受クヘシ

第五條 賣藥ヲ請賣セント欲シ其營業者ノ許諾ヲ得タルモノハ族籍氏名ヲ記シタル願書ニ營業者所持ノ免許鑑札寫及ヒ營業者ト取結ヒタル約定書トヲ添ヘ其管轄廳ヘ願出免許鑑札ヲ受クヘシ十年第八十九號布告ヲ以テ全條改正シ十一年第七號布告ヲ以テ(鑑札ヲ受)ノ下十三字ヲ削リ(ク)ノ一字ヲ加フ

第六條 賣藥營業者及ヒ請賣者共必ス免許ノ看板ヲ掲クヘシ

第七條 賣藥營業者及ヒ請賣者ニ於テ自ラ行商シ又ハ賣子ヲ派出シテ行商ヲ爲サシメント欲スルハ其由ヲ管轄廳ヘ届出行商鑑札ヲ願受ケ行商スル時ハ必ス之ヲ所持スベシ

第八類 第一章 醫業 賣藥 藥品

第八條 營業鑑札請賣鑑札行商鑑札ハ其鑑札記載ノ月ヨリ滿五年ヲ以テ免許ノ期限トス此期限ヲ過キ尙免許ヲ得ント欲スルモノハ舊鑑札ヲ返納シ更ニ新鑑札ヲ願受クヘシ（營業免許期限）ヲ廢ス五日前令第七十二號ヲ以テ

第九條 (第八條ニ記シタル期限中)第四條ノ改正發賣ヲ願出之ヲ免許スル時ハ新鑑札記載ノ月ヲ以テ一期ノ初月トナスヘシ

第十條 免許(期限)内ト雖ヒ其製藥第三條ニ掲クル處ノ有害品ナルヲ更ニ發見スル時或ハ營業者製藥ヲ粗惡ニスル等ノコアル時ハ直ニ鑑札ヲ取上ケ發賣ヲ禁止スルコアルヘシ（有害）ヲ(有害)ニ改ム年第二十七號布告ヲ以テ

第十一條 營業者廢業スルカ又ハ禁止セララル、時ハ其請賣者及ヒ賣子共其販賣ヲ許サス

第十二條 諸鑑札ヲ遺失シ又ハ水火盜難ニ因テ毀失シタル時ハ其仔細ヲ詳記シテ管轄廳へ届出再ヒ之ヲ願受クヘシ

第十三條 免許鑑札ヲ他人ニ讓渡サント欲スル者ハ雙方連印ノ願書ヲ管轄廳ニ差出シ名前書換ヲ請フヘシ

第十四條 賣藥營業者及ヒ請賣者免許期限中其相續人ニ於テ之ヲ相續スル時ハ其由ヲ記シ管轄廳へ鑑札名前書換ヲ請フヘシ十年第八十九號布告ヲ以テ全條改正

第十五條 賣藥營業者廢業シ若シハ禁止セラレタルトハ營業者ハ勿論其請賣者ニ於テモ總テ諸鑑札ヲ返納スヘシ

第二章

第十六條 賣藥營業者ハ左ノ通税金並鑑札料ヲ上納スヘシ十四年第六號布告ヲ以テ(賣藥營業者)ノ下(及ヒ請賣者)ノ五字ヲ削リ(右鑑札料)ノ次(賣藥請賣鑑札料)及ヒ(賣藥行商鑑札料)ノ二項ヲ削ル

賣藥營業稅  
藥劑一方ニ付一ケ年  
金貳圓

右鑑札料  
藥劑一方ニ付一枚  
金二十錢

但第二條但書ニ依リ免許鑑札ヲ受クル者ハ其箇所毎ニ本文ノ税金并鑑札料ヲ納ムヘシ十五年第五十二號布告ヲ以テ但書ヲ追加ス

第十七條 水火盜難ニ因リ鑑札ヲ毀失シ更ニ新鑑札ヲ願受ル時ハ其鑑札料ノ半高ヲ納ムヘシ

第十八條 税金ハ毎年兩度ニ區分シ前半年分ハ一月三十一日限り後半年分ハ七月三十一日

限リ鑑札料ハ其都度並ニ管轄廳ニ上納スヘシ

第十九條 税金ハ六月以前免許ノ者ハ全年分七月以後ハ半年分廢業ノ者ハ七月以後ハ全年分六月以前ハ半年分ヲ納ムヘシ

但第十條ノ有害品ナルヲ更ニ發見セシ時ニ限リ月割ヲ以テ税金ヲ納メシムヘシ十一年第十七號布告ヲ以テ(有害)ニ改ム

第二十條 無鑑札又ハ鑑札ヲ借受ケ自ラ行商シ又ハ行商セシムル者及ヒ之ヲ貸ス者又ハ期

第八類 第一章 醫藥 賣藥 藥品

十一年第四號  
布告(第百四  
十七)ノ一項  
ヲ以テ税金納  
期ヲ改正ス

十一年第十六號  
ヲ以テ第三章

同則ハ來ル六  
月一日ヨリ施  
行ノ旨ヲ布告  
ス

限過タル鑑札ヲ以テ自ラ行商シ又ハ行商セシムル者ハ其鑑札ヲ取上ケ藥劑一方ニ付五圓ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十一條 無鑑札又ハ鑑札ヲ借受ケ又ハ期限過キタル鑑札ヲ以テ請賣スル者及ヒ無鑑札ノ者ヲシテ請賣セシメ又ハ鑑札ヲ貸ス者ハ其鑑札ヲ取上ケ製藥ヲ没入シ藥劑一方ニ付十圓ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十二條 免許ヲ受ケヌシテ私ニ藥味分量用法服量能書等ヲ改更シ又ハ許可ヲ經スシテ無稽ノ妄說ヲ記載シ世人ヲ街惑スル者ハ其鑑札ヲ取上ケ製藥ヲ没入シ藥劑一方ニ付十圓以上二十五圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十三條 無鑑札ニテ營業スル者又ハ營業者ニシテ私ニ請賣者ニ藥劑ヲ調製セシムル者又ハ請賣者自ラ之ヲ調製スル者ハ其製藥及ヒ賣得金ヲ没入シ藥劑一方ニ付二十五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ十四年第六號布告ヲ以テ營業スル者ノ下卅八字ヲ追加ス

第二十四條 諸鑑札ヲ偽造シ又ハ他人ノ賣藥ヲ贋造シテ發賣スル者ハ其製藥及ヒ其賣得金ヲ没入シ藥劑一方ニ付五十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十五條 私ニ有毒藥ヲ配伍スル者ハ其鑑札ヲ取上ケ製藥及ヒ其賣得金ヲ没入シ藥劑一方ニ付百圓以上五百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十六條 以上ノ犯則者ヲ見届ケ訴出ル者アル時ハ事實取糺ノ上相違ナキニ於テハ其賞トシテ其罰金ノ半高ヲ與フヘシ

十四年内乙第  
廿五號達ヲ以  
テ請賣行商及  
鑑札料ノ一項  
ヲ削除ス

〔一〕賣藥取扱手續 明治十年三月十二日 内務省達乙第三十二號府縣

本年一月太政官第七號賣藥規則公布相成候ニ付テハ左ノ手續書及書式雛形ニ照準取扱可申此旨相達候事

一 昨明治八年七月以降當省ニ於テ下附候賣藥鑑札ハ追テ相達候迄免許發賣共當分書替爲願出ニ不及規則公布後相達候鑑札同様相心得ヘシ

一 前條ノ鑑札所持ノモノ營業免許年季ハ其鑑札ニ記載ノ月ヨリ起算スヘシ尤税金ノ儀ハ本年分ヨリ徵收スヘキニ付昨九年マテノ分ハ納メシムルニ及バズ

但鑑札料ノ總テ上納爲致定期納附ノ節勘定帳ニ其區分ヲナスヘシ

一 營業鑑札請賣鑑札ハ所持人ノ居家ニ限リ營業ノ權アルモノニ付別戶支店等ニ於テハ別ニ其居住人ニ於テ鑑札ヲ所持スルニ非サレハ營業スルヲ得ヘカラス 十年内務大藏兩省達乙第六十五號ヲ以テ本項ヲ追加ス

一 前條營業鑑札所持ノ賣藥ヲ請賣又ハ行商業致シ居候分來ル四月三十日マテニ悉皆爲願出鑑札交付取計フヘシ同上達ニ關スルヲ以テ除之

一 賣藥營業者並ニ請賣者免許看板ハ左式ノ通製セシムヘシ

堅、三尺

寸法同上

許免 賣藥營業

出

許免

賣藥請賣業

一 税金并ニ請賣札料納附ノ節ハ上納証ヲ添ユルノミニ勘定帳ハ一ヶ年取束子毎年八月三十一日限リ該地差立大藏省租稅局ヘ進達スヘシ

但シ會計年度ノ都合モ有之本年一月ヨリ六月マテノ分ハ別帳ニ製シ八月三十一日限リ該地差立同局ヘ進達スヘシ同上達ヲ以テ全項ヲ改正ス

一 行商鑑札ハ各管關ニ於テ雛形ノ通之ヲ製シ願入ニ下附スヘシ尤行商スル藥劑ハ其方名ヲ一ヶ鑑札ニ記載スヘシ

第八類 第一章 醫業 賣藥 藥品

但一人ニシテ數人ノ藥劑ヲ行商スル時ハ方數ニ拘ハラズ營業者異ナル毎ニ鑑札ヲ別製シテ之ヲ渡スヘシ  
 一行商鑑札ヲ下附シタル分ハ其都度明細簿ニ登記シ置キ每半年分宛別ニ一本ヲ調製シ一月七月ノ兩度内務省ニ開申ス  
 一 十四年乙第廿五號省令  
 一 賣藥營業稅並諸鑑札料上納勘定帳簿形 十年内務大藏兩省達乙第  
 六十五號ヲ以テ全項改正  
 明治何年七月ヨリ同何年六月マテ賣藥營業稅並諸鑑札料任上勘定帳  
 賣藥營業願書式

明治八年當省乙第九十八號達雜形ニ照準スヘシ  
 賣藥營業鑑札雜形 十一年乙第七十號省達  
 賣藥改正願書式(用紙美濃紙)  
 賣藥改正願

府大小區國郡町番地  
 營業人 族籍 氏 名

一方名  
 藥品(分量)  
 製法  
 用法服量  
 功能  
 右者何年月日御検査濟鑑札御下渡營業任候處今般何々ノ廉左之通改正仕度御差支無之候ハ、鑑札御書替被下度此段奉  
 願候也  
 一改正ノ廉ヲ詳記スヘシ

年月日

願人 氏 名 印  
 區長或ハ醫務取締 氏 名 印

賣藥請賣鑑札願書式(用紙同上)  
 管轄廳長官氏名宛

一方名 一同 一同 一同  
 賣藥請賣願  
 右營業人 府大小區國郡町番地 族籍 氏 名

但營業者異ナレバ縱令一方タリモ必ス各營業者ノ族籍住所氏名ヲ上ノ例ニ倣ヒ之ヲ區別シテ書記スヘシ  
 右之賣藥幾方今般請賣仕度依テ別紙營業者へ御免許之御指令寫並約定書相添此段奉願候也

年月日 管轄廳長官氏名宛  
 請賣願人 族籍 氏 名 印

賣藥請賣約定書

一方名 一同上 一同上 一同上 一同上  
 右者何某ノ官許ヲ得タル賣藥ニシテ今般何某請賣可致示談相整ヒ候ニ付請賣者ニ於テ請賣鑑札ヲ願受營業者ノ製調シ  
 タル賣藥ヲ取次販賣致スヘシ然ル上ハ營業者鑑札免許期限内ハ總テ賣藥ニ關スル御規則及ヒ御達ノ趣旨ヲ遵守シ不正  
 ノ所業致ス間敷候依テ約定書如件

年月日 府大小區國郡町番地  
 賣藥營業人 族籍 氏 名 印